—茨城県土浦市—

# 大宮前遺跡

—真鍋小学校校舎改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2004

土　浦　市
土浦市教育委員会
大宮前遺跡調査会

—茨城県土浦市—

おお　みや　まえ

# 大宮前遺跡

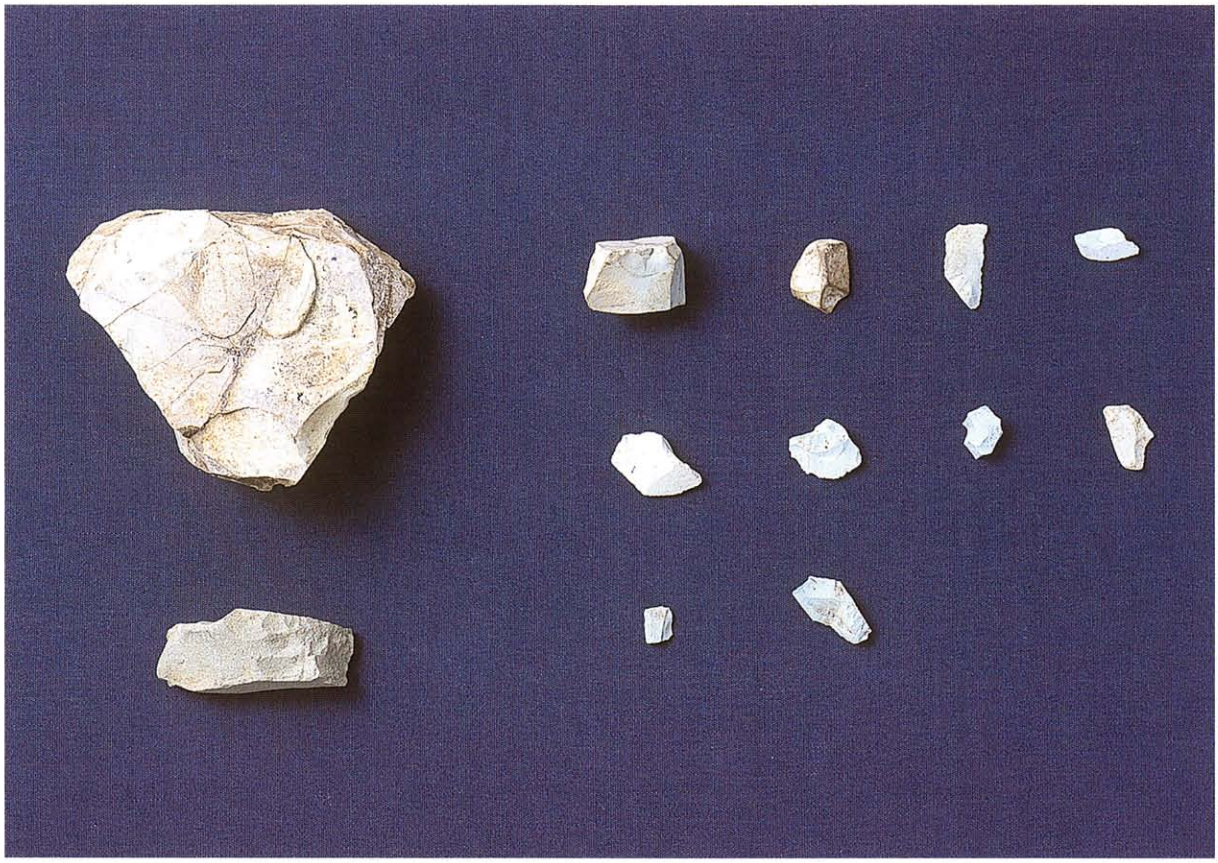
—真鍋小学校校舎改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2004

土　浦　市
土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会

県指定天然記念物「真鍋の桜」

第１号住居跡出土土器



第２号住居跡他出土玉作り関連遺物

第１号方形竪穴遺構他出土陶磁器

# 序

土浦市は霞ヶ浦や桜川の水に恵まれ、太古から人々が生活するのに適したところであり、市内には貝塚、古墳、集落跡等数多くの遺跡が存在しています。

遺跡は当時の様子を知る手掛かりとなることは勿論、現代の私達が豊かに生活することのできる先人の偉業の一つでもあります。

このような貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えることは私達の大切な責務であり、郷土土浦発展のためにも重要なことと思います。

この度の調査は、県指定天然記念物の「真鍋の桜」で知られる真鍋小学校校舎の改築事業に伴い実施されたものです。

本小学校校庭には、地上に見事な枝ぶりを誇る桜樹が存すると同時に、地下には埋蔵された大宮前遺跡が存在しています。

大宮前遺跡の発掘調査によって、古墳時代の集落跡や平安時代から鎌倉時代の建物跡が確認され、また、戦時中の防空壕の跡も確認されました。

出土品としては、古墳時代の集落跡からは当時の人々が使用した土器が見つかり、平安時代から鎌倉時代の建物跡では、当時の中国から輸入された磁器も出土しております。

本調査によって、市内真鍋地区の古代文化の究明にいささかなりとも役立つことができますなら幸甚であります。

最後になりましたが、調査から報告書の刊行にあたり、関係各位の皆様のご協力とご支援に対しまして、心から厚く御礼申し上げます。

平成16年3月

土浦市教育委員会
教育長　冨永　善文

# 例　　言

1、本書は大宮前遺跡調査会が実施した、土浦市真鍋四丁目3-1番地に所在する大宮前遺跡の発掘調査報告書である。

2、発掘調査は事業者である土浦市が計画する、真鍋小学校校舎改築事業に伴う事前調査として実施したものである。

3、大宮前遺跡の試掘調査は平成14年8月21日に黒澤春彦（上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員）が担当した。発掘調査は平成15年5月26日から平成15年7月10日まで実施した。出土品の整理及び報告書の作成は、平成15年12月4日より平成16年3月16日まで行った。

4、大宮前遺跡調査会組織

| | |
|---|---|
| 会　長 | 須田直之（土浦市文化財保護審議会長） |
| 副会長 | 石毛一美（土浦市教育委員会教育次長） |
| 理　事 | 大塚　博（土浦市文化財保護審議会委員） |
| 理　事 | 来栖忠雄（土浦市役所建築指導課長） |
| 理　事 | 広瀬昌則（土浦市教育委員会文化課長） |
| 監　事 | 堀越昭二（土浦市博物館協議会委員） |
| 監　事 | 大内誠二（土浦市役所監査事務局長補佐） |
| 事務局長 | 宇津野利雄（上高津貝塚ふるさと歴史の広場館長） |
| 事務局次長 | 三須洋一（上高津貝塚ふるさと歴史の広場館長補佐） |
| 事務局員 | 加藤寛治（上高津貝塚ふるさと歴史の広場主査） |
| | 石川　功（上高津貝塚ふるさと歴史の広場係長） |
| | 黒澤春彦（上高津貝塚ふるさと歴史の広場主幹） |
| | 比毛君男（上高津貝塚ふるさと歴史の広場主幹） |
| | 堀部　猛（土浦市教育委員会文化課主幹） |
| 事務局員兼出納員 | 関口　満（上高津貝塚ふるさと歴史の広場主幹） |

○発掘作業

| | |
|---|---|
| 調査担当 | 関口　満 |
| 現地調査作業員 | 飯村二美　石黒　勇　榎戸洋子　海老原龍生　大久保敦子　小野　豊　佐賀　実<br>竹内政江　土田幸子　露久保三郎　寺嶋靖子　友部政夫　中島とみ子　中島秀雄<br>中野富美子　長谷川はるみ　平林敬子　松浦博子 |
| 事務員 | 鈴木ひと美 |

○整理作業

| | |
|---|---|
| 調査担当 | 関口　満 |
| 調査員 | 福田礼子 |
| 整理調査作業員 | 新井栄子　大坪美知子　小松﨑廣子　坂寄さち　長嶺道子　長谷川はるみ　浜田久美子 |

5、大宮前遺跡の発掘調査は関口　満（上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員）が担当した。出土遺物の整理及び報告書の作成は関口が担当し、福田礼子（上高津貝塚ふるさと歴史の広場埋蔵文化財臨時職員）が補佐した。本書の原稿執筆は、旧石器時代の遺物について窪田恵一氏にご協力頂いた他、関口が担当した。また、石器の実測についても窪田恵一氏にご協力頂いた。

6、発掘調査及び出土品の整理に関わり、次の諸氏又は諸機関のご協力・ご教示を賜った。記して謝意を表したい。

（敬称略）

茨城県教育委員会　茨城県県南教育事務所　土浦市教育委員会学務課　土浦市広報公聴課　土浦市立真鍋小学校　駒澤大学考古学研究会　石橋　充　小野寿美子　窪田恵一　小松崎博一　嶋田圭吾　種石　悠　塙弘世　望月明彦　吉澤　悟

7、遺構写真は現地調査担当者が撮影し、遺物写真撮影は嶋田圭吾氏にご協力頂いた。また、口絵の「真鍋の桜」の写真は、土浦市広報公聴課の所蔵するポジフィルムを借用し掲載した。写真図版（ＰＬ１）は国土地理院が撮影したものを使用した。

8、本書に関わる出土品及び記録図面・写真などは一括して上高津貝塚ふるさと歴史の広場に保管してある。なお、記録や遺物の整理・保管に際して、大宮前遺跡の出土資料についてはＭＯＭの略称を付している。

# 凡　例

1、大宮前遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標を原点として、Ｘ＝10,476m、Ｙ＝33,636mの交点を基準点（Ａ－１区）とした。調査区は、この基準点をもとに調査範囲内を20ｍ四方の大調査区に分割し、さらに調査区を東西及び南北に各々５等分し、４ｍ四方の小調査区（グリッド）を設定した。調査においては４ｍ四方の小調査区を基本として使用し、大調査区は特別に名称を与えていない。調査区の名称はアルファベットとアラビア数字を用い、北から南へ１、２、３、･･･とし、西から東へＡ、Ｂ、Ｃ･･･とし、Ａ－１区のように呼称した。

2、遺構・土層に使用した記号は次のとおりである。

遺構　竪穴住居跡・方形竪穴遺構･･･ＳＩ、掘立柱建物跡…ＳＢ、土坑･･･ＳＫ、
柱穴・ピット･･･Ｐ、溝･･･ＳＤ、不明遺構…ＳＸ、近現代遺構…ＧＫ

古墳時代前期の竪穴住居跡内　原則としてＰ１～Ｐ４･･･主柱穴、Ｐ５･･･入り口ピット、Ｐ６･･･貯蔵穴

土層　Ｋ･･･撹乱　　Ｐ･･･土器

3、遺構・遺物実測図中の表示は以下のとおりである。

焼土･･　砂質粘土･･

赤彩･･　陶器（釉）･･　黒色処理土師器（内面）･･　繊維土器（断面）･･

この他の実測図中の表示は、その図面中に指示してある。

4、土層観察と遺物における色調の同定は、『新版標準土色帖』（小山正忠、竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用した。

5、本書中の遺構、遺物の表示は次のとおりである。

（1）水糸レベルは海抜高度を示す。

（2）遺物番号は本文、挿図、写真図版とも一致する。

（3）遺構の縮尺は基本的に1／60で、遺構内施設などについては1／30である。遺構全体図は1／150である。これ以外の縮尺の図面もあり、それらについてはスケールを変えてある。

（4）遺物の縮尺は原則として土器が1／3、土製品は1／2で示した。器種や大きさにより異なる場合もあり、それらについては個々にスケールを変えてある。

（5）「主軸方向」は竪穴住居跡内の場合、主柱穴の2ヶ所の中間地点を結んだ長軸線が座標軸からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。土坑などの場合は長軸方向を主軸として角度を計測した。例（N－23°－E）。

（6）遺構の計測値で（　）で表現されたものは推定値である。遺物観察表中の計測値欄のAは口径、Bは器高、Cは底径を示す。また器高欄の（　）は現存高を表し、口径・底径の〔　〕は回転復元径を表す。

（7）遺物観察表中の胎土の項目における◎・○・△の表記は、◎･･･多量、○･･･中量、△･･･微量を意味する。これらの判断は明確な基準があるわけではなく、主観的なものである。

（8）遺物観察表中の備考には、特記事項を記した。

# 目　次

口絵
(県指定天然記念物「真鍋の桜」、第１号
住居跡出土土器、第２号住居跡他出土玉作り
関連遺物、第１号方形竪穴遺構他出土陶磁器)

序
例言
凡例
第１章　調査の経緯と経過……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査経過　……1
第２章　周辺の環境　……3
　第１節　地理的環境　……3
　第２節　歴史的環境　……3
　第３節　「真鍋の桜」と真鍋小学校……6
第３章　遺跡の調査　……9
　第１節　調査の概要　……9
　第２節　基本層序　……9
　第３節　遺構と遺物　……10
　　１．旧石器時代の調査 ……10
　　２．竪穴住居跡 ……13
　　３．方形竪穴遺構 ……40
　　４．土坑 ……43
　　５．溝 ……49
　　６．ピット群 ……50
　　７．掘立柱建物跡 ……56
　　８．不明遺構 ……63
　　９．近現代遺構 ……65
　　10．遺構外出土遺物 ……69
第４章　調査のまとめ ……71
写真図版
報告書抄録

# 挿図目次

第１図　発掘調査区位置図 ……2
第２図　周辺の遺跡位置図 ……5
第３図　遺構全体図 ……7
第４図　基本層序 ……9
第５図　旧石器時代遺物出土状況　……11
第６図　旧石器時代出土遺物（１）……11
第７図　旧石器時代出土遺物（２）……12
第８図　第１号住居跡……14
第９図　第１号住居跡遺物出土状況……15
第10図　第１号住居跡出土遺物（１）……17
第11図　第１号住居跡出土遺物（２）……18
第12図　第１号住居跡出土遺物（３）……19
第13図　第２号住居跡　……23
第14図　第２号住居跡出土遺物（１）……25
第15図　第２号住居跡出土遺物（２）……26
第16図　第３号住居跡・出土遺物　……28
第17図　第４号住居跡　……30
第18図　第４号住居跡出土遺物　……31
第19図　第６号住居跡　……33
第20図　第６号住居跡出土遺物　……34
第21図　第８号住居跡　……36
第22図　第９号住居跡　……38
第23図　第９号住居跡出土遺物　……39
第24図　第１号方形竪穴遺構・出土遺物　……41
第25図　土坑・出土遺物（１）……44
第26図　土坑・出土遺物（２）……46
第27図　第１・２号溝……49
第28図　調査区内東部ピット群　……51
第29図　調査区内中央部ピット群……53
第30図　ピット群出土遺物……55
第31図　第１号掘立柱建物跡……57
第32図　第２号掘立柱建物跡　……58
第33図　第１・２号不明遺構・出土遺物……64
第34図　第19号近現代遺構（防空壕跡）出土
　　遺物　……66
第35図　第19号近現代遺構（防空壕跡）……67
第36図　遺構外出土遺物　……70

# 写真図版目次

PL 1　米軍航空写真（昭和22年撮影）
PL 2　調査区（東）、調査区（中央）
PL 3　調査区（西）調査区全景（西側から）
PL 4　基本層序（GK19内東壁）、
旧石器時代調査区土層、
旧石器時代遺物出土状況
PL 5　第1号住居跡、第1号住居跡遺物出土状況、
第1号住居跡遺物出土状況
PL 6　第2号住居跡、第3号住居跡、第4号住居跡
PL 7　第6号住居跡、第6号住居跡炉、
第6号住居跡遺物出土状況
PL 8　第8号住居跡、第9号住居跡、
第1号方形竪穴遺構
PL 9　P 5土層、第1号掘立柱建物跡P 1土層、
P 107遺物出土状況
PL10　第1号土坑、第14号土坑、
第24号土坑遺物出土状況
PL11　第31号土坑、第35号土坑貝出土状況、
第38号土坑
PL12　第1号不明遺構、第1号不明遺構土層、
第2号不明遺構
PL13　第1号溝、第19号近現代遺構（防空壕跡）、
第19号近現代遺構（防空壕跡）
PL14　第19号近現代遺構（防空壕の階段）、
当時の防空壕について語る塙氏（中央左）、
調査前風景
PL15　旧石器時代出土遺物
PL16　住居跡出土遺物（1）
PL17　住居跡出土遺物（2）
PL18　住居跡出土遺物（3）
PL19　住居跡出土遺物（4）
PL20　住居跡出土遺物（5）
PL21　住居跡出土遺物（6）
PL22　住居跡出土遺物（7）
PL23　住居跡出土遺物（8）、方形竪穴遺構出土遺物、ピット群出土遺物（1）
PL24　ピット群出土遺物（2）、土坑出土遺物（1）
PL25　土坑出土遺物（2）、不明遺構出土遺物、
近現代遺構出土遺物
PL26　遺構外出土遺物

# 第１章　調査の経緯と経過

## 第１節　調査に至る経緯（第１図）

大宮前遺跡は、土浦市の計画する真鍋小学校校舎改築事業に伴って発掘調査に至ることとなった。以下はその調査に至る経緯について述べる。

そもそも、真鍋小学校の校庭に埋蔵文化財が存在することについては、校庭が盛土・整地されていることから全く知られていなかった。しかしながら、1998（平成８）年２月13日に市教委文化課による県指定天然記念物「真鍋の桜」の樹勢回復事業が発端となり、発見されることになった。校庭中央に５株ある桜のうち、中央の桜の根本を掘削していたところ、地面から25㎝ほどの深さから黒褐色の土と古墳時代前期の高坏（第36図９）や甕形土器の破片が出土した。このような状況をかんがみ、周知の遺跡として考え、2001（平成11）年度に実施された茨城県による遺跡地図改定に伴って周知の遺跡として登録した。

その後、土浦市により真鍋小学校校舎改築事業の計画がなされた。このことに関して、校舎改築事業実施の担当課となる市教育委員会学務課では、2002（平成12）年12月に校舎改築計画に係る桜樹への影響調査を実施することになった。この調査では、校庭を一定間隔で坪掘りする地下樹形根系分布調査も行われ、上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員が掘削に立会うことになった。この立会いは12月26日・27日に行い、坪掘りした数地点から遺構覆土らしいものが確認された。

2002（平成14）年には真鍋小学校校舎改築事業エリアが学務課から文化課に提示され、このうちの既存校舎部分を除く約900㎡について、８月21日に埋蔵文化財確認調査を実施することとなった。調査は、試掘溝３本（総面積206㎡）を既存校舎（本館）と並行して運動場に設定した。その結果、古墳時代の竪穴住居跡７軒、時期不明土坑１基と溝１条が確認された。遺構確認面には全域にわたり瓦やコンクリート・砂利が埋められている撹乱が見られ、遺構の遺存状況は良くない。しかしながら、遺跡の範囲は既存の校舎部を除く改築事業対象地内の全域に広がることが予想された。

以降は確認調査のデータをもとに、発掘調査の準備が進められた。実際には2003（平成15）年５月26日から７月10日まで発掘調査を行った。

なお、今回の発掘調査にあたっては、調査エリア内の桜の根には細心の注意を払うことが留意された。実際に発掘調査中において、桜の細根が検出された場合には、学務課に連絡し樹木医から指導を受ける体制で調査に臨んだ。

## 第２節　調査経過

２００３(平成１５)年

５月２６日　表土排除開始。仮囲い設置開始。

２７日　表土排除終了。

２８日　仮囲い設置終了。方眼測量実施終了。

２９日　午後から器材の搬入。

３０日　発掘調査開始。遺構確認。

３１日　台風４号の影響で作業中止。

６月　３日　方眼杭打ち。調査エリア内の東側遺構全体図作成。ＳＫ・ＧＫの覆土排除。

６日　川上一夫氏（樹木医）来訪、調査エリア内の桜の根の状況を確認する。

７日　ＧＫ19（防空壕跡）完掘写真撮影。竪穴住居跡調査開始。

１０日　発掘調査と併行して仮設校舎プレハブ基礎根切り工事立会い実施。

１１日　ＳＩ-２内より緑色凝灰岩出土。真鍋小学校４年生発掘調査見学。元真鍋小学校教員の塙弘世氏が来訪し、戦時中の真鍋小学校の状況を伺う。

１２日　仮設校舎プレハブ基礎根切り立会い実施。川上氏が来訪し桜の細根の切除及び防腐処理を実施。

１３日　ＧＫ19内壁面のローム層を分層。真鍋小学校４年生発掘調査見学。

１４日　ＳＩ-１遺物出土状況写真撮影。同遺物出土状況図実測。

１８日　真鍋小学校４年生発掘調査見学。

２０日　遺構平面図実測。土浦市文化財保護審議会委員による調査見学。

２７日　真鍋小学校先生見学。調査区内の東側全景を校舎屋上より撮影。

７月　１日　ピット群の平面図実測。

２日　旧石器時代の調査。ＳＩ-２内覆土の水洗い選別。

３日　調査区西側全景を校舎屋上より撮影。

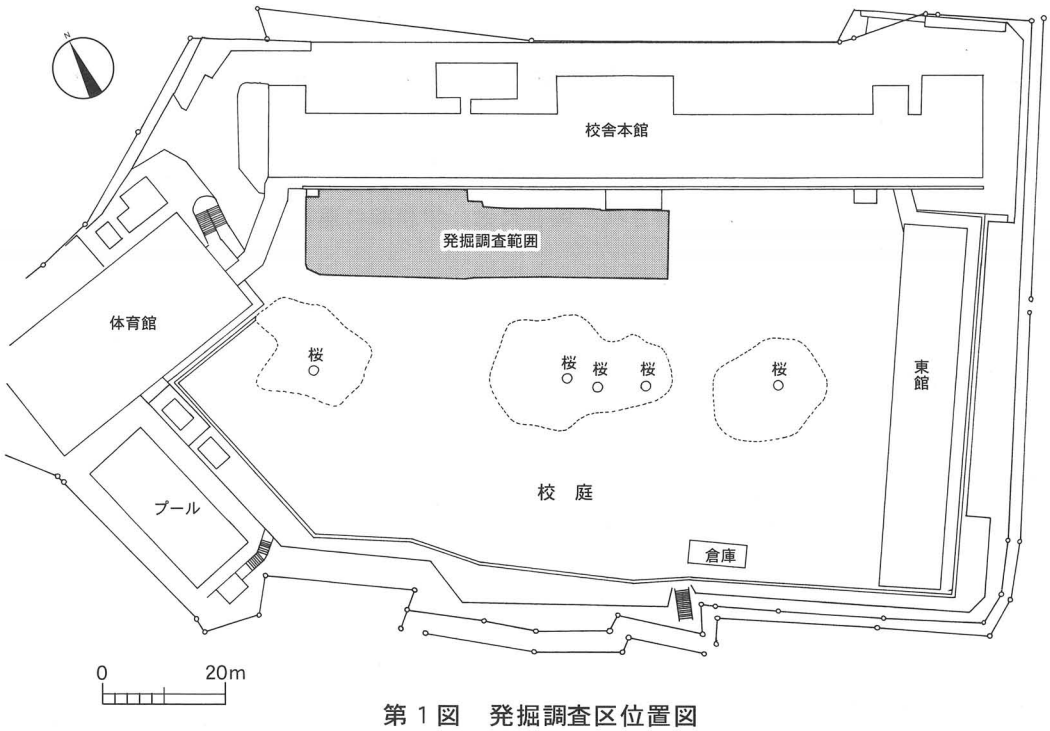
５日　器材撤収。

１０日　調査区仮囲撤去。調査区内の埋め戻し・転圧。調査終了。

１２月　４日　整理作業開始。

２００４（平成１６）年

３月１６日　整理作業終了。




第１図　発掘調査区位置図

# 第２章　周辺の環境

## 第１節　地理的環境（第２図　ＰＬ１）

土浦市は茨城県南地区のほぼ中央に位置し、人口約13万5000人を数え、面積約91.5㎢の市である。周辺市町村として、市域の東側に新治郡霞ヶ浦町、北側は新治郡千代田町・同郡新治村、西側はつくば市、南側は牛久市・稲敷郡阿見町と接している。市域の地理的特徴として、北部には筑波山塊から南東に伸びる新治台地、中央部を古鬼怒川によって形成された桜川低地、東部には霞ヶ浦（土浦入り）、南部は筑波・稲敷台地から成り立っている。

大宮前遺跡は、桜川北岸の標高26～27ｍの新治台地上に立地し、同台地が最も南側の桜川低地に張り出した部分に位置する。また、同台地は桜川低地から北西方向へ入り込む中小河川によって谷が刻まれ、台地が大きなまとまりで分割されている。

遺跡の現況は、土浦市立真鍋小学校敷地内となっており、校庭の南側は桜川低地から入り込む小さな谷に面している。同小学校の北側には茨城県立土浦第一高等学校が隣接し、東側には土浦市立第二中学校が所在する。終戦直後のこの地域の航空写真を見ると、台地上には先の学校以外に大きな建物はなく一面の畑地が広がっているが、現状は隙間なく市街化が進んでいる。

遺跡の立地する新治台地の地質は、手野層を基盤とし、その層序は下層から成田層下部、成田層上部、竜ヶ崎砂礫層、常総粘土層、新期火山灰層（いわゆる関東ローム層）と続く。遺跡東方の木田余の台地露頭では、手野層の上面まで地表面から約９ｍもある。手野層や成田層は海底で堆積したものとされ、やがて「古東京湾」が退いていく時に竜ヶ崎砂礫層が堆積したとされる。関東ローム層は、富士・箱根起源の火山灰が堆積したものである。

## 第２節　歴史的環境（第２図　ＰＬ１）

以下は、大宮前遺跡の周辺に確認されている遺跡について、発掘調査が実施されたものを中心に取り上げ、歴史的な痕跡などについても加えて概観してみる。

まず、旧石器時代についてであるが、発掘調査で関東ローム層中から石器集中地点が確認されたものとして、宝積遺跡(11)が挙げられる。同遺跡では、立川ローム軟質部（ソフトローム）を中心として、径２ｍの範囲に削器１点、調整剥片１点、二次加工のある剥片１点、剥片２点が出土した。これらの石器の石材は珪質頁岩や安山岩からなる。この他、ローム層中以外の出土として、東台遺跡(10)でチャート製のナイフ形石器や、御灵遺跡(９)のチャート製の削器などが出土している。東山団地遺跡(12)でも黒曜石製のナイフ形石器が出土している。

発掘調査により縄文時代の遺構・遺物が確認された遺跡として、尻冷南遺跡(13)、東台遺跡(10)、御灵遺跡(９)、籾買場遺跡(８)などが挙げられる。尻冷南遺跡では、早期前半の稲荷台式土器や早期後半の茅山下層式土器が出土し、後者の時期と考えられる炉穴が確認された。東台遺跡では、中期後半の加曽利Ｅ１式期の竪穴住居跡が２軒と、103基の土坑群が確認された。これらの土坑は「中峠式」期から加曽利Ｅ１式期のものである。御灵遺跡では、加曽利Ｅ１式期から加曽利Ｂ１式期の竪穴住居跡が４軒と、土坑が135基確認された。これらの土坑は、中期中葉の阿玉台式期や「中峠式」期のものが多い。この他に、加曽

利Ｅ４式期から堀之内１式期の土坑も確認された。この他に、過去において真鍋小学校に隣接した土浦第一高等学校敷地内では縄文時代前期の土器が採集されたらしく興味深い（註1）。

弥生時代の遺構・遺物の発掘調査事例は、宝積遺跡(11)、東台遺跡(10)、東山団地遺跡(12)で見られる。宝積遺跡では後期後半期の竪穴住居跡が30軒確認され、東台遺跡でも後期後半期の竪穴住居跡が11軒と土器棺墓が２基確認された。また、東山団地遺跡では中期末葉から後期前葉の竪穴住居跡が５軒確認されており、市内では数少ない調査事例といえる。出土遺物として東山団地遺跡の竪穴住居跡からは、粘板岩製の磨製石鏃が出土しており興味深い。

古墳時代の遺構・遺物の発掘調査事例として、古墳と集落遺跡に分けて述べる。まず、古墳として東台古墳群(10)や殿里台古墳(５)が挙げられる。この他に、現況で所在を確認できるものとして浅間塚古墳(２)や真鍋愛宕神社古墳(４)、殿里古墳(６)が存在する。東台古墳群では全部で19基の古墳が調査され、墳形は前方後円形のものが12基、円墳が５基、方墳が２基である。これらの古墳は古墳時代終末期のもので、調査前に盛り土を確認できたものは少ない。多くの古墳の主体部には、片岩製の板石を組んだ箱式石棺が埋置されていた。出土遺物としては直刀や鉄鏃・耳環が見られ、多数の土製丸玉が出土したものもある。

古墳時代の集落遺跡の調査事例として、東真鍋八坂前遺跡(１)、浅間塚西遺跡(２)、宝積遺跡(11)、籾買場遺跡(８)、御昊遺跡(９)、東山団地遺跡(12)などがある。東真鍋八坂前遺跡は、現在の土浦市立第二中学校敷地内にあたり、昭和20年代に中学校建設に伴って古墳時代の竪穴住居跡が20軒ほど発掘調査されたと伝えられている。籾買場遺跡や御昊遺跡では多数の古墳時代の竪穴住居跡が確認されており、特に中期から後期のものが多いようである。宝積遺跡では古墳時代前期のものが目立つ。

この他、浅間塚西遺跡では、滑石製管玉を製作したと想定される前期の玉作り工房跡が１軒確認されている。また、東山団地遺跡では、鍛冶炉や鉄滓、鞴の羽口、金床石破片が出土した後期初頭の鍛冶工房跡が1軒発見された。

奈良・平安時代の遺構・遺物の調査事例としては、籾買場遺跡(８)や宝積遺跡(11)、そして八幡下遺跡(７)などで確認されている。八幡下遺跡は台地上というより、桜川低地に面する緩斜面に立地する。宝積遺跡では火葬骨を収めた蔵骨器が3基確認されている。

この他、推定の域は出ないが、大宮前遺跡の西方付近には古代東海道の路線が想定されている（図中のＡ―Ｂを結ぶライン付近)。Ａの田中八幡神社付近から北東方向に、途切れながらも直線的にＢまで伸びる現状の道路付近がそれにあたる。このＡ―Ｂライン付近は部分的に大字の境界ともなっている。興味深いことに、このライン付近の小字名には「長道路」や「西長土路」が存在する。

中近世の遺構・遺物の調査事例としては、御昊遺跡(10)で見つかった地下式坑があり、瀬戸・美濃系陶器が出土している。また田中八幡遺跡(15)では中近世の遺物が表面採集されている。(14)は木田余城跡であり、以前まで水田の中に城跡の痕跡らしきものが見られた。この他、真鍋小学校校舎本館東側付近は、南北方向に鎌倉街道の存在が想定され、史指定史跡とされている。しかしながら、現状の道路との関係は不明瞭である。

近世には、この真鍋付近は水戸街道が開通し、街道沿いに町並みが整備された。現状でも国道125号線の一部と旧水戸街道が重なり並行している。

註釈

註1）国学院大学蔵資料の中に土浦第一高等学校出土の縄文時代前期の土器片があることを石川功氏からご教示頂いた。

第２図　周辺の遺跡位置図

## 第3節　「真鍋の桜」と真鍋小学校（第1図　口絵）

真鍋小学校の創設は、1877(明治10)年に西真鍋にあった長松院を改築して真鍋学校が開校されたことによる。その後、1882(明治15)年に真鍋小学校と改称し、1907(明治40)年に現在の地に木造瓦葺平屋の校舎を新築した。この校舎新築時の記念樹として桜の苗木が植えられた。それらが歳月を経る中、学校及び地域の人々により見守られ、現在の県指定天然記念物「真鍋の桜」となっている。

これらの桜樹は、現状では校庭の中央に存在するが、苗木を植樹した当時は校庭の南側の縁に植えられたものであった。1928(昭和3)年などの小学校校庭の拡張に伴って、校庭が南側に拡張されると同時に、桜樹は校庭内に取り込まれ、現在のような一風変わった学校の風景が出来上がった。

この「真鍋の桜」は、1956(昭和31)年に茨城県指定天然記念物の指定を受けている。現在は5株の大きな桜樹が小学校校庭の中央に一列に並ぶように残っている。桜樹の種類はいずれもソメイヨシノである。これらの桜樹の樹齢は、植樹された年から数えると90年以上が経過しており、一般的なソメイヨシノの寿命からすれば相当な樹齢を重ねているといえる。これらの桜樹は老齢のせいか一時衰えを見せたことがあったが、1996(平成8)～1997(平成9)年の樹勢回復事業によって現在は健全な状態であるとされる。

この「真鍋の桜」は、現在でも新入生を迎える頃には、大きく広がった枝の先々には花が咲き誇る。そして、この時期、真鍋小学校では上級生が新入生をおぶってこの桜樹を巡るお花見集会が恒例となっている。

**参考文献**


豊崎　卓「眞鍋台の古代住居址群」『霞浦文化』No.4　霞浦文化同好會1953

真鍋郷土史研究会「まなべ」創刊号1970

土浦市立真鍋小学校創立百周年記念事業実行委員会「創立百周年記念誌　なでしこ」1977

土浦市教育委員会「土浦市史別巻　土浦歴史地図」1974

茨城県教育委員会「茨城県遺跡・古墳発掘調査報告書Ⅵ」1991

土浦市教育委員会「八幡下遺跡」1991

土浦市教育委員会「木田余台Ⅰ」1991

コロナ社「茨城県　地学のガイド」地学のガイドシリーズ3　1995

土浦市教育委員会「東山団地遺跡」1996

土浦市教育委員会「尻冷南遺跡」1999

土浦市教育委員会「木田余台Ⅱ」2002

木下　良編「古代を考える　古代道路」吉川弘文館　1996

茨城県教育委員会「茨城県遺跡地図」2001

B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
2
3
4
5
6
7
8
9
N
倉庫
GK24
GK37
GK26
GK31
GK28
GK22
GK36
GK18
GK21
GK23
GK27
GK35
GK16
SI-9
SD2
SD1
GK17
SK36
SI-8
GK38
GK34
GK39
GK15
SK27
SK26
SK25
GK20
GK14
GK30
GK43
GK42
SK17
SK31
SK40
SK41
SK18
SK24
GK19
SI-7
SK35
SI-6
GK1
SK34
GK16
SK32
SX2
SK38
SK33
GK2
SX1
SK19
SK37
GK11
GK12
SK8
SI-4
SI-3
GK6
SK10
GK7
旧石器時代調査区
SK23
SK13
SK12
SK11
GK3
SK14
GK4
SI-2
SK22
GK28
SK9
SK6
SI-1
GK13
SK3
SK2
SK1
0
5m

第３図　遺構全体図

# 第３章　遺跡の調査

## 第１節　調査の概要（第３図　PL2･3）

大宮前遺跡の発掘調査は、約700㎡の調査区を設定して実施した。発掘調査を行った調査区は、小学校校舎（本館）に並行している。その規模は、東西方向約60m、南北方向約12mの長方形の調査区となっている。東方の調査区校舎側には池・国旗掲揚場などがあり、調査対象からはずした。

発掘調査区内からは、竪穴住居跡が７軒、方形竪穴遺構が１軒、掘立柱建物跡が２棟やピット群、土坑、溝、不明遺構、近現代遺構が確認されている。確認された竪穴住居跡のうち、ほとんどのものは古墳時代前期のもので、１軒のみが古墳時代後期のものであった。方形竪穴遺構や掘立柱建物跡、そしてピット群等は平安時代から鎌倉時代にかけてのものと考えられる。この他、近現代の遺構として防空壕跡が確認されるなど、狭い調査区の中から数多くの遺構・遺物が発見された。

この他、調査終了時には調査区東側の関東ローム層を掘り下げたところ、旧石器時代の遺物が出土しており、長年にわたる人々の痕跡がこの小学校校庭の下に遺存していたことが判明した。

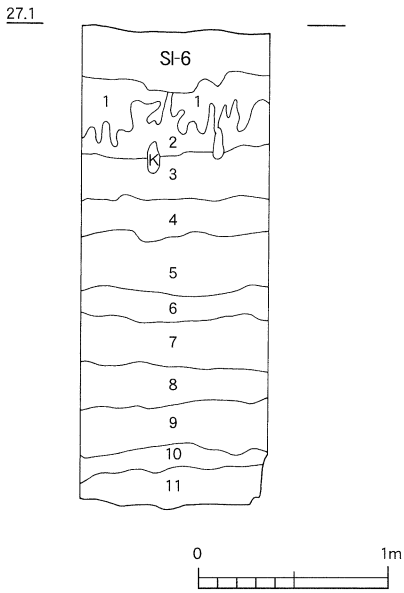
## 第２節　基本層序（第４図　ＰＬ４）

今回の調査は、関東ローム層上面を確認面として表土排除を行い遺構の調査を実施した。調査区内には旧表土が転圧され薄く遺存し、その上に校庭造成による盛土がなされていた。調査区内の基本層序として、防空壕跡であるＧＫ19内東壁の観察を行った。土層は以下のとおりである。

第１層　褐色（7.5YR4/6）軟質ローム層　炭化物粒子（径～1㎜）を僅かに含む。明褐色ロームブロックや２層のロームブロックを取り込んでいる。立川ロームⅢ～Ⅶ層の軟質部分に相当する。下部の硬質ローム層に対して楔状に入り込んでいる。

第２層　褐色（7.5YR4/4）硬質ローム層　黒色スコリヤ（径～1㎜）を多量に、赤褐色スコリヤ（径～2㎜）を僅かに含む。１層との層理面付近には白色粒子（径～0.5㎜）を僅かに含む。立川ロームⅦ～Ⅸ層の第２暗色帯に相当する。

第３層　褐色（7.5YR4/6）硬質ローム層　黒色粒子（径～0.5㎜）を僅かに含む。赤城鹿沼軽石（Ag - KP）降下層準と考えられるが、軽石粒子は認められなかった。




第４図　基本層序

第４層　褐色（7.5YR4/6）硬質ローム層　黒色粒子（径～１㎜）を多量に含む。

第５層　明褐色（7.5YR5/8）硬質ローム層　青灰色粒子（径～0.5㎜）を多量に、赤褐色粒子（径～0.5㎜）を僅かに含む。ローム層の中では最も硬質で、鎌掛け作業でも抵抗感が強い。多量に含まれていた青灰色粒子は、南関東地方で検出されるＢＣＶＡ（青灰色不発泡質火山灰）に相当する。現地にて採取したサンプルを水洗選別した結果、輝石・石英粒のほかに磁鉄鉱石粒を多量に含むことを確認した。

第６層　褐色（7.5YR4/6）軟質ローム　青灰色粒子（径～0.5㎜）を多量に含む。７層との層理面付近に縦方向に発達した隙間が認められ、軟質部となる。

第７層　褐色（7.5YR4/5）硬質ローム　青灰色粒子（径～0.5㎜）を僅かに含む。武蔵野ローム暗色層に相当する。

第８層　明褐色（7.5YR5/8）硬質ローム層　黒褐色スコリヤ（径～１㎜）を多量に、赤褐色スコリヤ（径～１㎜）を僅かに含む。

第９層　明褐色（7.5YR5/8）硬質ローム層　赤褐色スコリヤ（径～１㎜）を僅かに含む。

第10層　黄褐色（10YR5/8）硬質ローム　灰白色粒子（径～１㎜）や赤褐色粒子（径～１㎜）を多量に含む。僅かながら箱根東京軽石（Hk - TP）ブロック（径～30㎜）を含む。

第11層　黄褐色（10YR5/8）粘土層　以下、常総粘土層となる。

## 第3節　遺構と遺物

### 1．旧石器時代の調査（第５～７図　ＰＬ4･15）

**調査の状況**

今回の調査では調査区の東側のＬ～Ｎ-６区において、旧石器時代の遺物・遺構の検出を目的として調査区を設定した。この調査区を設定する経緯は、ＳＫ11やSI-1の覆土から旧石器時代のものと考えられる珪質頁岩の剥片などが出土したことによる。

調査区の規模は東西方向がおよそ８ｍで、南北方向が３ｍである。遺物・遺構検出のために掘り下げた関東ローム層は、第１層が軟質ローム層である。土層中には炭化物粒が若干含まれる。第２層は、硬質ローム層で微小な黒色粒を多く含んでいる。第３層は第２層よりはやや軟質になる硬質ローム層である。色調は上層よりも暗味が増し、土層には微小な黒色粒・赤色粒が含まれ、第１層や第２層より炭化物粒の含まれる割合が高い。

出土遺物は珪質頁岩の石器４点とチャート礫１点が、調査区の北側を中心にまとまって出土している。出土した層位は、およそ第２層を中心として出土している。この他、調査区外から黒曜石や黒色安山岩剥片が出土している。

**ローム層内出土の旧石器**（第６図１～４）

ローム層内からは石器４点と円礫１点が出土した。器種は剥片で、石材種は珪質頁岩１種２個体（S.Sh-１・２）である。珪質頁岩１（S.Sh-１）は構成点数１点、オリーブ灰色で白色の節理面が認められる。珪質頁岩２（S.Sh-2）は構成点数３点、明オリーブ灰色で白色の節理面が認められる。S.Sh-１よりも表面が風化していて、やや軟質の様だ。剥片の形状の特徴は横長形を基本形としていて、剥離角が129度から133度と大きい。そして打点から縦割れを起こし、剥片剥離時に同時の器体損壊を生じている点である。背面側の剥離面を観察すると、腹面側と剥離方向が一致しない資料が主体を占めている。剥離角の大きさと背面構成などから、打面転位作業を頻繁に経過している剥片剥離であると考える。なお、旧石器調査区内に重複したSK11と南側に位置するSI-１覆土中から、珪質頁岩（S.Sh-１）の同一個体剥片が出土している。

**遺構外出土の旧石器**（第７図５～15）

ローム層調査区以外からも、旧石器時代の石器と認定した資料が10点出土している。SK11から剥片１点（7）、SK14から剥片３点（９～11）、SI-１から剥片５点（６、８、12～14）、仮校舎プレハブ建設地点から剥片１点（15）の合計10点である。

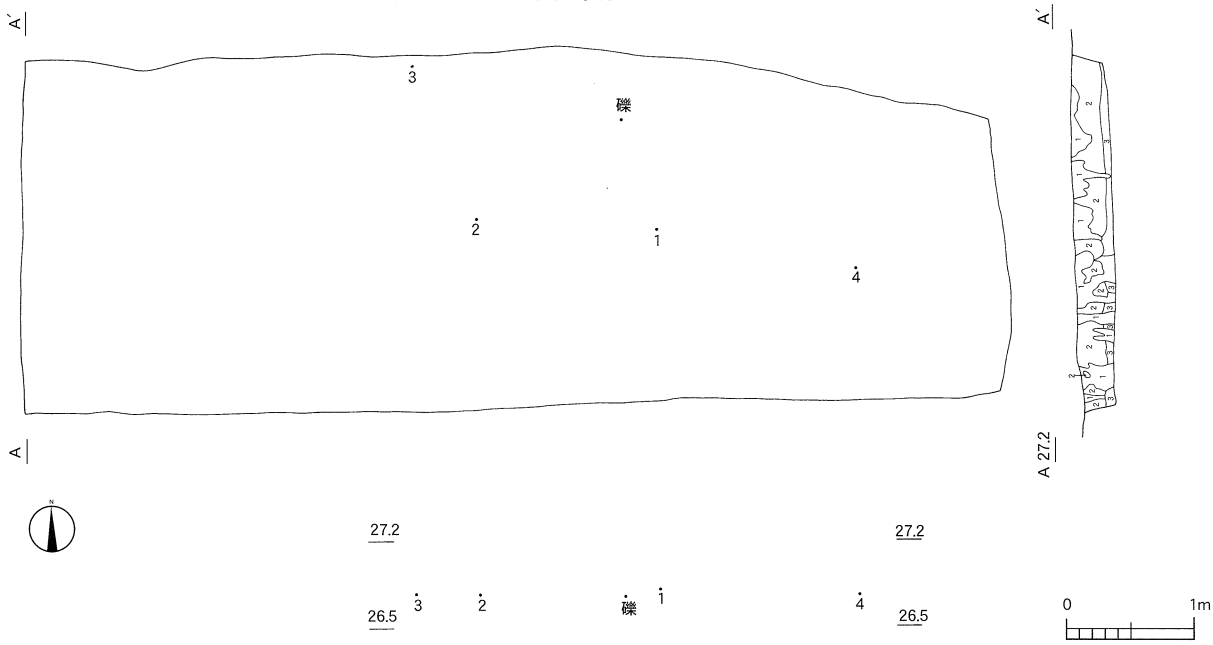
５はSI-１からの剥片１点（６）とSK11からの剥片１点（７）の接合状態を示す実測図である。この資料は旧石器時代調査区出土の珪質頁岩（S.Sh-１）と同一個体で、調査区周辺には多数の剥片が埋没していた可能性を示唆する資料と考えた。６の剥離では剥離末端側で階段上破壊（ステップフラクチャー）を生じている。６の剥離以降で７の剥離までに３枚以上の剥離面が形成されているが、末端に蝶番状剥離（ヒンジフラクチャー）を生じることが多かった様だ。８は一部に「ズリ面」が残る剥片で、二次加工状の小さな剥離面が側縁に認められる。９は背面に鱗状で剥離規模10㎜程の連続する剥離面が認められることから、ナイフ形石器や角錐状石器など二次加工石器の側面をやや大きく除去した際に剥離した剥片と理解した。10・11は小規模な剥片で、線状打面であることから二次加工石器を製作した際に生じる調整剥片の可能性が高い。８～11は蛍光Ｘ線照射による黒曜石産地推定作業を実施しており、分析結果で栃木県高原山北麓の甘湯沢産の黒曜石と判明している。12は線状打面を残す剥片。13・14は黒色安山岩の剥片で背面の風化程度と衝突痕の様相から茨城県中央部の那珂川産の黒色安山岩と判断した。15は珪質頁岩の縦長

剥片である。

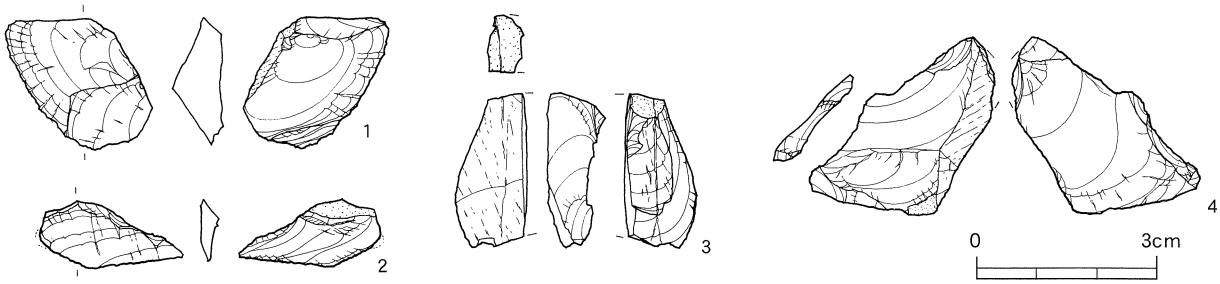
今回の大宮前遺跡の調査では、少数ながら確実にローム層中からとその調査区周辺に位置する後世の遺構内覆土中から旧石器時代の石器が出土した。出土層位と石器の剥片剥離の様相、さらに使用石材の様相から石器の製作時期を考えてみた。確実な資料には珪質頁岩製の横長剥片があり、遺構外出土資料にも同一個体の接合関係を示す資料が存在する。分析作業によって確認した高原山産黒曜石製の石器は、土浦市域では20,000年前頃をピークとする利用傾向が高いことが近年の発掘調査によって確認され、今回の資料もほぼ一致する資料であると考えている。また那珂川産のガラス質黒色安山岩が出土しており、同じく古鬼怒川（現在の桜川）左岸台地に位置する山川古墳群第２次調査地点出土の石器群や市域南部を流れる花室川右岸に位置する向原遺跡の石器群と類似点が多い。武蔵野台地編年のⅤ層～Ⅳ層下部段階に相当すると捉えた。一方、オリーブ灰色を呈する珪質頁岩の出土例は土浦市域では少なく、褐色系の珪質頁岩や硬質頁岩を多用する地域からみると、西方の大宮台地や武蔵野台地での使用石材に類似する。石器石材利用の多様性が調査以前までの想定と異なり、今後注目すべき資料である。15は縦長剥片であり、自然面に平行する変色域を形成する暗灰黄色の頁岩で、他の資料とは異なる時期の可能性を指摘しておきたい。

旧石器時代調査区

1　10YR4/6　褐色　ソフト化したローム層　上面に姶良・丹沢火山灰（AT）と思われる火山ガラスが多く見られる。炭化粒若干出土。剥片出土。
2　10YR4/6　褐色　ハード化したローム層　微細な黒色粒多量、ATも見られる。
3　7.5YR4/6　褐色　ハード化したローム層　２層より軟質で暗味増す、微細な黒色粒・赤色粒混入。ATと思われるもの含む。１・２層より炭化粒多量。




第５図　旧石器時代遺物出土状況




第６図　旧石器時代出土遺物（1）

第７図　旧石器時代出土遺物（2）

旧石器調査区出土石器

| 遺物No. | 図版No. | 器種 | 石材 | 個体No. | 接合No. | 長さmm | 幅mm | 厚さmm | 重量g | 打面形状 | 剥離角 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 第6図1 | 剥片 | 珪質頁岩 | S.Sh-2 | | 31.1 | 26.6 | 8.2 | 2.9 | 単剥離面 | 133 | |
| 2 | 2 | 剥片 | 珪質頁岩 | S.Sh-2 | | 21.4 | 23.3 | 8.1 | 3.3 | 単剥離面 | 129 | |
| 3 | | 礫 | チャート | | | | | | 111.1 | | | 未実測 |
| 4 | 3 | 剥片 | 珪質頁岩 | S.Sh-2 | | 11.4 | 23.9 | 4.7 | 0.9 | 自然面 | | |
| 5 | 4 | 剥片 | 珪質頁岩 | S.Sh-1 | | 25.8 | 11.9 | 9.5 | 2.8 | 自然面 | 103 | |

旧石器調査区外出土石器

| 遺物No. | 図版No. | 器種 | 石材 | 個体No. | 接合No. | 長さmm | 幅mm | 厚さmm | 重量g | 打面形状 | 剥離角 | 分析No. |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 第7図6 | 剥片 | 珪質頁岩 | S.Sh-1 | 1 | 16.4 | 25.0 | 5.3 | 1.8 | 複剥離面 | 109 | |
| | 7 | 剥片 | 珪質頁岩 | S.Sh-1 | 1 | 18.0 | 28.6 | 5.5 | 2.1 | 単剥離面 | 129 | |
| | 8 | 剥片 | 黒曜石 | | | 24.5 | 12.9 | 8.7 | 2.9 | | | TUK2-13 |
| | 9 | 剥片 | 黒曜石 | | | 17.3 | 6.3 | 5.0 | 0.3 | 単剥離面 | | TUK2-15 |
| | 10 | 剥片 | 黒曜石 | | | 9.4 | 11.2 | 2.1 | 0.1 | 線状 | | TUK2-16 |
| | 11 | 剥片 | 黒曜石 | | | 10.3 | 12.3 | 1.7 | 0.2 | 線状 | | TUK2-17 |
| | 12 | 剥片 | 珪質頁岩 | | | 23.7 | 29.5 | 7.9 | 4.5 | 線状 | | |
| | 13 | 剥片 | 黒色安山岩 | | | 45.0 | 26.8 | 13.5 | 17.0 | | | |
| | 14 | 剥片 | 黒色安山岩 | | | 39.6 | 19.0 | 12.4 | 10.6 | | | |
| | 15 | 剥片 | 珪質頁岩 | | | 35.0 | 17.8 | 5.9 | 2.2 | 点状 | 110 | |

## 2．竪穴住居跡

竪穴住居跡は調査区内に７軒確認され、SI-4は古墳時代後期のもので、それ以外はいずれも古墳時代前期のものと考えられる。竪穴住居跡は、全体的に調査区内の南側に見られた。

**第１号住居跡(ＳＩ-１)**（第８～12図　ＰＬ5･16～19）

**位置**　調査区の東端で、Ｌ～Ｎ-７・８グリッドで確認され、ＳＫ９･14やＳＢ１を含むピット群とも重複し、これらが新しい。

**規模・平面形**　台形のような隅丸長方形で、長径6.25m、短径5.42mである。

**主軸方向**　Ｎ－72°－Ｗ。

**壁面**　西壁の一部がＳＫ14により壊されている。壁は床から外傾して立ち上がる。確認面から床の最深部までは45㎝を測る。壁溝の幅は５～10㎝で、深さ４～６㎝を測り、東側で一部途切れる以外は全周している。

**床面**　柱穴と壁溝の間にプランとほぼ相似形の硬化面が広がる。床面直上の柱穴と壁溝の間に、焼土の堆積が見られた。

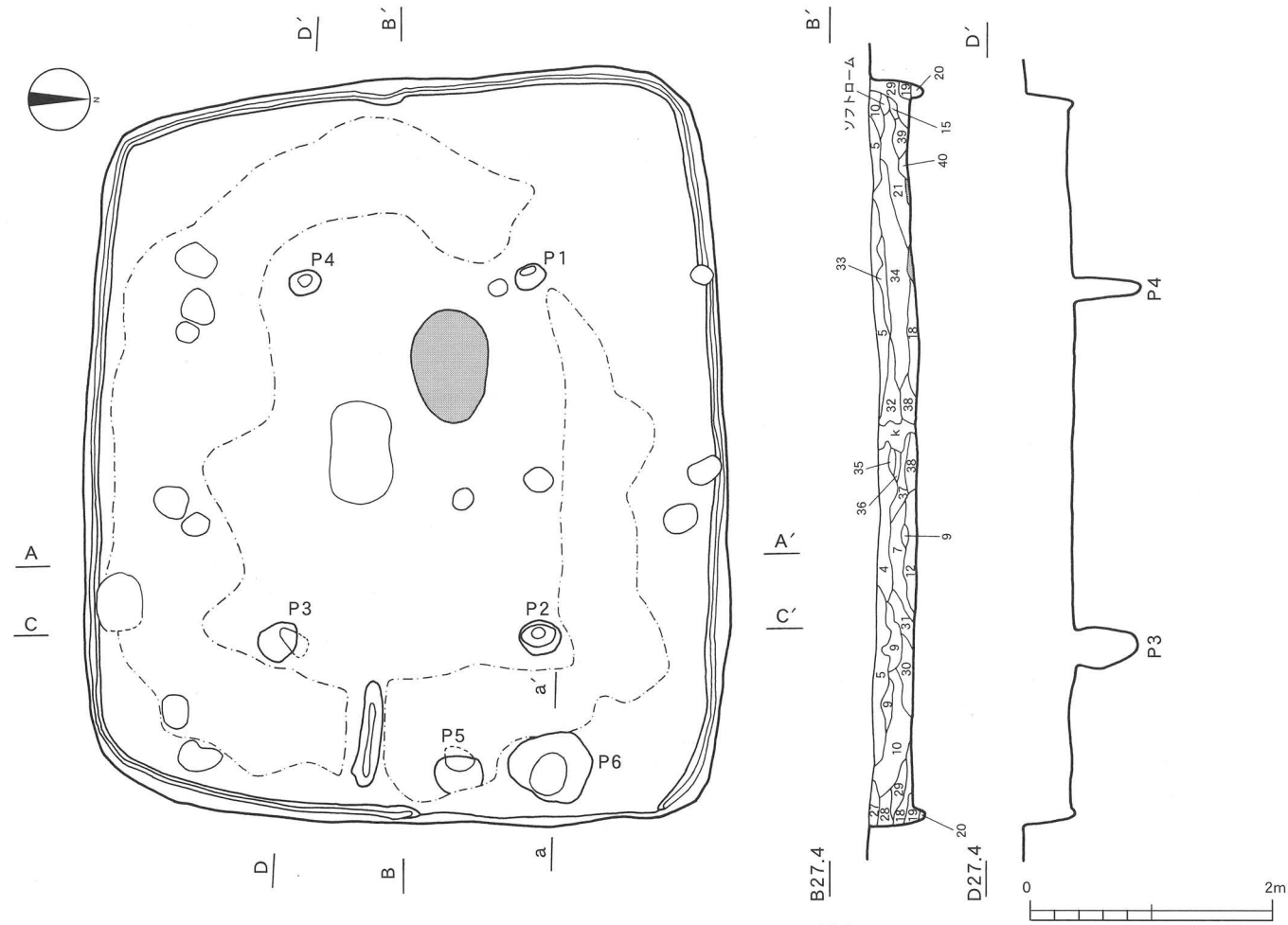
**ピット**　Ｐ１～Ｐ４は主柱穴と考えられる。Ｐ１は平面形が円形で、27×21㎝、深さ55㎝を測る。Ｐ２は楕円形で、34×29㎝、深さ52㎝を測る。Ｐ３は楕円形で、33×30㎝、深さ55㎝を測り、Ｐ２方向へオーバーハングしている。Ｐ４は楕円形で、27×20㎝、深さ54㎝を測る。Ｐ５は入り口ピットと考えられ、平面形は楕円形を呈し、40×29㎝、深さ37㎝を測り、炉の方向にオーバーハングしている。Ｐ５は貯蔵穴と考えられ、平面形が不整形で70×60㎝、深さ30㎝を測る。Ｐ５の南側に浅い長楕円形のピットが存在し、88×19㎝、深さ６㎝である。

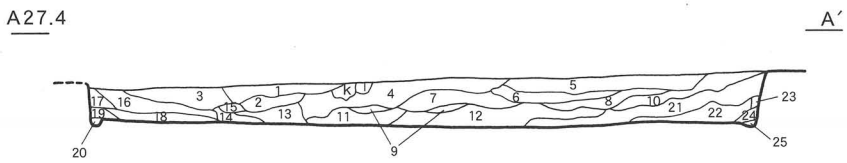
**炉**　中央やや奥壁寄りに地床炉が１ヶ所確認されている。平面形は楕円形で94×63㎝、ほとんど掘り込みは見られず、調査時においても竹串で覆土を排除する状況であった。炉は全面焼け固まり、細かな凹凸が見られた。

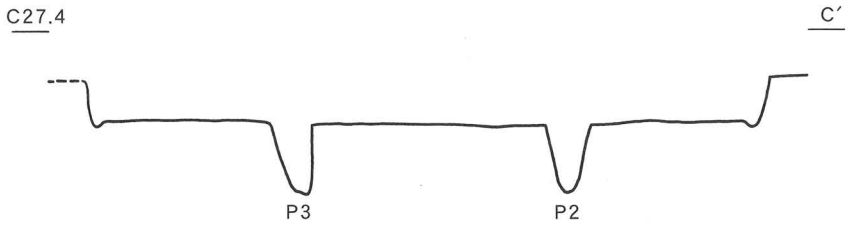
**覆土**　40層に分層できた。土層の特徴として、壁際から中央に向い傾斜して堆積する状況が見られ、壁際では厚く中央ほど薄くなる傾向が理解でき、土層の堆積が壁際ほど早い状況が確認できる。全体的に褐色から暗褐色の色調を示す。竪穴住居跡内の中央部分で確認された第７層は、ロームのブロックや粒が比較的多く含まれ、他の土層に含まれる炭化物や焼土粒は含まれていない。覆土中からは、壁際を中心として焼土の堆積が確認されている。これらの焼土は、壁際ほど出土位置が高いレベルで確認され、床面中央に向かうほど床面直上に近い状況が確認されている。

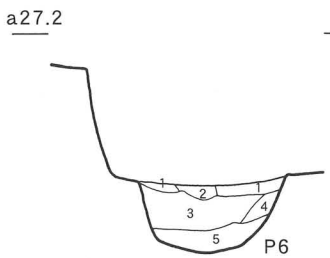
**出土遺物**　竪穴住居跡の北東コーナー部と、炉と西壁の間の２ヶ所から土器が集中して出土している。北東コーナー部出土の遺物は、No.２・５・６・７・10･11･12が重なるように出土し、やや離れてNo.１・13が出土している。炉と西壁の間からは、No.３・４・８・９・14･15･16･17･20が出土している。前者のまとまりからは大型の破片や完形に近いものが出土し、後者からは細かな破片が床面に張り付くように出土している。そして、接合関係は後者のものが広範囲で接合している。これらの出土遺物は、数点を除きほぼ床面直上より出土している。

No.１～６は壺形土器で、No.１・３・５・６には赤彩が施されている。No.６は南関東系の壺形土器であり、縄文が施文されている。No.７～14は甕形土器であり、これらの中でNo.13は台付甕である。そして、No.７～10




SI-1 P6

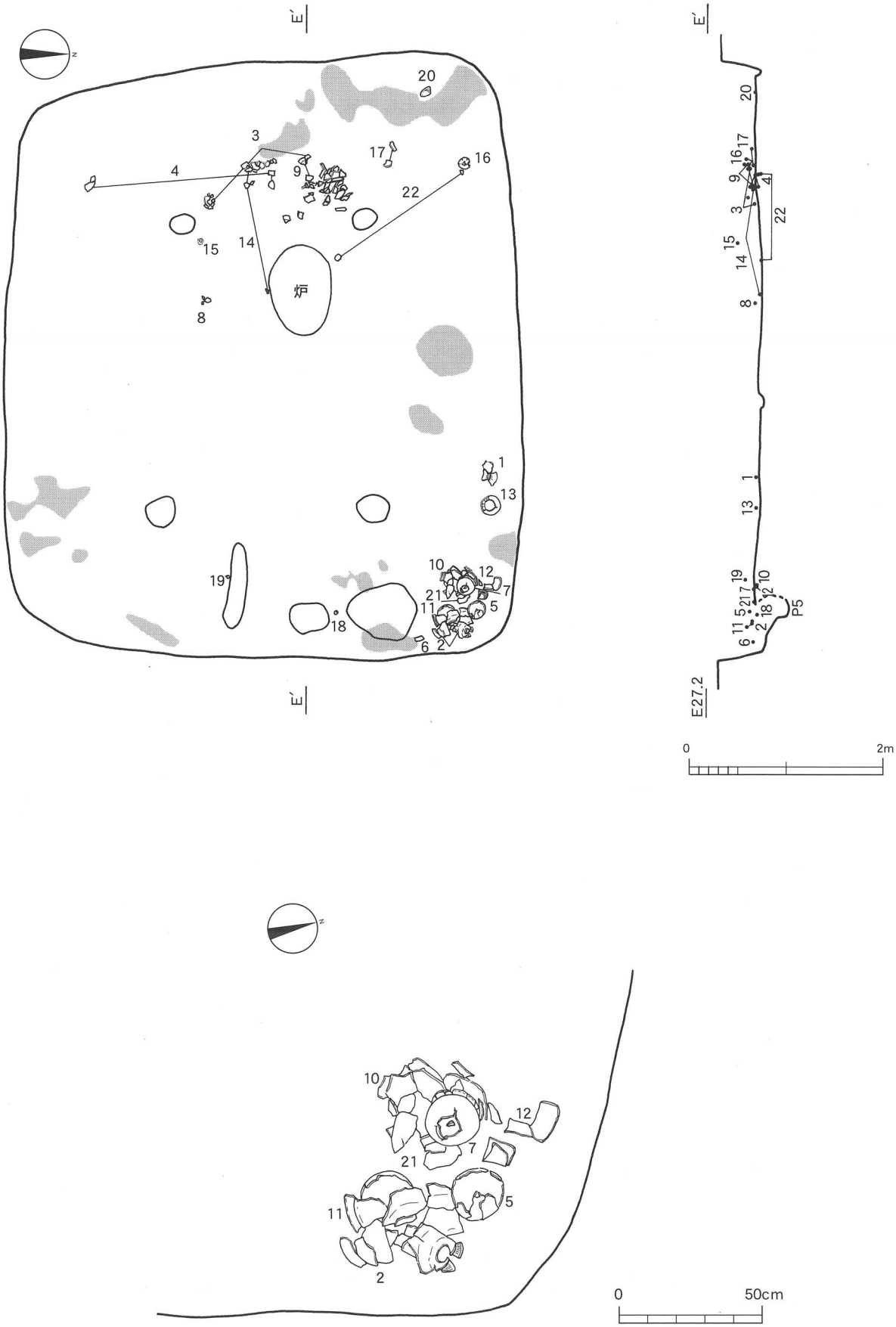
| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | 7.5YR3/4 | 暗褐色 | ローム粒中量、焼土小・粒中量、炭化粒少量、ローム小少量　粘性・しまり弱 |
| 2 | 5YR4/6 | 赤褐色 | 焼土ブロック |
| 3 | 7.5YR4/6 | 褐色 | ローム粒多量、炭化物微量　しまり弱 |
| 4 | 7.5YR4/4 | 褐色 | ローム粒中量、ローム中微量　しまり弱 |
| 5 | 7.5YR4/4 | 褐色 | ローム粒少量、炭化物微量 |

0　1m

SI-1

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | 7.5YR 4/4 | 褐色 | ローム小・粒中量、ローム中少量、焼土小微量、炭化物微量、ローム大微量　粘性・しまり弱 |
| 2 | 7.5YR 4/6 | 褐色 | ローム大・粒中量、炭化物微量　しまり弱 |
| 3 | 7.5YR 3/4 | 暗褐色 | ローム小中量、ローム粒少量、焼土粒微量、炭化粒微量　粘性・しまり弱 |
| 4 | 7.5YR 4/6 | 褐色 | ローム粒多量、ローム大中量、焼土中・粒微量　粘性弱 |
| 5 | 7.5YR 4/6 | 褐色 | ローム粒中量、炭化物微量、ローム大・中・小微量 |
| 6 | 7.5YR 3/4 | 暗褐色 | ローム粒少量、焼土小微量、炭化物微量、ローム大・中・小微量 |
| 7 | 7.5YR 4/6 | 褐色 | ローム粒多量、ローム大中量、ローム中少量 |
| 8 | 7.5YR 4/4 | 褐色 | ローム粒中量、ローム中少量、焼土粒微量　しまり弱 |
| 9 | 7.5YR 3/3 | 暗褐色 | ローム粒少量　しまり弱 |
| 10 | 7.5YR 3/4 | 暗褐色 | ローム小中量、焼土小微量、炭化物微量　粘性・しまり弱 |
| 11 | 7.5YR 4/4 | 褐色 | 炭化粒中量、ローム小・粒少量、炭化物微量　粘性・しまり弱 |
| 12 | 7.5YR 3/4 | 暗褐色 | ローム小少量、焼土小微量、炭化物微量　粘性・しまり弱 |
| 13 | 7.5YR 3/4 | 暗褐色 | ローム小少量、炭化物微量、ローム中微量　粘性・しまり弱 |
| 14 | 7.5YR 4/6 | 褐色 | ロームブロック　しまり弱 |
| 15 | 7.5YR 3/3 | 暗褐色 | ローム粒少量　しまり弱 |
| 16 | 7.5YR 3/3 | 暗褐色 | ローム小少量、焼土小微量　、炭化物微量　粘性・しまり弱 |
| 17 | 7.5YR 3/4 | 暗褐色 | ローム粒少量、ローム中微量　しまり弱 |
| 18 | 7.5YR 3/4 | 暗褐色 | ローム中・小少量　粘性・しまり弱 |
| 19 | 7.5YR 3/4 | 暗褐色 | ローム粒少量、ローム中微量　粘性・しまり弱 |
| 20 | 7.5YR 4/6 | 褐色 | ローム粒中量　しまり弱 |
| 21 | 7.5YR 3/3 | 暗褐色 | ローム小少量、焼土小微量、炭化物微量　粘性・しまり弱 |
| 22 | 7.5YR 4/4 | 褐色 | ローム小少量、ローム大微量　粘性・しまり弱 |
| 23 | 7.5YR 3/4 | 暗褐色 | ローム粒少量、ローム中微量　しまり弱 |
| 24 | 7.5YR 3/4 | 暗褐色 | ローム粒少量、ローム中微量　粘性・しまり弱 |
| 25 | 7.5YR 4/6 | 褐色 | ローム粒中量　しまり弱 |
| 26 | ―― | | |
| 27 | 7.5YR 4/4 | 褐色 | ローム小中量、焼土粒微量、炭化粒微量　粘性弱、しまり強 |
| 28 | 7.5YR 3/4 | 暗褐色 | ローム小少量、焼土小微量、炭化粒微量　粘性・しまり弱 |
| 29 | 7.5YR 3/4 | 暗褐色 | ローム小中量、炭化粒微量、ローム中微量　粘性・しまり弱 |
| 30 | 7.5YR 4/3 | 褐色 | ローム小中量、ローム粒少量、焼土粒微量、炭化物微量　粘性・しまり弱 |
| 31 | 7.5YR 3/4 | 暗褐色 | ローム小少量、焼土粒微量、炭化粒微量　しまり弱 |
| 32 | 7.5YR 3/4 | 暗褐色 | ローム小少量、炭化物微量、ローム大・中微量　しまり弱 |
| 33 | 7.5YR 4/3 | 褐色 | ローム粒中量、ローム小少量、炭化物微量、ローム中微量　粘性弱 |
| 34 | 7.5YR 3/4 | 暗褐色 | ローム小少量、炭化物微量、ローム大・中微量 |
| 35 | 7.5YR 3/4 | 暗褐色 | ローム粒少量、ローム中微量　粘性・しまり弱 |
| 36 | 7.5YR 4/4 | 褐色 | ローム粒中量、ローム大・中微量　しまり弱 |
| 37 | 7.5YR 3/4 | 暗褐色 | ローム小少量、ローム中微量　しまり弱 |
| 38 | 7.5YR 4/4 | 褐色 | ローム粒中量、焼土小微量、炭化物微量　しまり弱 |
| 39 | 7.5YR 3/3 | 暗褐色 | ローム小微量　粘性・しまり弱 |
| 40 | 7.5YR 3/4 | 暗褐色 | 焼土粒中量、焼土小少量、炭化物微量、ローム小微量　粘性・しまり弱 |

**第８図　第１号住居跡**




第９図　第１号住居跡遺物出土状況

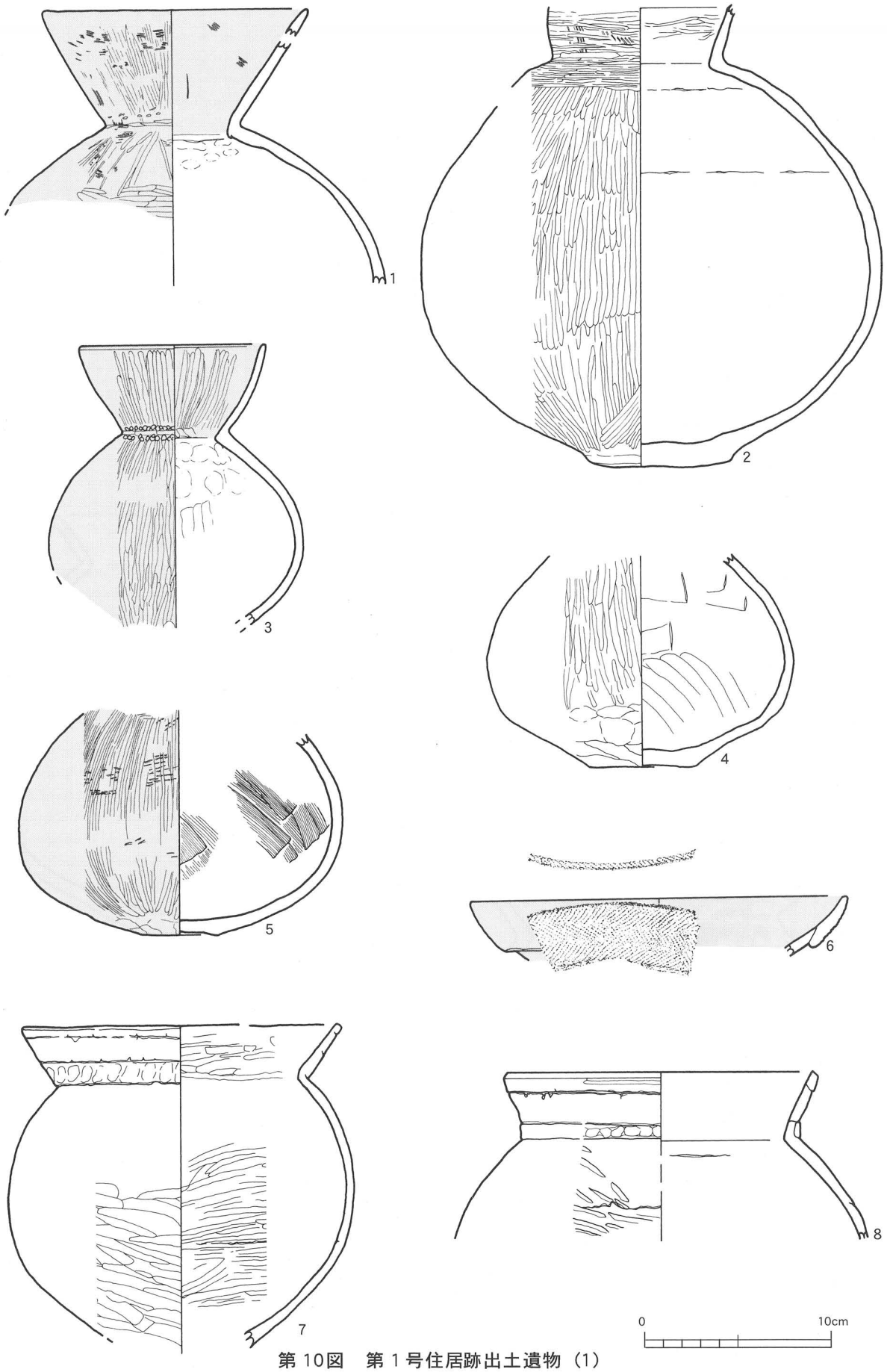
の口縁部には輪積痕が残されている。中でもNo.8と9の頸部には、指頭による押捺を加えた粘土紐を巡らせている。No.15は高坏形土器、No.16は器台形土器、No.17は椀形土器である。

土製品ではNo.18・19の土玉が出土している。石製品としては、No.21の軽石製の砥石と考えられるものが出土している。No.20は自然礫、No.22は破砕礫である。

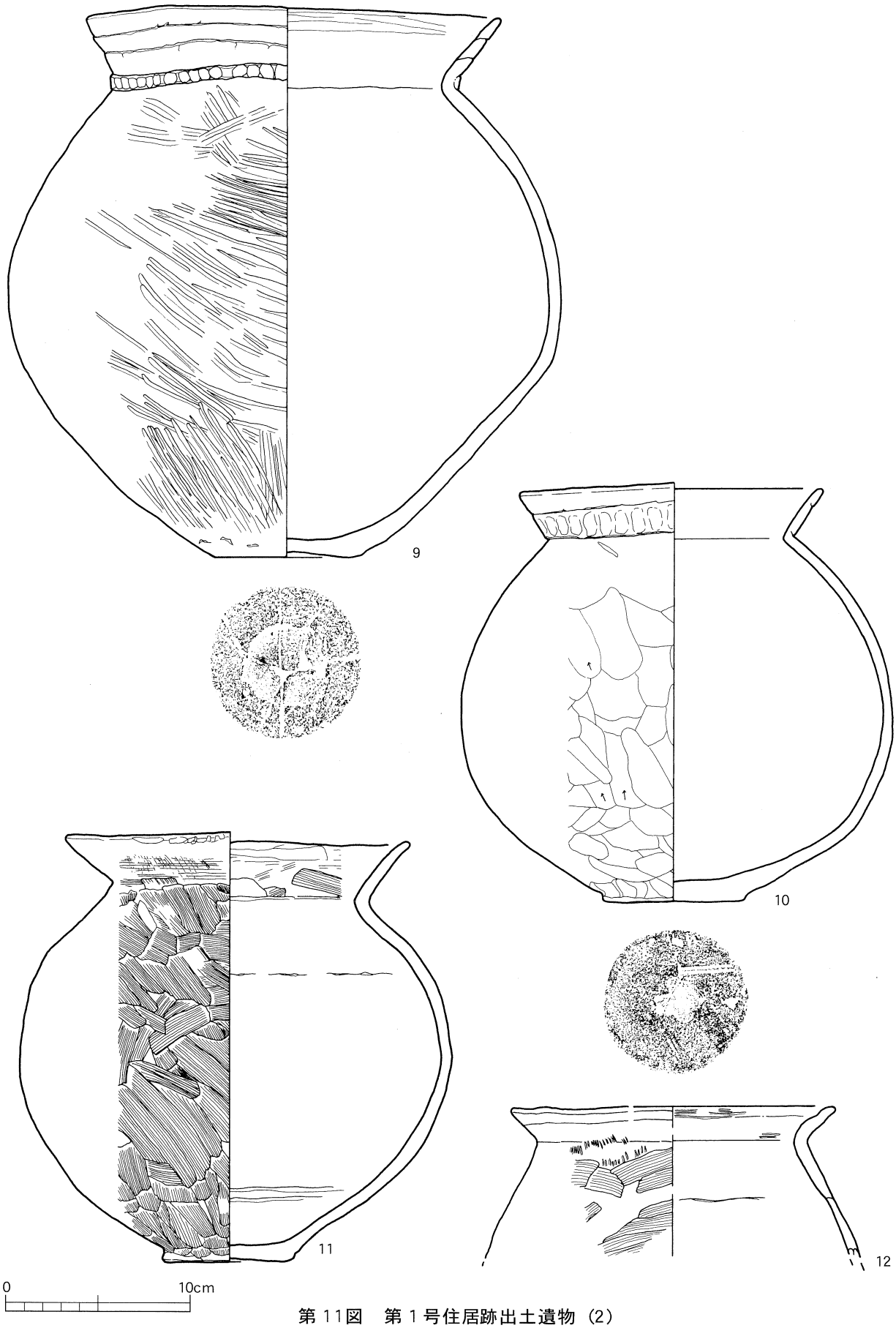
**所見**　本住居跡の北東コーナー部からは全体の形態が理解できる土器が多く出土しており、一括資料として良好なものである。本住居跡の時期は古墳時代前期に位置付けられる。特に出土土器には、口縁部に輪

S I-1

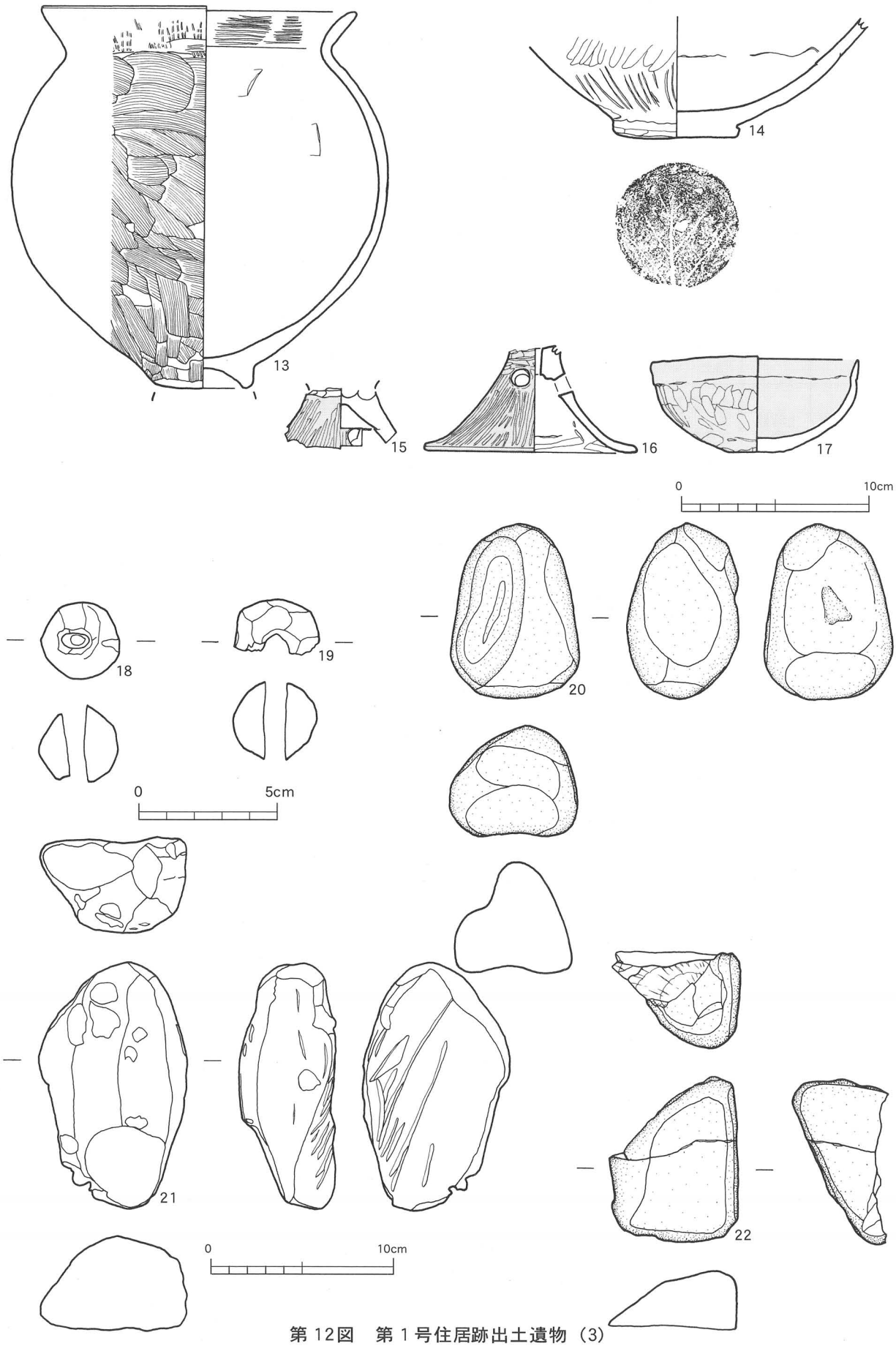
| 番　号 | 器　種 | 法量(cm) | 特　　徴 | 胎土・色調・焼成 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|
| 第10図<br>1 | 土師器<br>壺 | A：〔13.9〕<br>B：(14.6)<br>頸部径：7.0 | 頸部は「く」の字状に屈曲し、まっすぐ開く。胴部は丸い。器面は刷毛目調整を行った後、縦方向のミガキ及び横方向のミガキを密に行う。胴部内面には指頭痕が残る。口縁部～胴部外面及び口縁部内面は赤彩される。 | 胎土：緻密、長石○、石英◎、雲母△<br>色調：にぶい褐色<br>焼成：普通 | 北東隅集中地点出土。 |
| 2 | 土師器<br>壺 | B：(24.0)<br>C：〔7.4〕<br>頸部径：9.0<br>最大胴径：24.6 | 口縁部が欠損する。頸部は「く」の字状に屈曲し立ち上がる。胴部は下膨れ形の器形で、最大径は下位にある。頸部は刷毛目調整の後、ミガキが密になされる。胴部は縦方向の密なミガキがなされ、その内面には輪積痕が残る。 | 胎土：長石△、石英△<br>色調：明黄褐色<br>焼成：良好 | 北東隅集中地点出土。 |
| 3 | 土師器<br>壺 | A：　9.9<br>B：(14.8)<br>頸部径：5.6 | 胴部～底部が欠損する。頸部は「く」の字状に屈曲し、緩やかに内湾し立ち上がる。胴部は潰れた球形である。外面の全体と口縁部の内面には、縦方向の密なミガキがなされ、赤彩もなされる。胴部内面には指頭痕あり。 | 胎土：緻密、長石△、石英△、雲母△、赤色粒△<br>色調：赤色（外面）、橙色（内面）<br>焼成：普通 | 炉西側出土。 |
| 4 | 土師器<br>壺 | B：(11.2)<br>C：〔5.6〕<br>最大胴径：16.2 | 口縁部～頸部が欠損する。胴部は瓢形の器形。底部はヘラ状工具で削られ、上げ底風となる。外面は縦方向の密なミガキがなされる。内面はヘラナデ痕が見られる。 | 胎土：長石◎、石英◎、雲母△<br>色調：橙色<br>焼成：普通 | 炉西側出土。 |
| 5 | 土師器<br>壺 | B：　(6.8)<br>C：　3.9<br>最大胴径：17.0 | 口縁部～頸部が欠損する。胴部は瓢形の器形。底部はヘラ状工具で削られ、上げ底風となる。外面は刷毛目調整の後、縦方向の密なミガキ。内面刷毛目調整。外面赤彩。 | 胎土：緻密、長石△、石英○、雲母△、赤色粒△<br>色調：にぶい赤褐色<br>焼成：良好 | 北東隅集中地点出土。 |
| 6 | 土師器<br>壺 | A：〔20.0〕<br>B：　(3.2) | 口縁部の破片。複合口縁をなし、口縁部と口唇部に細密な縄文が横位に施文されている。縄文はRL＋LRの結束と考えられ、羽状構成をなす。口縁部内面には細密なミガキがなされる。外面及び内面が赤彩される。 | 胎土：緻密、長石△<br>色調：にぶい赤褐色<br>焼成：普通 | 北東隅集中地点出土。 |
| 7 | 土師器<br>甕 | A：16.9<br>B：(17.1)<br>最大胴径：18.3 | 底部欠損。頸部が「く」の字状の屈曲し、口縁はまっすぐ開く。口縁部外面には3帯の輪積痕が残り、最下帯には指頭痕が巡る。胴部は球胴形で、上半はナデ、下半はヘラナデ痕が見られる。内面にも輪積痕が一部残る。 | 胎土：長石△、石英△、赤色粒△<br>色調：黒褐色<br>焼成：普通 | 北東隅集中地点出土。 |
| 8 | 土師器<br>甕 | A：〔16.2〕<br>B：　(9.0)<br>頸部径：〔14.7〕 | 口縁部～胴部の破片である。口縁部外面には、輪積痕を持つ。口唇部は外削ぎ状となり尖る。頸部外面には粘土帯が1条貼り付けられ、その上に指頭による押捺痕が巡る。胴部外面には粗いヘラナデがなされ、輪積痕も残る。 | 胎土：長石△、石英△、雲母△、赤色粒△<br>色調：にぶい黄橙色<br>焼成：普通 | 炉南側出土。 |
| 第11図<br>9 | 土師器<br>甕 | A：22.3<br>B：29.7<br>C：　8.0<br>頸部径：18.7<br>最大胴径：29.6 | 頸部が「く」の字状の屈曲をし、口縁はまっすぐ開く。口縁部外面には3帯の輪積痕が残る。頸部外面には粘土帯が1条貼り付けられ、その上に指頭による押捺痕が巡る。胴部は球胴形をなし、外面に粗い刷毛状の調整がなされる。この調整は、底部付近とその他で方向が異なる。底面には木葉痕が見られる。 | 胎土：長石△、石英△、雲母○、赤色粒△<br>色調：橙色<br>焼成：普通 | 炉西側出土。 |




第 10図　第 1 号住居跡出土遺物（1）




第11図　第1号住居跡出土遺物（2）




第12図　第1号住居跡出土遺物（3）

S I-1

| 番　号 | 器　種 | 法量(cm) | 特　　徴 | 胎土・色調・焼成 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|
| 第11図<br>10 | 土師器<br>甕 | A：16.5<br>B：22.7<br>C：7.8<br>頸部径：13.3<br>最大胴径：<br>23.2 | 頸部が「く」の字状の屈曲をし、口縁はまっすぐ開く。口縁部外面には２帯の輪積痕が残り、最下帯には指頭痕が巡る。胴部は球胴形で、器面は全体にヘラ削りがされる。胴部の最大径付近と口縁部には煤が付着する。底部付近は被熱により赤化している。底面には籾痕が残る。 | 胎土：長石○、石英○、雲母○<br>色調：明赤褐色<br>焼成：不良 | 北東隅集中地点出土。 |
| 11 | 土師器<br>甕 | A：18.5<br>B：23.3<br>C：7.1<br>頸部径：13.8<br>最大胴径：<br>23.2 | 頸部が「く」の字状の屈曲をし、口縁はまっすぐ開く。口縁部外面には刷毛目調整の後ナデ。胴部は球胴形で、器面は全体に刷毛目調整がなされる。胴部内面は全体にナデられ、輪積み痕が残る。胴部外面の上位と内面の下位には炭化物が付着している。 | 胎土：長石○、石英○、雲母△<br>色調：にぶい黄橙色<br>焼成：普通 | 北東隅集中地点から出土。 |
| 12 | 土師器<br>甕 | A：〔17.4〕<br>B：(8.2)<br>頸部径：〔14.5〕 | 口縁部～胴部の破片で、頸部が「く」の字状に屈曲し、口唇端部がややつまみ上げられる。器面には刷毛目調整がなされるが、口縁部はほとんどがナデ。器面は全体的に荒れ。 | 胎土：長石○、石英◎、雲母○<br>色調：にぶい褐色<br>焼成：不良 | 北東隅集中地点出土。 |
| 第12図<br>13 | 土師器<br>台付甕 | A：17.0<br>B：(20.6)<br>頸部径：14.1 | 脚部が欠損する。頸部が「く」の字状に屈曲し、口縁はまっすぐ開く。口縁部外面には刷毛目調整の後ナデ。胴部は球胴形、器面は全体に刷毛目調整がなされる。口縁部内面には刷毛目調整がなされる。底部付近は被熱赤化。脚部の破面は磨耗しており、欠損後使用か。 | 胎土：長石◎、石英◎、雲母△<br>色調：にぶい黄褐色<br>焼成：普通 | 北東隅集中地点出土。 |
| 14 | 土師器<br>甕 | B：(6.5)<br>C：6.7 | 甕の底部で、上端は器壁の剥離が見られる。剥離部分には輪積痕が残る。器面にはヘラナデや、ナデの痕跡が見られる。底部側縁はヘラ削り。底面には木葉痕が残る。器面には炭化物が付着し、一部被熱赤化。 | 胎土：長石△、石英△、雲母△<br>色調：にぶい黄褐色<br>焼成：不良 | 炉西側から出土。 |
| 15 | 土師器<br>高　坏 | B：(3.7) | 高坏の脚部の一部。脚部には本来３つの孔が開く。器面には縦方向の密なヘラミガキがなされ、全面に赤彩がなされる。内面に輪積痕。 | 胎土：長石△、石英◎、雲母△<br>色調：赤色 | 炉南側から出土。 |
| 16 | 土師器<br>器　台 | B：(5.7)<br>C：11.5 | 器台の脚部で、坏部は欠損。脚部は「ハ」の字状に広がる。裾部はやや平坦。器面はミガキの後、間隔の開く放射状のミガキ。坏部との接合部には横方向のミガキ。接合部中央に孔が開き、脚部には3孔開く。内面には一部輪積痕が見られる。外面は赤彩。 | 焼成：普通<br>胎土：長石△、石英○、赤色粒○<br>色調：褐色<br>焼成：普通 | 炉北側出土。 |
| 17 | 土師器<br>椀 | A：11.1<br>B：5.1<br>C：3.0 | 底部から緩やかに内湾して、口縁部が立ち上がる椀。口縁部内面に弱い稜を持つ。口縁部の下端には内外面ともに輪積痕を一部残している。底部にかけては部分的にヘラ削りがなされる。内外面ともに赤彩。 | 胎土：長石◎、石英◎、雲母○<br>色調：明赤褐色<br>焼成：普通 | 炉北側出土。 |

| 番　号 | 器　種 | 最大長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重量(g) | 特　　徴 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第12図18 | 土　玉 | 2.7 | 2.8 | 2.8 | 20.5 | 孔径1.0cm。側面に籾痕。 | |
| 19 | 土　玉 | (1.8) | (3.0) | (2.8) | (14.2) | 孔径0.8cm。 | |

| 番　号 | 器　種 | 最大長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重量(g) | 石　材 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第12図20 | 自然礫 | 9.5 | 6.9 | 6.0 | 490.4 | 安山岩 | 北西コーナー部出土。 |
| 21 | 砥　石 | 13.3 | 8.0 | 4.8 | 90.7 | 軽　石 | 刃物を研いだような痕跡有。 |
| 22 | 破砕礫 | 8.7 | 6.9 | 5.2 | 258.4 | 硬砂岩 | 別地点出土の2個体が接合。 |

積痕を有するものが目立ち、古墳時代前期の中でも古手の様相を示していると考えられる。

## 第２号住居跡（ＳＩ-2）（第13～15図　ＰＬ6･19･20）

**位置**　調査区の東半部のＪ～Ｌ-６～９グリッドで確認され、南側は調査区外にある。ＳＫ14、ＳＢ１、ＧＫ３・４・６と重複し、いずれも本住居跡より新しい。本住居跡の北西隅付近は、ＧＫ３によって大きく壊されている。

**規模・平面形**　方形で長辺(6.05)m、短辺6.77m である。調査区内で一番大型の竪穴住居跡である。

**主軸方向**　Ｎ－68°－Ｗ。

**壁面**　北西隅付近の壁をＧＫ３により著しく壊されている。壁が遺存する部分では、壁溝が確認されている。壁溝の幅は８～24㎝で、深さは８～18㎝を測る。壁は全体的に外傾して立ち上がり、遺構断面図Ｃ－Ｃ′・Ｄ－Ｄ′ラインのように部分的に確認面近くが緩く傾斜する。そして、土層図Ａ－Ａ′ラインのように一部には段状になる部分も確認された。確認面から床面の最深部までの深さは、53㎝である。

**床面**　床面の中央部から南側にかけ、硬化面が確認された。硬化面の範囲中には、島状の高まりが入り口ピットや貯蔵穴付近とＰ４付近に数箇所確認された。

**ピット**　Ｐ１～Ｐ４は主柱穴と考えられる。Ｐ１は平面形が楕円形で、30×25㎝、深さ36㎝を測る。Ｐ２は楕円形で、112×85㎝、深さ60㎝を測る。その形状は上面が大きく開き底面がすぼまる特徴を持ち、柱を抜いた痕跡とも考えられる。Ｐ３は楕円形で、(50)×54㎝、深さ58㎝を測る。Ｐ４は楕円形で、70×53㎝、深さ51㎝を測る。Ｐ５は入り口ピットと考えられ、平面形は円形を呈し、54×50㎝、深さ30㎝を測る。Ｐ６は不明ピットで、平面形が長方形で100×62㎝、深さ16㎝を測る。東壁側の壁溝に直行する溝が２ヶ所確認され、幅７～20㎝、深さ２㎝のものである。この他にピットが４ヶ所確認されている。

**炉**　炉は確認されておらず、ＧＫ３により壊されてしまったものか。

**覆土**　土層Ａ－Ａ′ラインはエリア境界でのものである。Ｂ－Ｂ′ラインの土層は大部分をＧＫ３により壊されている。土層全体は25層に分層できる。土層Ａ－Ａ′ラインの土層堆積状況では、盛土下の第10層は黒褐色で、その下の第８層は暗褐色を呈している。全体的には遺構覆土の上層ほど黒味が強く、下層やピット土層ほどロームの混入率が高くなる傾向にある。焼土粒等については、壁際の第15層で多く含まれる傾向が見られる。

**出土遺物**　出土遺物は全体的に少ない。遺物はＰ３・５周辺で、床から８～18㎝浮いて出土している。出土遺物はNo.１～３が壺形土器である。No.３の大型の壺形土器は、大郭式土器又は大郭系土器と呼ばれるものである。この土器は、器厚が分厚く、胎土にも石英粒等が多量に含まれ特徴的である。No.３右の拓本は、接合しないが同一個体の拓本を掲載したものである。

No.４とNo.５は接合しないものであるが、胎土や器形から小型の台付甕の同一個体といえる。No.６は赤彩された高坏形土器である。No.７は粗製の器台形土器である。これらの土器の他、土製品としてNo.８・９の土玉やNo.10の不明土製品が出土している。No.12は覆土中から出土した不明鉄製品であり、先端が尖り中央が空洞となっている。この竪穴住居跡に伴うものかは明確にし得ない。

この他に、No.13～15の玉作り関連遺物が出土している。No.13は緑色凝灰岩の荒割り状態のものである。No.14は緑色凝灰岩の形割り状態のものである。No.15は緑色凝灰岩の剥片である。これらは、Ｐ２と東壁の間から出土し、床面から若干浮いていた。この他、微細な砕片がＰ３・Ｐ５の南側付近から若干出土し、位

置が分かるものは（▲）印で図中に示した。このような玉作り関連の遺物が出土したことから、微細な剥片が出土した付近や、No.13・14が出土した付近の床面近くの土を採取し、水洗い選別を行った。その結果は、2点の緑色凝灰岩の砕片が出土したのみである。

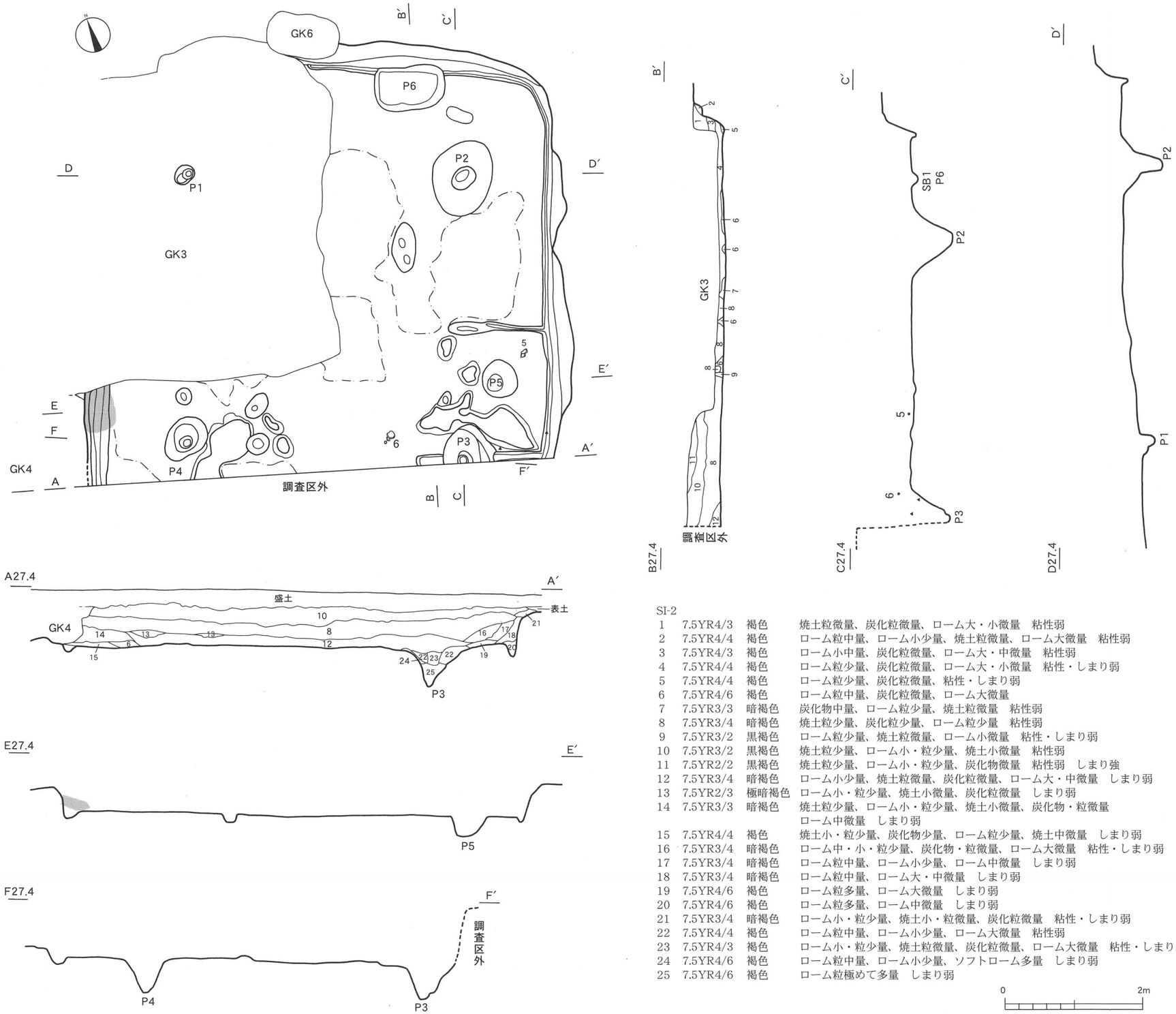
**所見**　本竪穴住居跡では、緑色凝灰岩の玉作り関連遺物が古墳時代前期の土器と一緒に出土している。しかしながら、出土量は少なく叩き石や砥石などの道具類は全く出土していない。このような中での玉作り関連遺物の在り方から、今回の調査エリア外に玉作り工房跡の存在が想定され、玉作り作業の廃棄物が本住居跡に投棄された可能性が考えられる。

S I-2

| 番　号 | 器　種 | 法量(cm) | 特　　徴 | 胎土・色調・焼成 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|
| 第14図 1 | 土師器 壺 | A：〔26.6〕<br>B：（4.1） | 口縁部の破片で、内外面ともに赤彩される。口縁部は下端に段を持ち、そこから緩く外反し開く。外面は横方向の密なミガキが施されて、内面は剥落が目立つ。 | 胎土：緻密、長石△、石英△、雲母△<br>色調：にぶい赤褐色<br>焼成：普通 | |
| 2 | 土師器 壺 | A：〔17.8〕<br>B：（5.5）<br>頸部径：〔10.0〕 | 口縁部は下端に段を持ち、そこから緩く外反し開く。内外面ともに刷毛目調整がなされる。 | 胎土：長石△、石英○、雲母○<br>色調：にぶい黄橙色<br>焼成：普通 | 2区出土。 |
| 3 | 土師器 壺 | A：〔28.6〕<br>B：（6.8）<br>頸部径：（21.0） | 大型壺の口縁部破片（同一個体2片）で、形態や胎土の点で異質。口縁部下端は厚みを増し、段を設けている。口唇部は粘土貼り付けにより内側に突出し、その上面は平坦。外面には縦方向の刷毛目調整が見られ、その上に3本単位の太めの沈線が引かれる。口唇部や内面は荒れが著しい。 | 胎土：長石◎、石英◎、褐色粒○<br>色調：浅黄橙色<br>焼成：不良 | P 3付近出土。 |
| 4 | 土師器 台付甕 | A：〔11.2〕<br>B：（5.6） | 小型台付甕の口縁部～頸部の破片。口縁部は「く」の字状の頸部から外反して開く。口唇端部は平坦である。口縁部外面以外には粗い刷毛目調整がなされる。 | 胎土：長石△、石英△、雲母○<br>色調：浅黄橙色<br>焼成：普通 | No.5と同一個体。 |
| 5 | 土師器 台付甕 | B：(7.2)<br>脚部底径：〔8.4〕 | 小型台付甕の脚部である。脚部は「ハ」の字状に開き、端部でやや内傾する。甕底部と脚部の接合部内面には、粘土の突出が見られる。器面には粗い刷毛目調整。 | 胎土：長石△、石英△、雲母○<br>色調：浅黄橙色<br>焼成：普通 | No.4と同一個体。 |
| 6 | 土師器 高坏 | A：11.0<br>B：9.6<br>C：12.2 | 全体の形状が「X」状をなす高坏である。坏部と脚部が括れ部からそれぞれ大きく開く。外面と坏部内面はヘラミガキがなされ、赤彩される。口縁部はやや歪んでいる。 | 胎土：緻密、長石△、石英○、雲母○<br>色調：赤色<br>焼成：普通 | |
| 7 | 土師器 器台 | A：9.6<br>B：11.8<br>脚部底径：12.6 | 全体的に粗雑な作りの器台。坏部と脚部の外面には輪積痕が残り、内面には見られない。括れ部の中央には、孔が開く。坏部の内面や外面には刷毛目調整がなされ、脚部内面には指頭によるナデ痕が見られる。 | 胎土：長石△、長石○、赤色粒△<br>色調：にぶい黄橙色<br>焼成：普通 | |

| 番　号 | 器　種 | 最大長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重量(g) | 特　　徴 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第14図 8 | 土　玉 | 2.6 | 2.5 | 2.55 | 16.2 | 孔径0.8cm。 | |
| 9 | 土　玉 | (1.3) | (1.15) | 1.3 | (0.7) | 他の土玉に比べ小さい。 | |
| 10 | 不明土製品 | 1.1 | 1.5 | 1.1 | 3.1 | 平たい円柱状の土製品。 | |
| 11 | 焼成粘土塊 | 2.7 | 4.6 | 1.0 | 9.1 | 籾痕や繊維痕が残る。 | |

| 番　号 | 器　種 | 最大長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重量(g) | 素　材 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第14図12 | 不明鉄製品 | (1.5) | (0.4) | (0.4) | (0.1) | 鉄 | 下端が尖り、中は空洞。 |
| 第15図13 | 玉作り関連遺物 | 4.77 | 5.81 | 2.65 | 61.6 | 緑色凝灰岩 | 石核。北東コーナー付近出土。 |
| 14 | 玉作り関連遺物 | 1.21 | 1.92 | 1.57 | 3.6 | 緑色凝灰岩 | 形割り状態。北東コーナー付近出土。 |
| 15 | 玉作り関連遺物 | 1.25 | 1.01 | 0.56 | 0.5 | 緑色凝灰岩 | 剥片。北東コーナー付近出土。 |

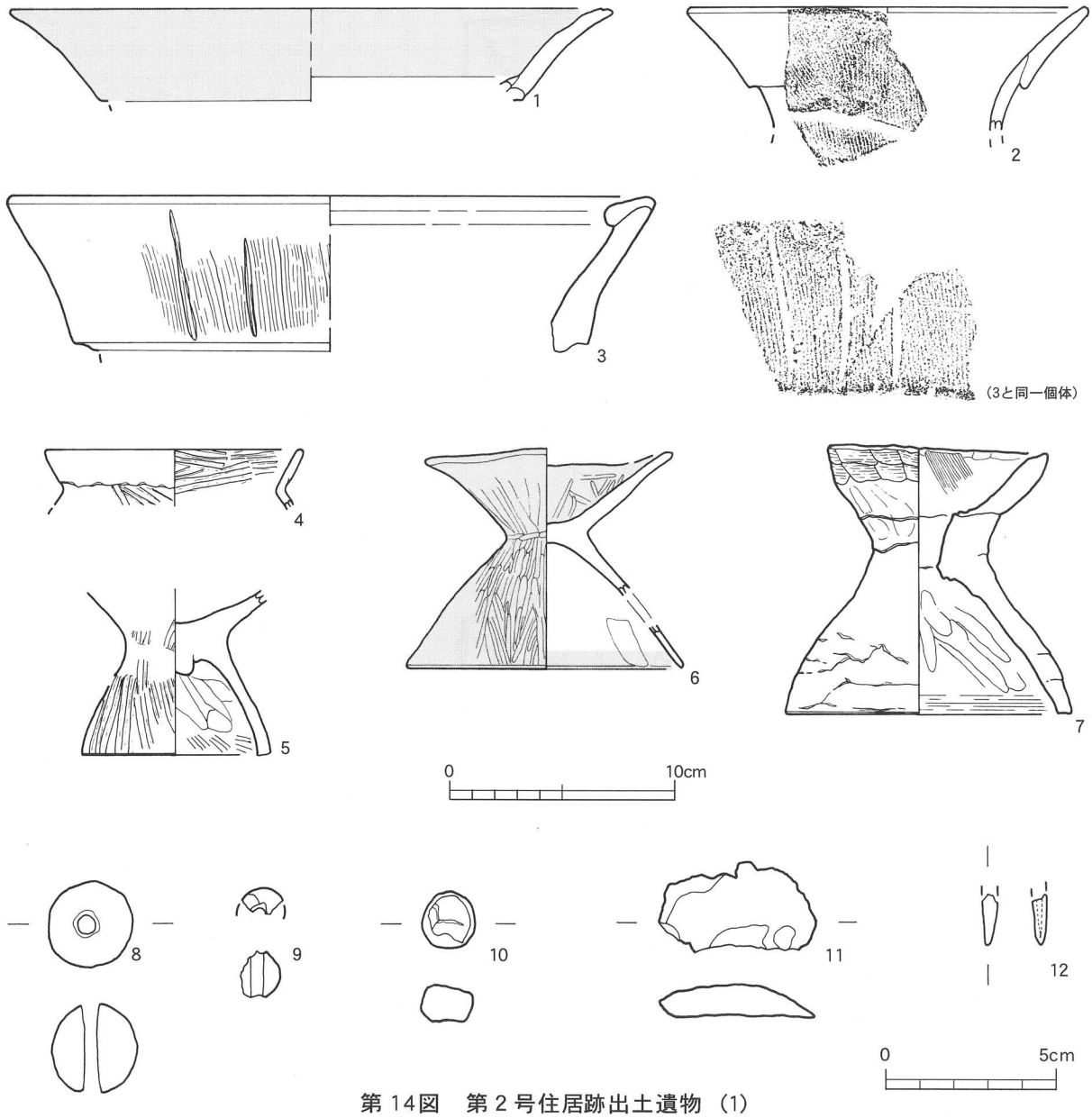



SI-2

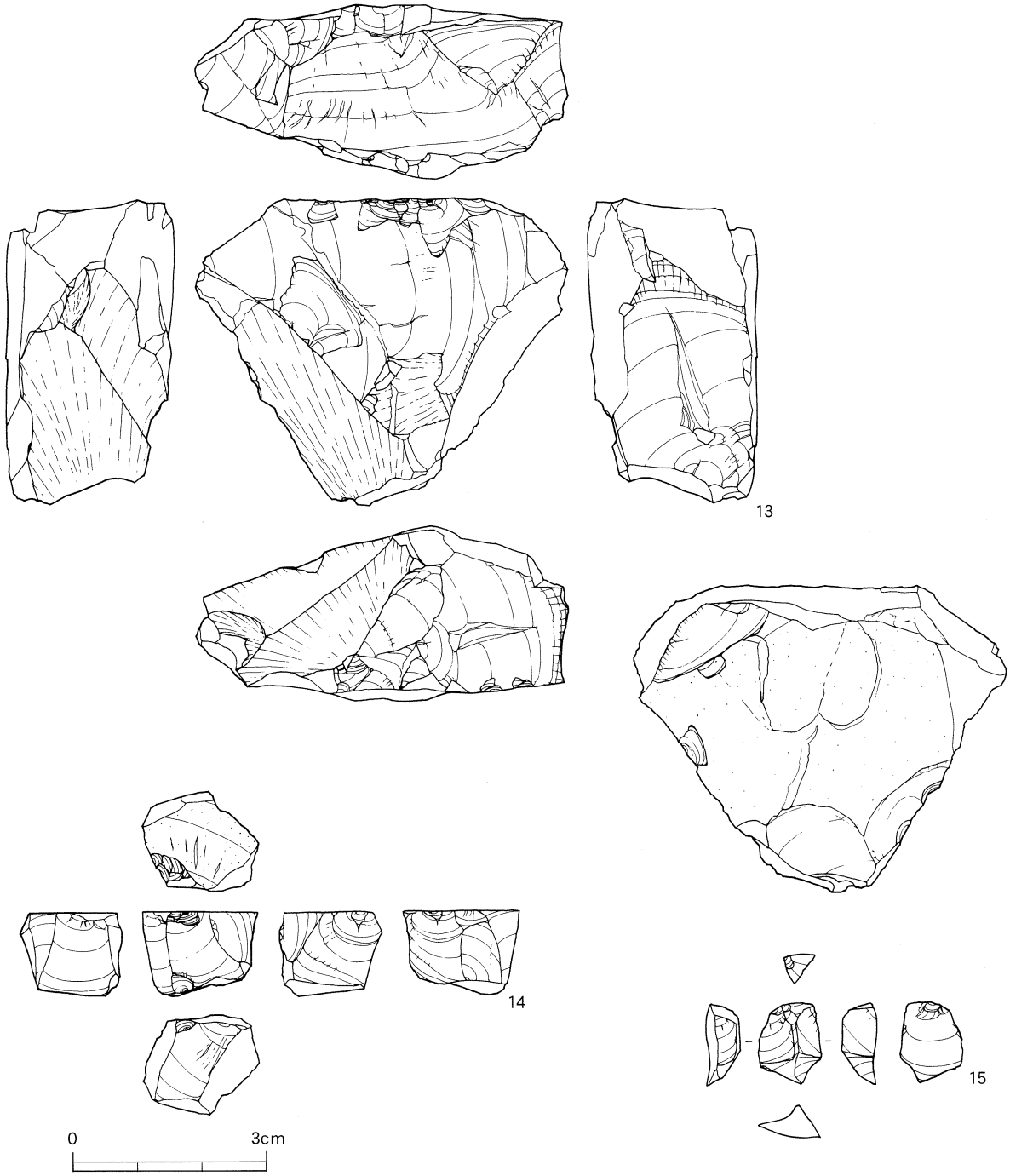
| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | 7.5YR4/3 | 褐色 | 焼土粒微量、炭化粒微量、ローム大・小微量　粘性弱 |
| 2 | 7.5YR4/4 | 褐色 | ローム粒中量、ローム小少量、焼土粒微量、ローム大微量　粘性弱 |
| 3 | 7.5YR4/3 | 褐色 | ローム小中量、炭化粒微量、ローム大・中微量　粘性弱 |
| 4 | 7.5YR4/4 | 褐色 | ローム粒少量、炭化粒微量、ローム大・小微量　粘性・しまり弱 |
| 5 | 7.5YR4/4 | 褐色 | ローム粒少量、炭化粒微量、粘性・しまり弱 |
| 6 | 7.5YR4/6 | 褐色 | ローム粒中量、炭化粒微量、ローム大微量 |
| 7 | 7.5YR3/3 | 暗褐色 | 炭化物中量、ローム粒少量、焼土粒微量　粘性弱 |
| 8 | 7.5YR3/4 | 暗褐色 | 焼土粒少量、炭化粒少量、ローム粒少量　粘性弱 |
| 9 | 7.5YR3/2 | 黒褐色 | ローム粒少量、焼土粒微量、ローム小微量　粘性・しまり弱 |
| 10 | 7.5YR3/2 | 黒褐色 | 焼土粒少量、ローム小・粒少量、焼土小微量　粘性弱 |
| 11 | 7.5YR2/2 | 黒褐色 | 焼土粒少量、ローム小・粒少量、炭化物微量　粘性弱　しまり強 |
| 12 | 7.5YR3/4 | 暗褐色 | ローム小少量、焼土粒微量、炭化粒微量、ローム大・中微量　しまり弱 |
| 13 | 7.5YR2/3 | 極暗褐色 | ローム小・粒少量、焼土小微量、炭化粒微量　しまり弱 |
| 14 | 7.5YR3/3 | 暗褐色 | 焼土粒少量、ローム小・粒少量、焼土小微量、炭化物・粒微量<br>ローム中微量　しまり弱 |
| 15 | 7.5YR4/4 | 褐色 | 焼土小・粒少量、炭化物少量、ローム粒少量、焼土中微量　しまり弱 |
| 16 | 7.5YR3/4 | 暗褐色 | ローム中・小・粒少量、炭化物・粒微量、ローム大微量　粘性・しまり弱 |
| 17 | 7.5YR3/4 | 暗褐色 | ローム粒中量、ローム小少量、ローム中微量　しまり弱 |
| 18 | 7.5YR3/4 | 暗褐色 | ローム粒中量、ローム大・中微量　しまり弱 |
| 19 | 7.5YR4/6 | 褐色 | ローム粒多量、ローム大微量　しまり弱 |
| 20 | 7.5YR4/6 | 褐色 | ローム粒多量、ローム中微量　しまり弱 |
| 21 | 7.5YR3/4 | 暗褐色 | ローム小・粒少量、焼土小・粒微量、炭化粒微量　粘性・しまり弱 |
| 22 | 7.5YR4/4 | 褐色 | ローム粒中量、ローム小少量、ローム大微量　粘性弱 |
| 23 | 7.5YR4/3 | 褐色 | ローム小・粒少量、焼土粒微量、炭化粒微量、ローム大微量　粘性・しまり弱 |
| 24 | 7.5YR4/6 | 褐色 | ローム粒中量、ローム小少量、ソフトローム多量　しまり弱 |
| 25 | 7.5YR4/6 | 褐色 | ローム粒極めて多量　しまり弱 |

0　2m

第13図　第２号住居跡




第 14図　第 2 号住居跡出土遺物 (1)




第15図　第2号住居跡出土遺物（2）

**第3号住居跡（S I-3）**（第16図　PL6・20・21）

**位置**　調査区の中央部やや西寄りのF・G-5・6グリッドで確認され、南側は調査区外にある。GK 12・16やP 102・137等と重複し、いずれも本住居跡より新しい。

**規模・平面形**　方形で長辺5.5m、短辺は現状で(2.0)mである。

**主軸方向**　N－30°－E。

**壁面**　北側の壁の一部をGK 12・16により壊されている。壁は直線的に立ち上がり、確認面から床面の最

深部までの深さは20㎝を測る。東・西壁側で壁溝が確認され、幅は６～８㎝であり、深さは４㎝を測る。

**床面**　床面のＰ１・Ｐ２を結ぶラインを境として、北側がやや高くなり（４㎝程度）ベッド状を呈している。先のライン南側の床面は硬化している。

**ピット**　Ｐ１・Ｐ２は主柱穴と考えられる。Ｐ１は平面形が楕円形で、40×30㎝、深さ34㎝を測る。Ｐ２は円形で、(42)×38㎝、深さ57㎝を測る。この他にＰ１の北側に溝状のピットが確認され、規模は84×16㎝、深さ18㎝を測る。

**炉**　調査区内には確認されず、エリア外に存在するものと思われる。

**覆土**　土層は全部で10層に分層できた。これらの土層は、盛土の転圧の影響のせいか非常に硬くしまっている。土層の堆積状況は、壁際から埋まっている様子が読み取れる。覆土の一部は、ＧＫ２・16の桜の木のライトアップ用電機コード埋設による掘削や、校庭に設置されたスプリンクラー用水道管の埋設のため撹乱等の影響を受けている。

**出土遺物**　遺物は全体的に少なく、竪穴住居跡内の西半部分から出土している。

出土した遺物は、№１が甕形土器の底部破片で、№２が椀形土器である。そして、№３は南関東系の一部が赤彩された壺形土器の破片である。

**所見**　本竪穴住居跡は、出土遺物から古墳時代前期のものであり、床面の周囲がやや高まりベッド状を呈するものと考えられる。

ＳＩ-3

| 番　号 | 器　種 | 法量(㎝) | 特　　徴 | 胎土・色調・焼成 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|
| 第16図<br>1 | 土師器<br>甕 | Ｂ：(3.3)<br>Ｃ：4.4 | 甕の底部で、側縁と底面は手持ちヘラ削り。器面には刷毛目調整が一部見られる。 | 胎土：長石○、石英◎、雲母△<br>色調：にぶい黄橙色<br>焼成：普通 | |
| 2 | 土師器<br>椀 | Ｂ：(7.4)<br>Ｃ：3.8<br>頸部径：<br>〔11.4〕 | 口縁部が欠損する。底部から外傾し胴部上位で内湾する。頸部は「く」の字状を呈し外傾。胴部上位はナデ、以下は手持ちヘラ削り。底面はナデ。内面にはヘラナデの痕跡あり。 | 胎土：長石◎、石英◎、雲母△<br>色調：橙色<br>焼成：普通 | |
| 3 | 土師器<br>壺 | Ｂ：(2.5) | 壺の胴部上位の破片。器面には撚りの異なる付加条2種縄文が上下2段に施文。上段はRL＋Rで、下段はLR＋Lにより施文され、羽状構成をとる。下段の付加条の末端は結束された痕跡が残る。頸部近くの無文部は赤彩。 | 胎土：長石○、石英○、褐色粒△<br>色調：にぶい橙色<br>焼成：良好 | |

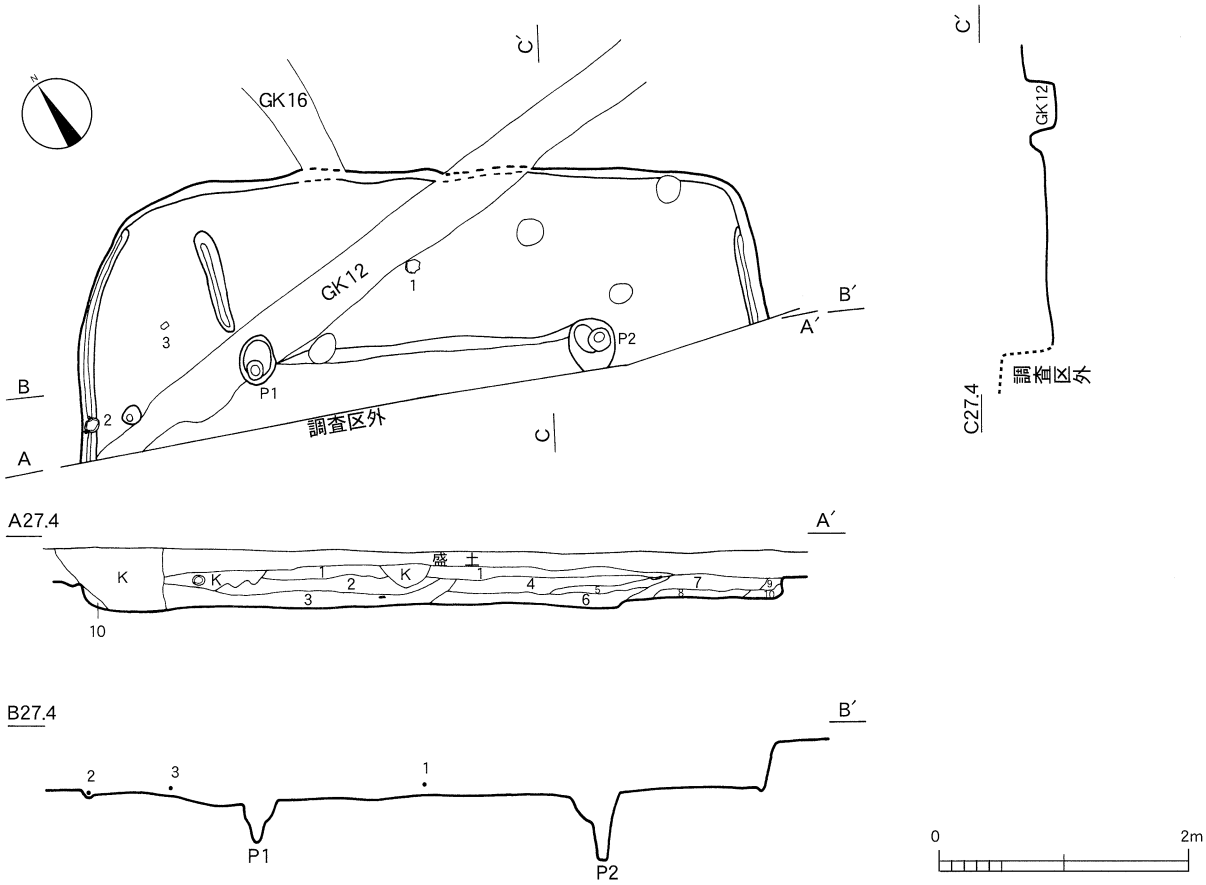
## 第４号住居跡（ＳＩ-4）（第17・18図　ＰＬ６・21・22）

**位置**　調査区の中央部やや西寄りのＥ・F-５・６グリッドで確認され、ＳＩ-３に近接している。遺構の大部分は南側の調査区外にある。

**規模・平面形**　西端のカマドと考えられる部分を除けば、およそ方形で長辺3.55m、短辺は現状で(1.53)mである。

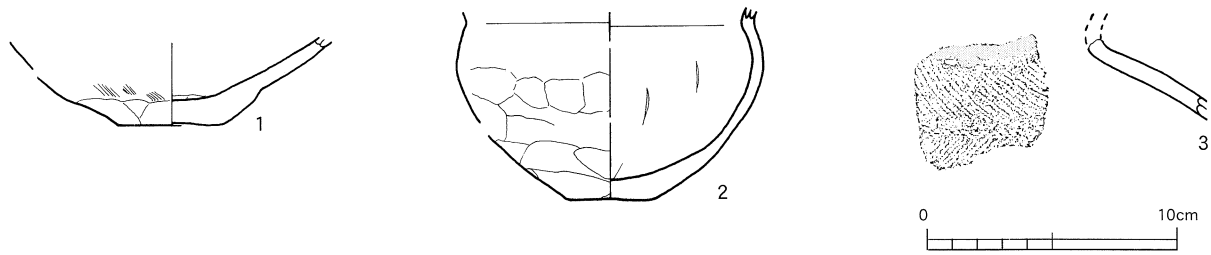
**主軸方向**　Ｎ－95°－Ｅ。

**壁面**　壁は外傾して立ち上がり、確認面から床面の最深部までの深さは38㎝を測る。北壁の途中から東壁にかけ壁溝が確認され、幅は10～12㎝であり、深さは２～４㎝を測る。




SI-3

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | 7.5YR3/3 | 暗褐色 | ローム小少量、ローム大・粒微量、小砂利　しまり強 |
| 2 | 7.5YR3/4 | 暗褐色 | ローム小少量、焼土小微量、炭化物微量、ローム粒微量　しまり強 |
| 3 | 7.5YR3/4 | 暗褐色 | ローム小少量、炭化物微量、ローム粒微量 |
| 4 | 7.5YR3/4 | 暗褐色 | ローム小・粒少量、焼土小微量、炭化物微量、ローム大・中微量　しまり強 |
| 5 | 7.5YR3/4 | 暗褐色 | ローム小・粒少量、炭化物微量 |
| 6 | 7.5YR3/4 | 暗褐色 | ローム小中量、ローム粒少量、ローム大・中微量　粘性弱 |
| 7 | 7.5YR3/3 | 暗褐色 | ローム小中量、ローム粒少量、炭化物微量　粘性弱 |
| 8 | 7.5YR3/3 | 暗褐色 | ローム小少量、ローム粒微量　粘性弱 |
| 9 | 7.5YR4/3 | 褐色 | ローム粒中量　粘性弱 |
| 10 | 7.5YR4/3 | 褐色 | ローム粒中量、ローム小少量、ローム大・中微量　粘性弱 |




**第16図　第3号住居跡・出土遺物**

**床面**　床面は平坦で、カマド前庭部の東側に硬化範囲が確認された。

**ピット**　床面にピットはＰ１・Ｐ２の２ヶ所が確認されている。それぞれが竪穴住居跡内でどのような役割をもっているものかは、現状では不明である。Ｐ１は平面形が不整円形で、105×70㎝、深さ32㎝を測る。この覆土には焼土粒が若干含まれていた。Ｐ２は円形と考えられ、径(25)㎝、深さ５㎝を測る。

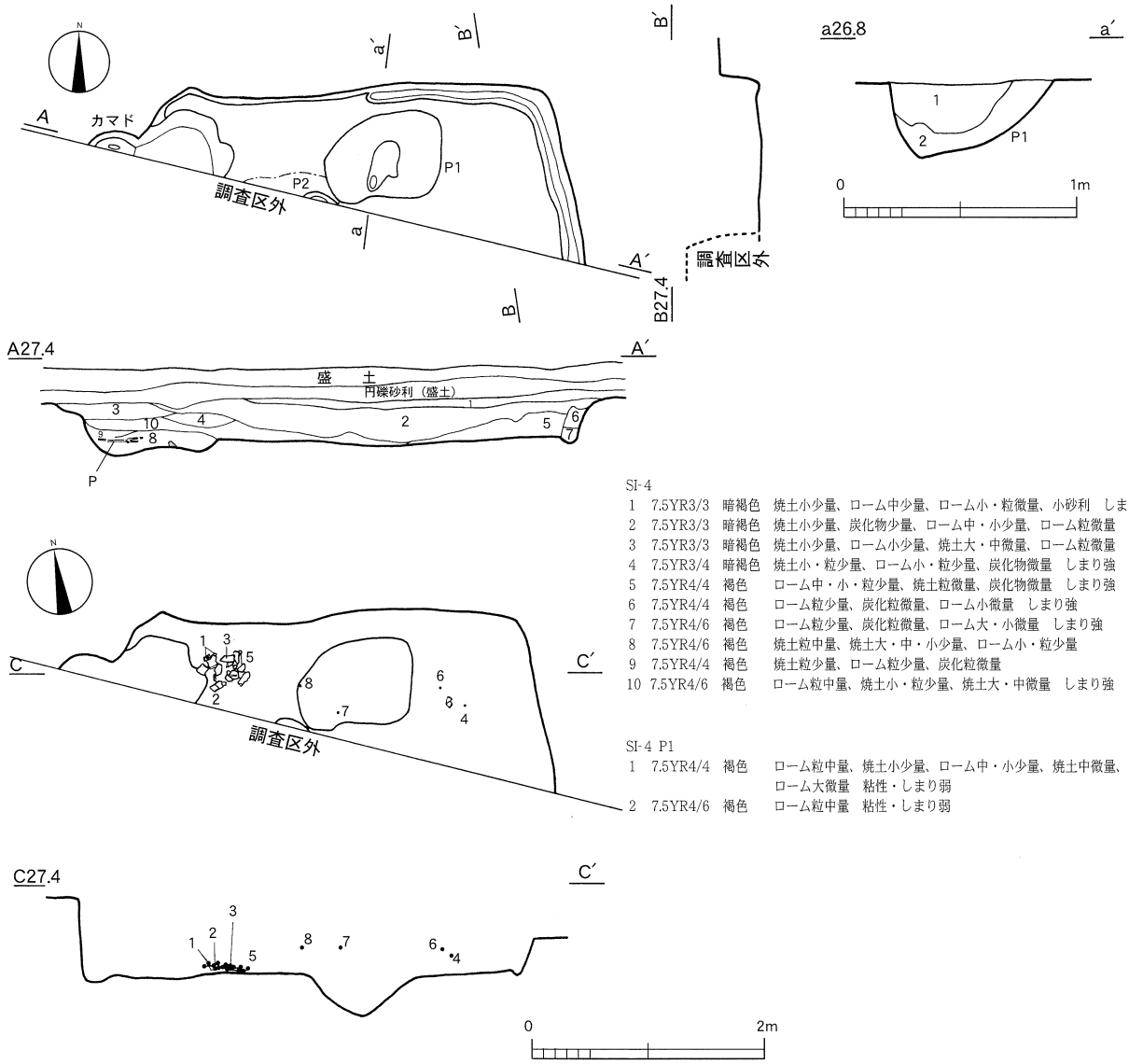
**カマド**　遺構内の西端にあり、形状や覆土の状況からカマドとした。カマドの位置は西壁の中央にあるのではなく、北西コーナー部近くに寄ってつくられている。カマドの焚き口部分は不整円形の落ち込みで、85×70㎝、深さ６㎝を測る。

**覆土**　覆土上には、盛土と細かな小砂利の含まれる層が見られる。遺構の覆土は10層に分層でき、全体的に転圧により非常にしまっていた。第８層はカマドの覆土と考えたもので、焼土のブロックや粒が多く含まれている。この土層中には土師器甕の破片が折り重なるように含まれていた。竪穴住居跡内の土層は第２層の暗褐色土が大部分を占めている。

**出土遺物**　遺物はカマドの前庭部東側やカマド内から土器片が集中して出土している。No.１～３は土師器の甕形土器である。No.１はカマド前庭部出土の破片とカマド内のものが接合し、ほとんどの破片はカマド内から出土している。No.２は小型の甕形土器である。No.４は土師器の坏であり、遺構内の東側から出土した。No.５は土製の支脚である。No.６・７は土製品であり、No.６は土玉で、No.７は土製模造品と考えられる。No.８は不明石製品である。遺物の出土状況で、No.１・２・３・５は床面近くから出土し、No.４・６～８はやや上層から出土している。

ＳＩ-４

| 番　号 | 器　種 | 法量(㎝) | 特　　徴 | 胎土・色調・焼成 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|
| 第18図<br>1 | 土師器<br>甕 | Ａ：〔27.4〕<br>Ｂ：　32.4<br>Ｃ：　8.2<br>頸部径：23.2<br>最大胴径：<br>30.2 | 大型の甕で、底部から緩く外傾して立ち上がり、胴部上位で内傾。頸部は内湾し口縁部で外反。口唇部はつまみ上げられている。口縁部には横方向のナデ痕が見られる。胴部全体にはヘラミガキが施される。内面にはヘラナデの痕跡が見られる。 | 胎土：長石◎、石英○、雲母○<br>色調：にぶい黄褐色<br>焼成：良好 | 破片の多くがカマド出土。 |
| 2 | 土師器<br>甕 | Ａ：　18.3<br>Ｂ：　16.9<br>Ｃ：　8.0<br>頸部径：16.8<br>最大胴径：<br>18.2 | 小型の甕で。底部から緩く外傾して立ち上がり、胴部上位で内傾。口縁部は緩く外反。口縁部には横方向のナデ痕が見られる。胴部にもナデ、底部付近は左から右方向に手持ちヘラ削り。内面にはヘラナデの痕跡が見られる。 | 胎土：長石○、石英◎、雲母○<br>色調：にぶい黄褐色<br>焼成：普通 | |
| 3 | 土師器<br>甕 | Ａ：〔21.0〕<br>Ｂ：　(4.2) | 口縁部の破片である。口縁部は外反する。口唇部は押さえられ、上下に張り出す。全体に横方向のナデが見られる。 | 胎土：長石△、石英◎、雲母○<br>色調：にぶい黄褐色<br>焼成：普通 | |
| 4 | 土師器<br>坏 | Ａ：〔14.6〕<br>Ｂ：　(3.6) | 坏の口縁部～胴部破片。胴部は外傾し、口縁部が立ち上がる。口縁部や胴部内面はナデ、胴部外面はヘラ削りがなされる。胎土は色調の異なる粘土がマーブリング状。 | 胎土：緻密、長石△、石英△、雲母△<br>色調：褐色<br>焼成：普通 | |




SI-4
1　7.5YR3/3　暗褐色　焼土小少量、ローム中少量、ローム小・粒微量、小砂利　しまり強
2　7.5YR3/3　暗褐色　焼土小少量、炭化物少量、ローム中・小少量、ローム粒微量　しまり強
3　7.5YR3/3　暗褐色　焼土小少量、ローム小少量、焼土大・中微量、ローム粒微量　しまり強
4　7.5YR3/4　暗褐色　焼土小・粒少量、ローム小・粒少量、炭化物微量　しまり強
5　7.5YR4/4　褐色　ローム中・小・粒少量、焼土粒微量、炭化物微量　しまり強
6　7.5YR4/4　褐色　ローム粒少量、炭化粒微量、ローム小微量　しまり強
7　7.5YR4/6　褐色　ローム粒少量、炭化粒微量、ローム大・小微量　しまり強
8　7.5YR4/6　褐色　焼土粒中量、焼土大・中・小少量、ローム小・粒少量
9　7.5YR4/4　褐色　焼土粒少量、ローム粒少量、炭化粒微量
10　7.5YR4/6　褐色　ローム粒中量、焼土小・粒少量、焼土大・中微量　しまり強

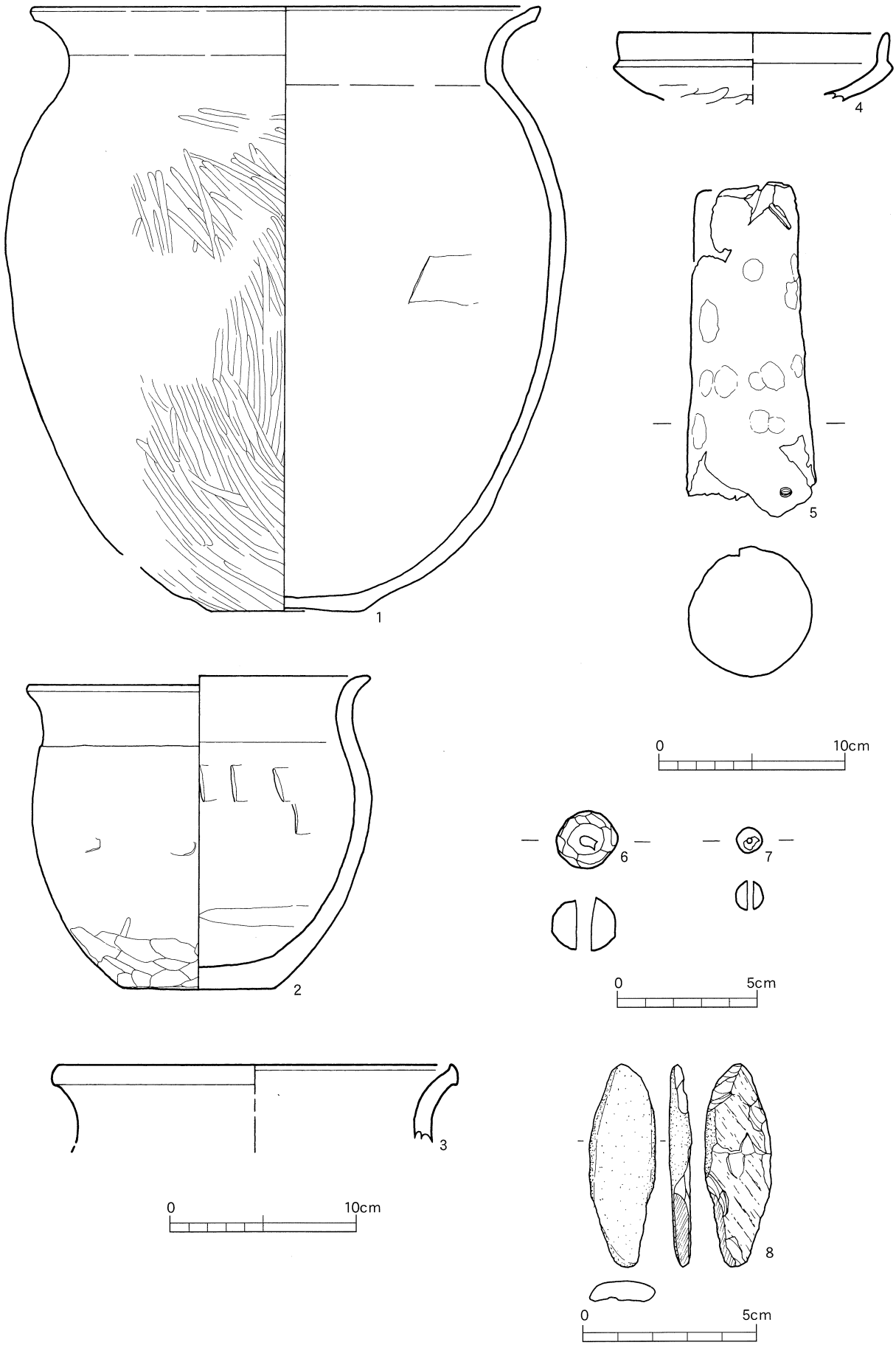
SI-4 P1
1　7.5YR4/4　褐色　ローム粒中量、焼土小少量、ローム中・小少量、焼土中微量、炭化粒微量、ローム大微量　粘性・しまり弱
2　7.5YR4/6　褐色　ローム粒中量　粘性・しまり弱

**第17図　第4号住居跡**

## SI-4

| 番　号 | 器　種 | 最大長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重量(g) | 特　　徴 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第18図5 | 土製支脚 | (17.8) | (6.95) | (6.95) | (595) | 指頭痕、籾痕等が残る。 | |
| 6 | 土　玉 | 2.1 | 2.2 | 1.8 | 8.0 | 孔径0.7cm。 | |
| 7 | 土製模造品 | 1.05 | 0.95 | 1.1 | 0.7 | 玉類を模造したものか。 | |

| 番　号 | 器　種 | 最大長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重量(g) | 素　材 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第18図8 | 不明石製品 | 4.56 | 1.49 | 0.5 | 3.9 | ホルンフェルス | |




第18図　第4号住居跡出土遺物

**所見**　本竪穴住居跡は古墳時代後期のもので、出土遺物から６世紀後半頃のものと考えられる。今回の調査エリアの中でこの時期の遺構は本遺構のみである。

## 第６号住居跡（ＳＩ-６）（第19･20図　ＰＬ７･22･23）

**位置**　調査区中央やや西寄りのＦ･Ｇ-３～５グリッドで確認された。ＳＫ30･38、ＧＫ14･19･ＳＸ２や、その他に多数のピットと重複し、いずれも本住居跡より新しい。またＳＸ２は本住居跡の覆土上面を掘り込むように確認された。本住居跡の西側壁はＧＫ19によって大きく壊されている。

**規模・平面形**　長方形で長辺4.55m、短辺3.73mである。

**主軸方向**　Ｎ－70°－Ｗ。

**壁面**　北側でＧＫ14、西側でＧＫ19により壊されている。壁は外傾して立ち上がり、確認面から床面最深部までの深さは28㎝を測る。壁が遺存する部分では壁溝が全周し、壁溝の幅は４～14㎝、深さ３～９㎝を測る。南壁の壁溝からＰ４に接続して間仕切り溝状のものが確認され、幅６～10㎝、深さ５㎝を測る。

**床面**　本住居跡内床面の南半部分の壁際を除く大半が硬化している。

**ピット**　Ｐ１～Ｐ４は主柱穴と考えられる。Ｐ１は平面形が円形で、50×45㎝、深さ38㎝を測る。Ｐ２は円形で、42×38㎝、深さ52㎝を測る。Ｐ３は円形で、41×38㎝、深さ72㎝を測る。Ｐ４は不整形で、63×40㎝、深さ40㎝を測る。東壁寄りにはＰ５があり、入り口ピットと考えられ、平面形は円形を呈し、27×22㎝、深さ30㎝を測る。本住居跡の南東隅付近にはＰ６があり、貯蔵穴と考えられる。Ｐ６は平面形が楕円形で87×65㎝、深さ32㎝を測る。この他にＰ５の北側には、溝状のピットが確認され、規模が(47)×18㎝で深さ13㎝を測る。

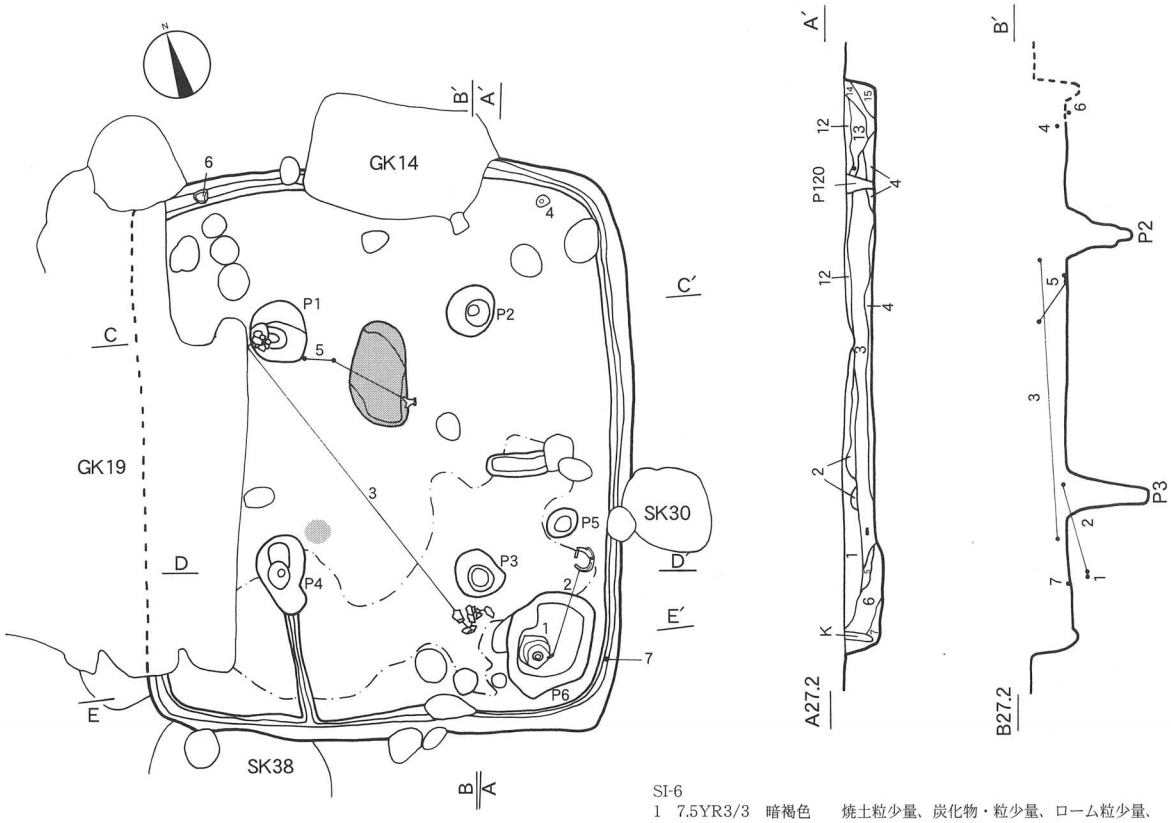
**炉**　Ｐ１とＰ２を結ぶラインに接するように、地床炉が確認されている。形状は楕円形で83×45㎝で深さ６㎝を測る。この炉は他の住居跡のものとは異なり、炉内に粘土を貼り付け、被熱し硬く焼け固まっていた。この粘土の厚さは５㎝ほどであった。

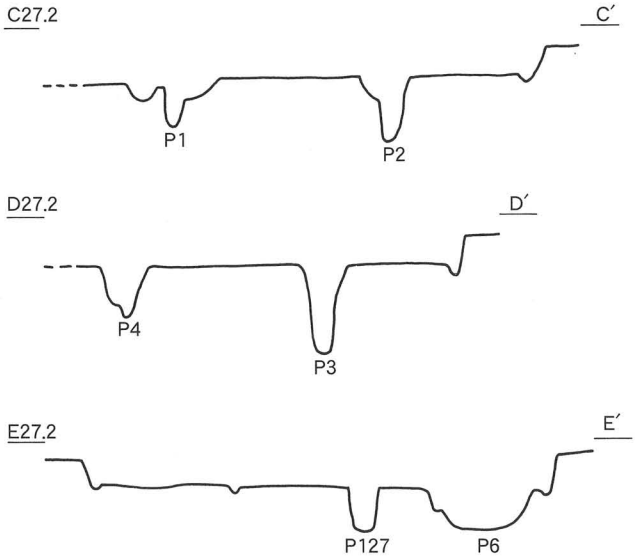
**覆土**　覆土は11層に分層でき、大部分を占める第３層は黒褐色を呈していた。本住居跡内の西側の覆土中位には焼土の堆積が認められた。土層図のＡ－Ａ′には後世のＰ120による重複状況が見られる。

**出土遺物**　出土遺物は、No.１は胴上半に文様の施文された壺形土器で、Ｐ６内から出土した。出土状況は、胴部上位と底部が潰れて出土した。No.２･３は土師器の甕形土器である。No.２はＰ５脇に倒立して出土し、その一部はＰ６内出土のものと接合している。No.３はＰ３脇出土のものとＰ１上面出土のものが接合している。No.４は土師器の椀形土器で、北東コーナー付近から出土した。No.５は土師器の高坏形土器で、覆土上層のものと床面近くのものが接合している。No.７は土製の勾玉で、Ｐ６付近の壁際から出土した。

これらの出土遺物に混じり、覆土中からは土師器小皿破片も出土しており、本住居跡が後世の影響を受けている様子が伺える。

**所見**　本竪穴住居跡は出土遺物から古墳時代前期のものと考えられる。本竪穴住居跡の入り口については、Ｐ５が入り口ピットと考えられ、長軸方向に入り口を設けない特徴を持つ。



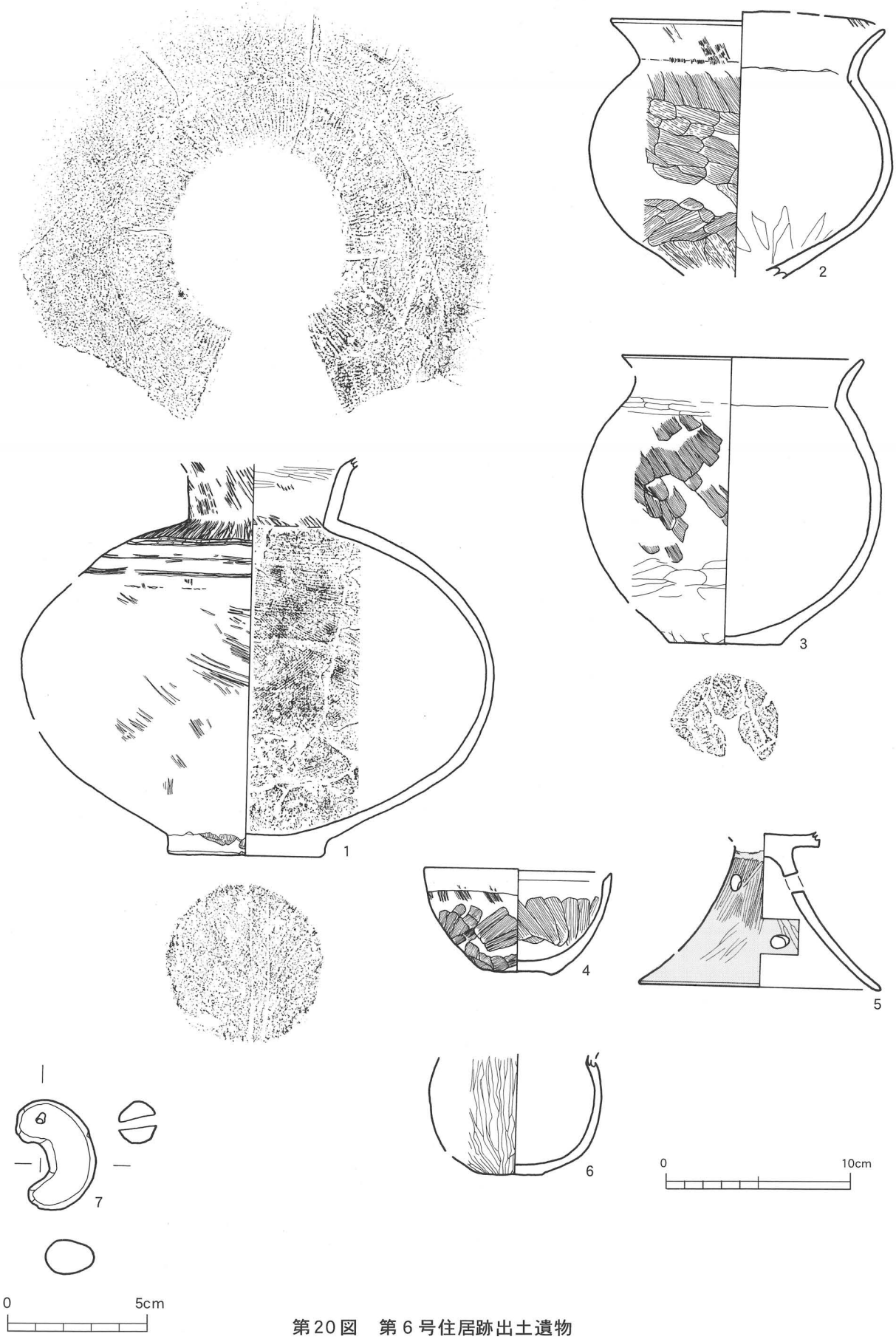




SI-6

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | 7.5YR3/3 | 暗褐色 | 焼土粒少量、炭化物・粒少量、ローム粒少量、焼土小微量、ローム小微量　粘性弱 |
| 2 | 7.5YR4/3 | 褐色 | 焼土粒多量、焼土小中量、焼土中少量、炭化物・粒少量、焼土大微量、ローム粒微量　粘性弱 |
| 3 | 10YR3/2 | 黒褐色 | ローム中・小・粒少量　粘性・しまり弱 |
| 4 | 10YR3/3 | 暗褐色 | 炭化粒微量、ローム小・粒微量　粘性・しまり弱 |
| 5 | 7.5YR3/3 | 暗褐色 | ローム小・粒微量　粘性弱 |
| 6 | 10YR3/3 | 暗褐色 | ローム粒少量、ローム中・小微量　粘性・しまり弱 |
| 7 | 10YR3/3 | 暗褐色 | ローム小・粒微量　粘性・しまり弱 |
| 8 | ―― | | |
| 9 | 10YR3/4 | 暗褐色 | ローム粒多量、粘性・しまり弱 |
| 10 | 7.5YR2/3 | 極暗褐色 | ローム小・粒微量　粘性・しまり弱 |
| 11 | 7.5YR3/4 | 暗褐色 | ローム粒少量、ローム小微量　粘性・しまり弱 |
| 12 | 7.5YR3/4 | 暗褐色 | ローム粒微量　粘性弱 |
| 13 | 7.5YR4/4 | 褐色 | ローム粒多量、ローム中少量、炭化粒微量、ローム大微量　粘性・しまり弱 |
| 14 | 7.5YR4/3 | 褐色 | ローム粒少量　粘性・しまり弱 |
| 15 | 7.5YR4/3 | 褐色 | ローム粒少量、ローム大微量　粘性・しまり弱 |

0　2m

第19図　第6号住居跡




第20図　第6号住居跡出土遺物

SI-6

| 番　号 | 器　種 | 法量(cm) | 特　　徴 | 胎土・色調・焼成 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|
| 第20図<br>1 | 土師器<br>壺 | B：(21.4)<br>C：　7.9<br>最大胴径：<br>25.1<br>頚部径：8.0 | 口縁部が欠損する。器形は、胴部が上下に潰れた形状を呈し、胴部中央に最大径を持つ。頚部は胴部から「く」の字状にやや外傾して立ち上がる。口縁部はより開く形状と考えられる。頚部と胴部及び底部付近には、まばらに刷毛目調整の痕跡が残る。胴部の上位には、頚部から放射状に櫛歯状工具（３本～４本単位で、刷毛目調整工具とは異なるようである。）による施文がなされる。その上には、同櫛歯状工具による同心円文が、間隔を開けて３重に施文されている。同心円文間には、同櫛歯状工具の先端を斜めにして連続刺突したような施文がなされている。頚部内面の上位には横方向のミガキと刷毛目調整がなされる。胴部内面全体には刷毛目調整が明瞭に残っている。 | 胎土：緻密、長石△、石英△、雲母△<br>色調：橙色<br>焼成：普通 | 貯蔵穴出土。 |
| 2 | 土師器<br>甕 | A：14.7<br>B：(13.7)<br>C：〔4.7〕<br>頚部径：<br>11.6<br>最大胴径：<br>16.1 | 底部が欠損する小型の甕。やや潰れた球形の胴部に、外傾する口縁部がつく。口縁部はいびつ。口縁部～頚部には刷毛目調整の後ナデ痕が見られる。胴部には、刷毛目調整がなされ、胴部上位と底部付近は縦方向のもので、胴部中央は横・斜め方向の傾向が見られる。頚部の内面には輪積み痕が見られ、底部の内面にはヘラナデが見られる。 | 胎土：長石○、石英○、雲母△<br>色調：にぶい黄橙色<br>焼成：普通 | |
| 3 | 土師器<br>甕 | A：〔12.9〕<br>B：15.4<br>C：〔6.0〕<br>頚部径：11.4<br>最大胴径：<br>15.8 | 小型の甕。球形の胴部で、頚部から緩く外傾する口縁部を持つ。口縁部の内外面ともに横ナデ、頚部下には細かなヘラナデが施される。胴部上半には細かな刷毛目調整がなされ、胴部下半にはヘラナデがなされる。底部側縁にはヘラ削りがなされる。底面には木葉痕。 | 胎土：長石○、石英○、褐色粒△<br>色調：橙色<br>焼成：良好 | |
| 4 | 土師器<br>椀 | A：9.8<br>B：5.6<br>C：4.1 | 椀の完形品。底部から外傾して口縁部が開く。口唇部は内削ぎ状となり、やや尖る。器面の外面は細かな刷毛目調整がなされる。口縁部は横ナデがなされ、刷毛目が不明瞭。内面にも細かな刷毛目調整。 | 胎土：長石○、石英○、雲母○<br>色調：にぶい褐色<br>焼成：普通 | |
| 5 | 土師器<br>高　坏 | B：(8.2)<br>脚部底径：<br>〔13.0〕 | 高坏の脚部である。脚部は「ハ」の字状に開き、裾部はやや広がる。坏部の一部には、接合面が残る。脚部の外面には細かなヘラミガキが施され、上下２段に透かし孔が３個ずつ開けられている。孔径は１cm。全体に器面は荒れている。外面赤彩。 | 胎土：長石△、石英◎、雲母○<br>色調：明赤褐色<br>焼成：普通 | |
| 6 | 土師器<br>椀？ | B：(6.4)<br>C：　3.5 | 口縁部が欠損する。底部から内湾し球胴形をなす。頚部はややくびれる、口縁部が外傾するものと思われる。器面には縦方向の密なミガキがなされる。 | 胎土：緻密、長石△、石英△、雲母△<br>色調：橙色<br>焼成：普通 | |

| 番　号 | 器　種 | 最大長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重量(g) | 特　　徴 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第20図７ | 土製勾玉 | 3.9 | 2.9 | 1.6 | 11.5 | 背中はやや扁平。 | 東壁際出土。 |

## 第８号住居跡（ＳＩ-８）（第21図　ＰＬ8）

**位置**　調査区西寄りのＥ-２・３グリッドで確認された。ＧＫ15･17･39等と重複しいずれも本住居跡より新しい。

**規模・平面形**　一辺が2.96mの方形で、小型の竪穴住居跡である。

**主軸方向**　Ｎ－25°－Ｅ。

**壁面**　壁は外傾して立ち上がり、西壁は遺存状況が良くない。確認面から床面最深部までの深さは、10㎝を測る。壁溝は確認されていない。本住居跡の西壁はほとんど削平を受け、東壁の一部と南西隅付近はＧＫにより壊されている。

**床面**　床面は全体的に平坦であるが、東側の一部が緩やかに傾斜している。床の硬化面は確認できず、全般的に軟弱である。

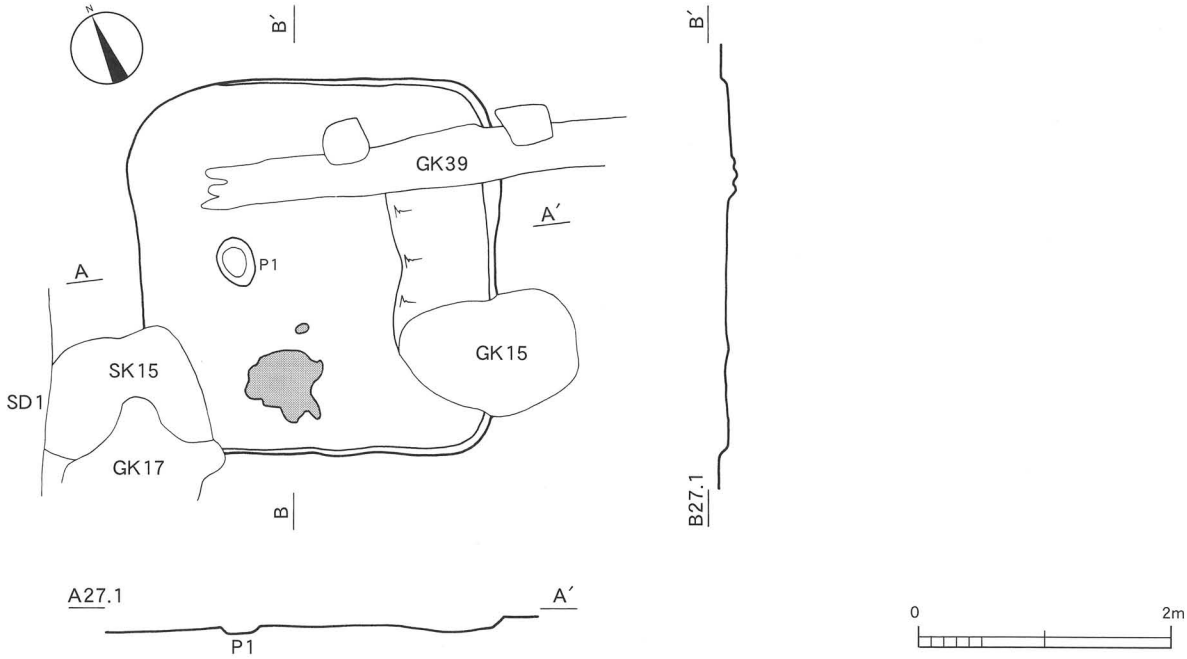
**ピット**　本住居跡内の西側にＰ１のみが確認され、平面形が楕円形で40×30㎝、深さ６㎝を測る。柱穴と考えるには浅い。

**炉**　本住居跡内の南壁寄りに、床面からやや盛り上がる焼土が確認され、通常の覆土中の焼土とはその状況が異なることから、地床炉と判断した。炉の焼土を排除しても底面が焼け固まる状況は見られず、その底面もあまり窪むことがない。

**覆土**　覆土の遺存は良くないが、褐色土が堆積していた。遺構確認の段階で炉の上面が確認されていた。

**出土遺物**　土師器の小破片が出土したのみである。図示はしていないが、器種としては刷毛目調整の見られる甕形土器破片や、器台形土器破片・壺形土器破片が出土している。

**所見**　本遺構は小型の竪穴住居跡であり、出土遺物から古墳時代前期のものと考えられる。




第21図　第８号住居跡

## 第９号住居跡（ＳＩ-９）（第22･23図　ＰＬ８･23）

**位置**　調査区西寄りのＢ・Ｃ-２～グリッドで確認された。ＧＫ１･16･18･22～24･26･27･35や確認調査時のトレンチ（ＧＫ21）によって著しく壊されている。

**規模・平面形**　長方形で、長辺6.73m、短辺5.52mを測る。

**主軸方向**　Ｎ－70°－Ｗ。

**壁面**　ＧＫにより壁の大部分を壊され、完存する辺はない。壁の立ち上がりは緩やかに外傾する。確認面から床の最深部までの深さは、16㎝を測る。壁溝は確認されていない。

**床面**　北側の床面をＧＫ21により壊されている。床面の硬化面は確認されてない。

**ピット**　９基のピットが確認されているが、今回の調査区内で見られる同時期の竪穴住居跡のような規格的な柱穴の配置は見られない。本住居跡のピット番号は、便宜的に北側からふった。Ｐ１は西壁際に確認され、平面形は円形で径30㎝、深さ23㎝を測る。Ｐ２は炉２にかかり確認され、平面形は円形で径27㎝、深さ35㎝を測る。Ｐ３はＰ２の東側に確認され、平面形が楕円形で長径40×短径25㎝、深さ40㎝を測る。Ｐ４は炉１の東側に確認され、平面形が円形で径40㎝、深さ24㎝を測る。Ｐ５はＰ３の南側にあり、平面形が円形で径27㎝、深さ40㎝を測る。Ｐ６は東壁際に確認され、平面形は円形で径25㎝であり深さは23㎝、東側からやや斜めに掘り込まれており、入り口ピットの可能性が考えられる。しかしながら、このピットの周辺には床面の硬化部は見られなかった。Ｐ７はＰ６の南東側に確認され、平面形が楕円形で長径50×短径４０㎝を測り、深さ27㎝を測る。本住居跡内で確認されたピットの中で一番径が大きい。Ｐ６を入り口ピットと仮定すれば、Ｐ７は貯蔵穴の可能性が導きだせようか。Ｐ８はＰ７の西側に確認され、平面形は楕円形で長径28×短径25㎝、深さ８㎝と浅い。Ｐ９は炉１の西側に確認され、平面形は円形で径は25㎝、深さ25㎝を測る。

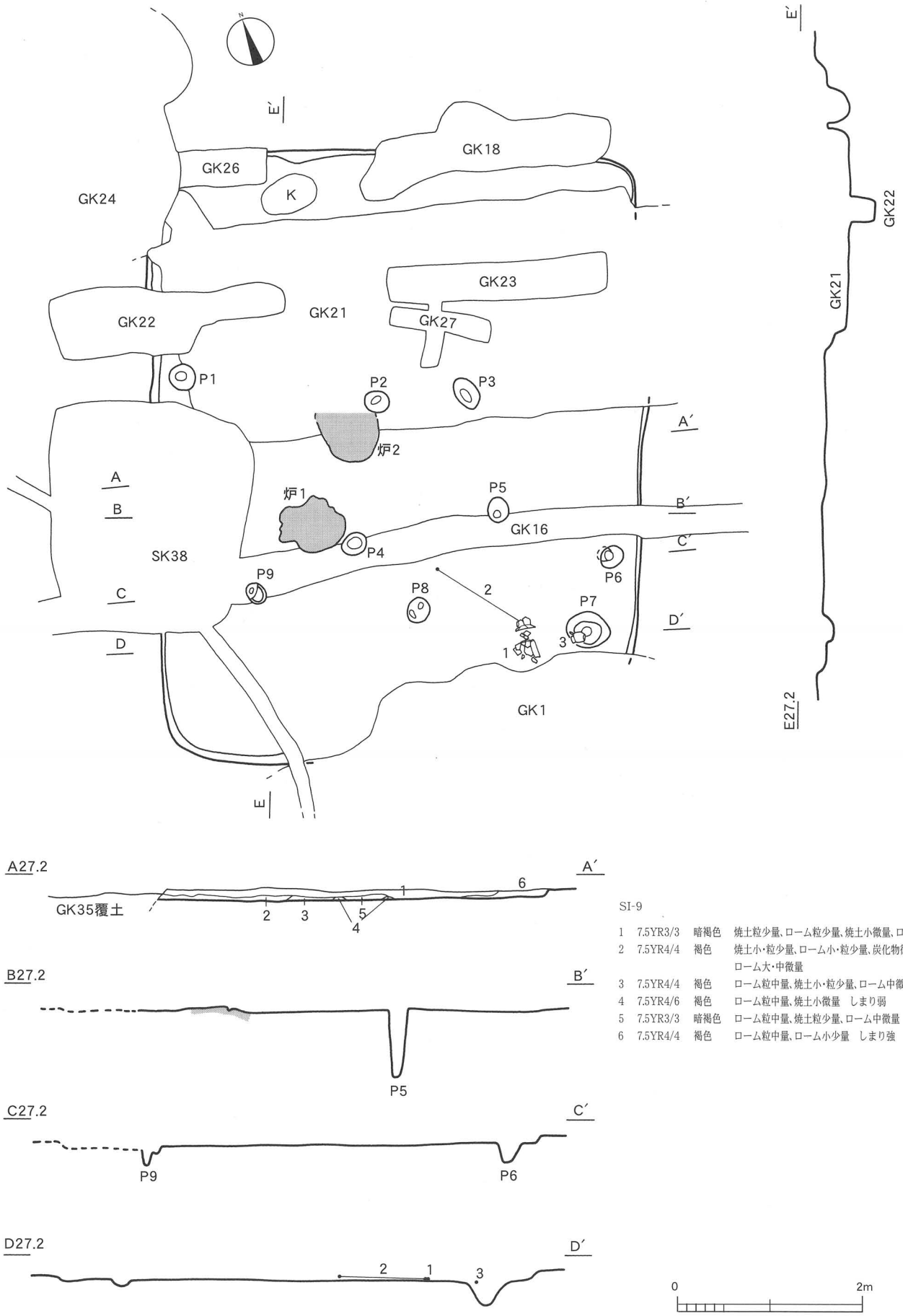
**炉**　炉１と炉２の２ヶ所の地床炉が確認され、いずれも住居跡内の中央部西寄りにあり近接している。炉１の平面形は不整形で72×60㎝、床面に盛り上がる状況で確認され、底面は焼け固まっていない。炉２の平面形はおそらく楕円形で、底面のロームは焼け固まり赤化している。

**覆土**　覆土の遺存状況は良くないが、６層に分層できる。第２･３層には焼土粒が多い。

**出土遺物**　出土遺物は全体的に少ないが、南側から若干出土した。No.１～３は土師器の甕形土器であり、No.３は小型のものである。No.１･２は同様な位置から出土し、No.３はＰ７上から細かく割れて出土した。

No.１の甕口縁部は、端部が肥厚する特徴を持ち畿内地域の影響が感じられる。しかしながら胎土は在地のものと考えられる。

**所見**　出土した遺物はいずれも古墳時代前期のものであり、本住居跡の時期も古墳時代前期のものと考えられる。




SI-9

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | 7.5YR3/3 | 暗褐色 | 焼土粒少量、ローム粒少量、焼土小微量、ローム中微量 |
| 2 | 7.5YR4/4 | 褐色 | 焼土小・粒少量、ローム小・粒少量、炭化物微量、ローム大・中微量 |
| 3 | 7.5YR4/4 | 褐色 | ローム粒中量、焼土小・粒少量、ローム中微量 |
| 4 | 7.5YR4/6 | 褐色 | ローム粒中量、焼土小微量　しまり弱 |
| 5 | 7.5YR3/3 | 暗褐色 | ローム粒中量、焼土粒少量、ローム中微量　しまり弱 |
| 6 | 7.5YR4/4 | 褐色 | ローム粒中量、ローム小少量　しまり強 |

第22図　第9号住居跡

**第23図　第9号住居跡出土遺物**

S I-9

| 番　号 | 器　種 | 法量(cm) | 特　　徴 | 胎土・色調・焼成 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|
| 第23図<br>1 | 土師器<br>甕 | A：〔17.8〕<br>B：(17.7)<br>頚部径：<br>〔14.6〕<br>最大胴径：<br>〔19.2〕 | 甕の口縁部～胴部の破片。胴部は球形を呈し、頚部で括れ口縁部が外反。特に頚部は直立ぎみ。口唇部は丸みを持って肥厚し、その端部がやや内向きとなる。胴部～頚部の器厚は、全体的に薄い。口縁部外面は横ナデ。頚部～胴部の外面には、刷毛目調整の後、ヘラミガキが施されている。特に胴下半にはヘラミガキが密にされる。頚部内面に刷毛目調整がなされる。 | 胎土：長石◎、石英◎、雲母△<br>色調：灰黄褐色<br>焼成：普通 | |
| 2 | 土師器<br>甕 | A：〔21.7〕<br>B：(10.6)<br>頚部径：<br>〔18.8〕 | 甕の口縁部～胴部上半の破片である。胴部から内湾し、頚部で括れ、口縁部が開く。頚部～胴部には刷毛目調整が施され、器壁が擦られやや薄くなり、口縁部との境目に段差ができる。口縁部は横にナデられる。頚部内面にも刷毛目調整が見られ、胴部内面にはヘラナデの痕跡が見られる。 | 胎土：長石○、石英○、雲母○<br>色調：にぶい黄橙色<br>焼成：普通 | |
| 3 | 土師器<br>甕 | A：10.8<br>B：12.6<br>C：6.0<br>頚部径：<br>7.65<br>最大胴径：<br>11.2 | 小型の甕。胴部は球胴形をなし、頚部で括れ、口縁部が外反する。口唇部は舌状をなす。口縁部には横ナデによる段差が見られる。頚部及び胴部の外面には、まばらに刷毛目調整が見られる。頚部の内面には指頭痕がのこる。 | 胎土：長石△、石英◎、雲母△<br>色調：にぶい橙色<br>焼成：やや不良 | |

## ３．方形竪穴遺構

調査区内で方形竪穴遺構と認識できたのは、以下の第１号方形竪穴遺構のみであった。

### 第１号方形竪穴遺構（ＳＩ-７）（第24図　ＰＬ8･23）

**位置**　調査区西寄りのＥ-３・４グリッドで確認された。ＳＫ24･34、ＧＫ１･16･19により著しく壊されている。

**規模・平面形**　長方形で、長軸3.72m、短軸2.78mを測る。

**主軸方向**　Ｎ－15°－Ｅ。

**壁面**　北東コーナーと東側の床がＧＫ19に大きく壊されている。壁は緩やかに立ち上がる。確認面から床の最深部までの深さは29㎝を測る。壁溝等は確認されていない。

**床面**　平坦で北側が９㎝ほど一段下がっている。床面の明確な硬化面は確認されてない。

**ピット**　遺構内のピットは６ヶ所確認され、便宜的に北側から番号をふった。Ｐ１は北壁に確認され、平面形は楕円形で長径25×短径18㎝、深さ16㎝を測る。Ｐ２とＰ３は接しており、Ｐ２の平面形は楕円形で長径27×短径20㎝、深さ26㎝を測る。Ｐ３は平面形が楕円形で長径42×短径（27）㎝、深さ18㎝を測る。Ｐ４は床面の中央部に確認され、平面形が円形で径23㎝、深さ10㎝を測る。Ｐ５は西壁寄りに確認され、平面形が円形で径16㎝、深さ16㎝を測る。Ｐ６は床面中央の南壁寄りに確認され、平面形は円形で径20㎝であり、深さは28㎝を測る。このピットは西側へ斜めに掘り込まれている。Ｐ６とＰ２又はＰ３は主軸ライン上にならび、本遺構の構造上対をなすものかも知れない。

**炉**　炉は確認されていない。

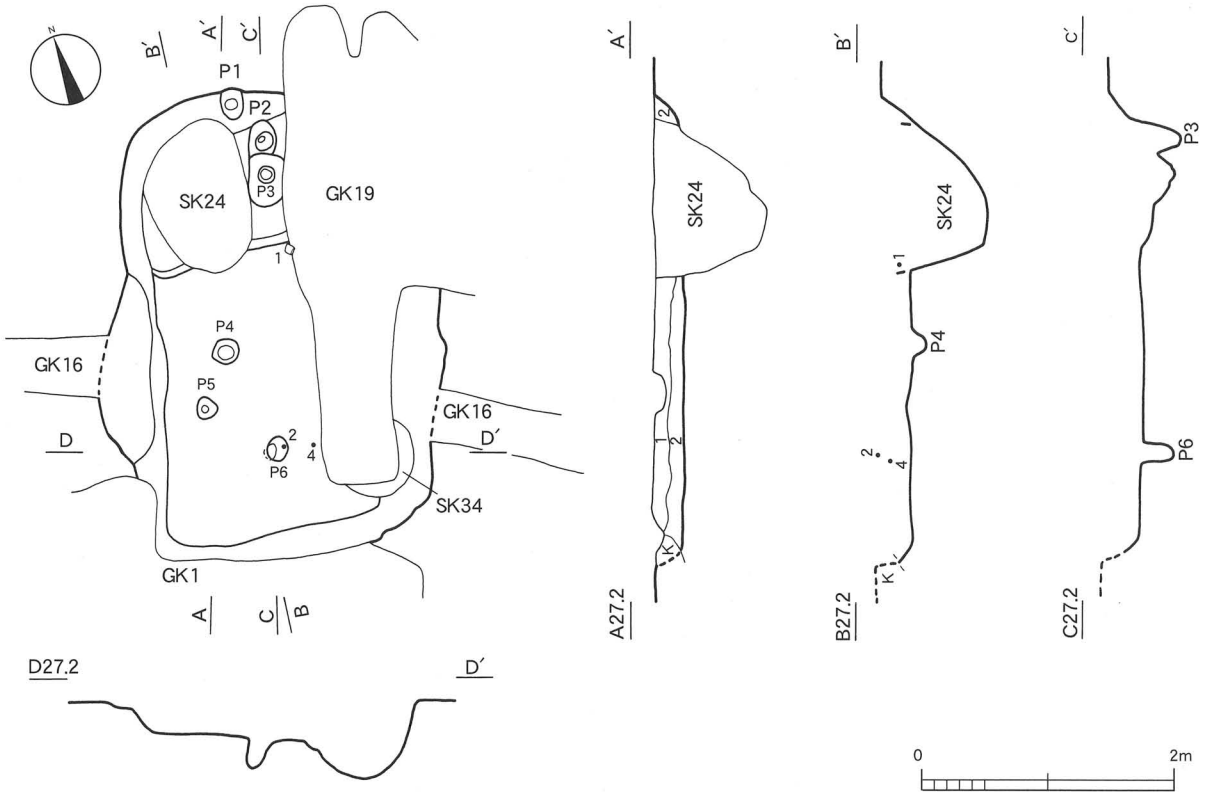
**覆土**　覆土は２層に分層できる。第１層と第２層ともに暗褐色土で、第１層には焼土粒が微量に含まれている。

**出土遺物**　No.１は常滑産陶器の甕の口縁部破片である。No.２・３は白磁で、No.２は皿の口縁部破片、No.３は椀の底部破片である。No.１はＧＫ19との境界付近から出土した。No.２はＰ６上から出土しいている。No.３は、本遺構とＧＫ19の重複部分のＧＫ19側から出土したものであるが、本遺構出土として扱った。これら以外に白磁の小破片がもう１点出土しているが、あまりに小さいため図化はしていない（口絵参照）。No.４は板状の鉄製品である。Ｐ６付近から出土した。

この他、土師器小皿の口縁部小破片や、土師器椀の高台部分が出土している。そして、鉄滓及び鞴の羽口の溶解したものが数片出土している。

**所見**　本遺構から出土した遺物の中で、No.１の常滑産陶器の甕は赤羽編年の４型式に比定されるものと考えられる。およその製作年代は1190年～1220年が与えられている。No.２は横田・森田編年に当てはめれば、白磁皿のⅧ類に比定され12世紀代の年代が与えられている。また、No.３の白磁椀Ⅴ類またはⅥ類とされる。このような遺物の年代からすれば、本遺構は12世紀後半から13世紀前半頃の年代観が求められよう。

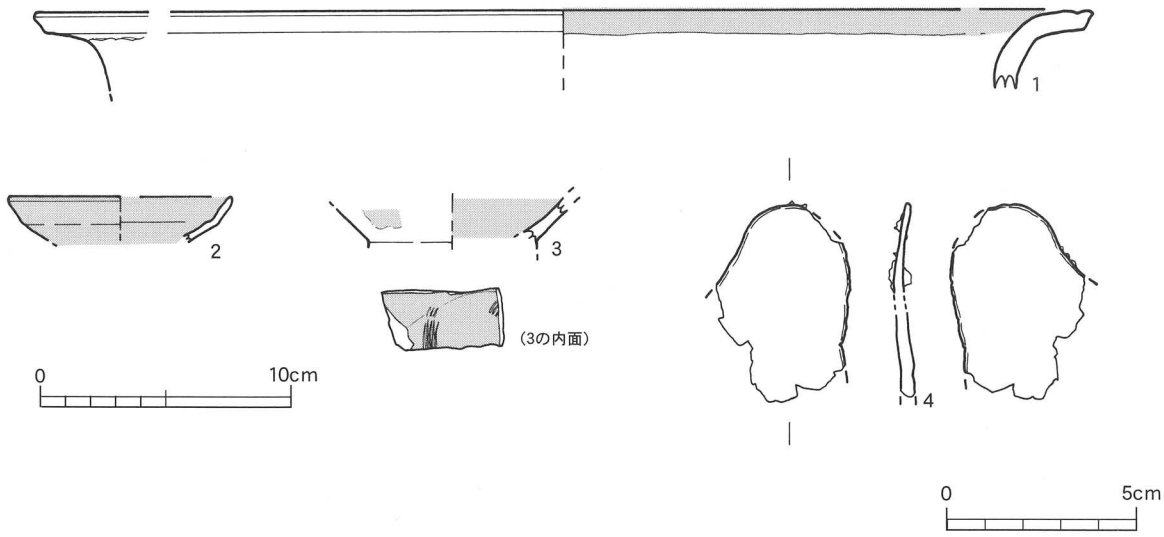
また、出土遺物に鉄滓及び鞴の羽口の溶解したものが出土しており、調査区外のいずれかに鍛冶作業を行った遺構が存在する可能性を示している。




第１号方形竪穴遺構

1　7.5YR3/4　暗褐色　ローム小・粒中量、ローム中少量、焼土粒微量、炭化粒微量　粘性弱、しまり強

2　7.5YR3/4　暗褐色　ローム小・粒中量、ローム大・中微量　粘性弱




第24図　第１号方形竪穴遺構・出土遺物

**第1号方形竪穴遺構**

| 番　号 | 器　種 | 法量(cm) | 特　　徴 | 胎土・色調・焼成 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|
| 第24図<br>1 | 陶　器<br>甕 | A：〔42.0〕<br>B：（3.1）<br>頚部径：<br>〔35.8〕 | 常滑産陶器の大型甕の口縁部破片である。口縁部が頚部で大きく折れ曲がり、口唇端部がつまみ上げられている。口縁部外面には成形痕が残る。口縁部内面の平坦面には自然釉が付着している。 | 胎土：灰白色<br>色調：赤褐色(器面)、オリーブ灰色(自然釉)<br>焼成：良好 | 常滑産<br>常滑４型式<br>(赤羽編年) |
| 2 | 磁　器<br>皿 | A：〔9.1〕<br>B：（1.5） | 白磁皿の破片である。小型のもので、底部付近から口縁部に向かい緩く開く。口唇端部の外面はやや丸みを持つ。内面には沈線が巡る。全面に釉がかかっている。 | 胎土：灰白色<br>色調：にぶい黄色<br>焼成：良好 | 白磁皿Ⅷ類<br>12世紀代 |
| 3 | 磁　器<br>椀 | B：（2.1） | 白磁椀の底部付近の破片。底部から直線的に開く器形で、高台も直立するようである。釉は内面の全面にかかり、外面は全面に塗布されていない。内面には見込み部に細い弧線や、櫛描き文が見られる。 | 胎土：灰白色<br>色調：灰白色<br>焼成：良好 | 白磁椀Ⅴ類又はⅥ類（横田・森田編年） |

| 番　号 | 器　種 | 最大長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重量(g) | 素　材 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第24図４ | 不明鉄製品 | (5.1) | (3.5) | (0.5) | (12.0) | 鉄 | 板状で先端が丸みを持つ。 |

## 4．土坑

### 第1号土坑（ＳＫ 1）（第25図　ＰＬ10）

**位置**　N-8区で確認され、遺構の一部が調査区外にある。Ｐ28・176・177と重複関係にあるが、新旧関係は把握できなかった。

**規模と平面形**　平面形は楕円形で、長径125×短径95㎝で、深さは24㎝を測る。主軸方向はＮ－70°－Ｅである。

**壁面・底面**　緩く外傾して立ち上がる。底面は平坦で、硬化した部分などは見られない。

**覆土**　覆土は3層に分層できた。土層図中の第1層は旧表土である。

**出土遺物**　出土した遺物は少ないが、№1・2の土師器小皿が出土している。

**所見**　出土遺物は少ないが土師器小皿が出土しており、11世紀から12世紀代のものと考えられる。

### 第14号土坑（ＳＫ 14）（第25図　ＰＬ10）

**位置**　L-7区周辺に確認された。本遺構はＳＩ-1・2やＳＫ23、そしてＳＢ1.Ｐ5と重複している。新旧関係は、ＳＢ1.Ｐ5との関係は不明であるが、本遺構がいずれのものより新しい。

**規模と平面形**　平面形は楕円形を呈し、長径449×短径152㎝で、深さが最深部で32㎝を測る。

**壁面・底面**　壁面は全体的に外傾して立ち上がる。特に北側では外傾した後、緩く立ち上がる。底面は東側がやや高くなっているが全体的には平坦である。

**覆土**　土層は5層に分層でき、第1層は暗褐色土で、下層の第3層は褐色土である。第1層には焼土粒や炭化物が目だって含まれていた。第4層はロームブロックによる貼り床のようなものである。

**出土遺物**　この遺構から出土し図示したものは、№3の常滑産陶器の甕破片である。これ以外に土師器高台付坏の底部破片、土師器内黒高台付坏の底部破片、土師器小皿口縁部破片が出土している。

**所見**　本遺構はＳＢ1.Ｐ5との新旧関係が不明瞭であるが、常滑産陶器の甕破片が出土していることから11世紀から13世紀前半代のものと考えられえる。

### 第23号土坑（ＳＫ 23）（第25図）

**位置**　L-6区で確認され、ＳＫ14と重複しており、新旧関係はＳＫ14が新しい。

**規模と平面形**　平面形は楕円形で長径123×短径55㎝を測る。深さは最深部で21㎝を測る。

**壁面・底面**　底面は平坦で壁が緩く外傾する。

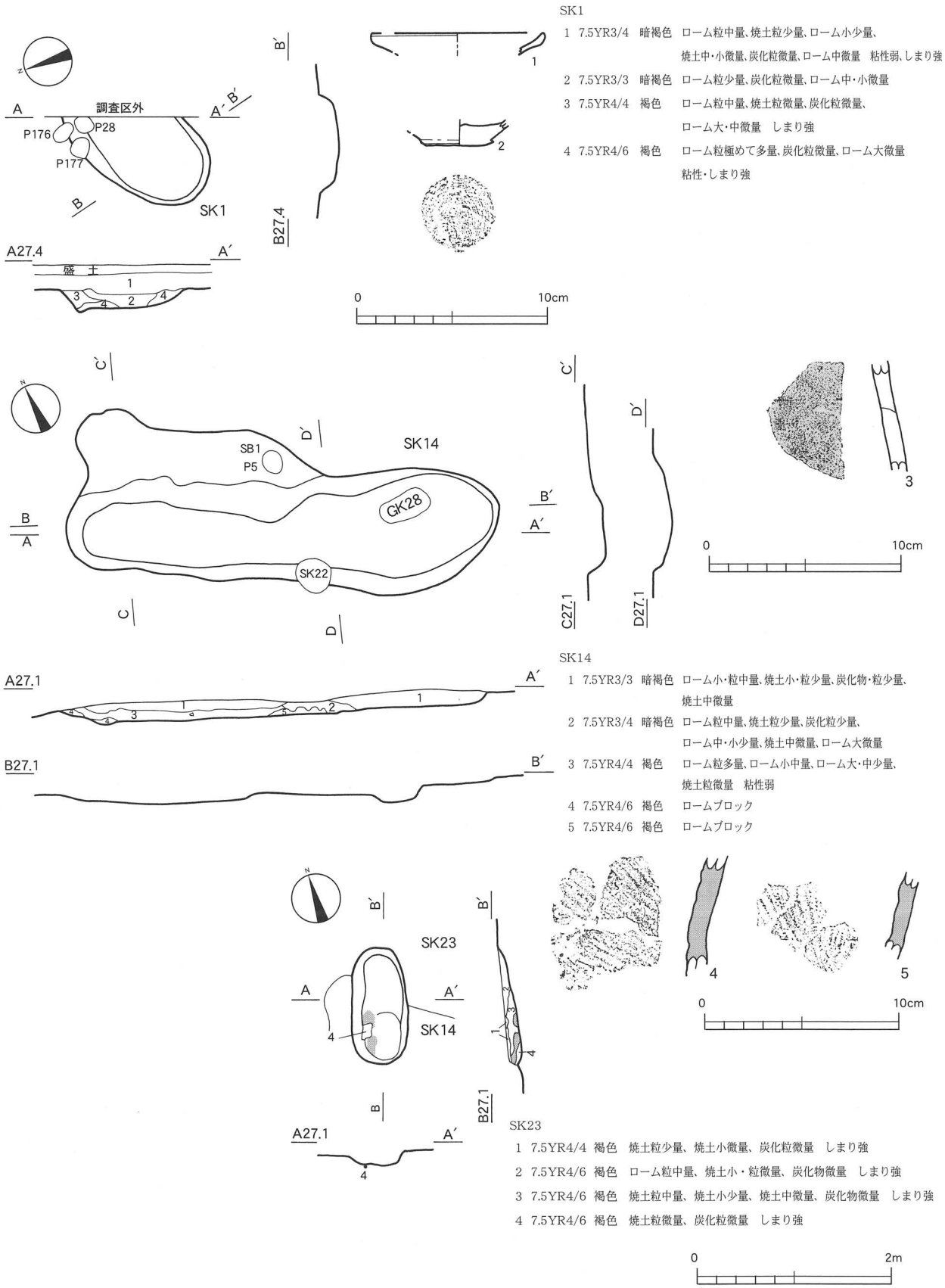
**覆土**　覆土は全部で4層に分層できる。全体的には褐色土で、焼土粒や炭化物粒の混入が見られる。南側の底面近くに焼土が堆積している。

**出土遺物**　出土遺物は、№4・5の縄文土器が焼土上から出土している。これらの縄文土器は縄文時代早期後半の条痕文を施文した土器である。これらの土器は繊維を含み非常にもろくなっている。

**所見**　本遺構はその形状や焼土の堆積、そして出土遺物から、縄文時代早期の炉穴と考えられる。今回の調査で確認された縄文時代の遺構は、本遺構のみである。

### 第24号土坑（ＳＫ 24）（第26図　ＰＬ10）

**位置**　E-4区で確認された。第1号方形竪穴遺構と重複しており、本遺構が新しい。




SK1

1 7.5YR3/4 暗褐色 ローム粒中量、焼土粒少量、ローム小少量、焼土中・小微量、炭化粒微量、ローム中微量 粘性弱、しまり強

2 7.5YR3/3 暗褐色 ローム粒少量、炭化粒微量、ローム中・小微量

3 7.5YR4/4 褐色 ローム粒中量、焼土粒微量、炭化粒微量、ローム大・中微量 しまり強

4 7.5YR4/6 褐色 ローム粒極めて多量、炭化粒微量、ローム大微量 粘性・しまり強

SK14

1 7.5YR3/3 暗褐色 ローム小・粒中量、焼土小・粒少量、炭化物・粒少量、焼土中微量

2 7.5YR3/4 暗褐色 ローム粒中量、焼土粒少量、炭化粒少量、ローム中・小少量、焼土中微量、ローム大微量

3 7.5YR4/4 褐色 ローム粒多量、ローム小中量、ローム大・中少量、焼土粒微量 粘性弱

4 7.5YR4/6 褐色 ロームブロック

5 7.5YR4/6 褐色 ロームブロック

SK23

1 7.5YR4/4 褐色 焼土粒少量、焼土小微量、炭化粒微量 しまり強

2 7.5YR4/6 褐色 ローム粒中量、焼土小・粒微量、炭化物微量 しまり強

3 7.5YR4/6 褐色 焼土粒中量、焼土小少量、焼土中微量、炭化物微量 しまり強

4 7.5YR4/6 褐色 焼土粒微量、炭化粒微量 しまり強

第25図 土坑・出土遺物（1）

**規模と平面形**　平面形は楕円形を呈し、長径121×短径80㎝である。深さは最深部で64㎝を測る。

**壁面・底面**　底面から外傾して立ち上がる。円形の底面とその北側にテラス状の平坦面が見られる。

**覆土**　覆土は全部で8層に分層できた。土層の大部分は暗褐色土で、下層ほどしまりがない。

**出土遺物**　第2層付近からNo.6の鉄製鎌が出土している。この他に出土遺物は見られない。

**所見**　本遺構の時期については、明確な時期を示すようなものはないが、本遺構の覆土が第1号方形竪穴遺構と類似することから、あまり隔絶しない時期のものかと思われる。このような観点からすれば、12世紀から13世紀前半代のものと想定できる。そして、出土した鎌の形態もそれを裏付けているように思える。

### 第31号土坑（ＳＫ31）（第26図　ＰＬ11）

**位置**　G-4区から確認された。一部を旧真鍋小学校の校舎関連の基礎によって壊されている。

**規模と平面形**　平面形は隅丸方形を呈し、長軸86×短軸73㎝を測り、深さは34㎝である。

**壁面・底面**　平坦な底面からほぼ直立して立ち上がる。

**覆土**　上層には暗褐色土が堆積し、下層には黒褐色土が堆積していた。

**出土遺物**　出土遺物は、No.7の管状土錘とNo.8の常滑産陶器の甕の口縁部破片が出土している。No.8はその特徴から、第1号方形竪穴遺構出土の常滑産陶器の甕口縁部と同一個体と考えられる。

**所見**　本遺構はNo.8の出土遺物から、およそ第1号方形竪穴遺構と同様な12世紀後半から13世紀前半代のものと考えられる。

### 第35号土坑（ＳＫ35）〔旧貝ピット〕（第26図　ＰＬ11）

**位置**　E-4区に確認された。ＧＫ19、Ｐ92と重複しており、重複関係はＧＫ19より古く、Ｐ92との関係は明確ではない。

**規模と平面形**　北側がＧＫ19により壊されているが、平面形はおよそ長楕円形を呈するものか。長径(55)×24㎝で、最深部の深さは8㎝を測る。

**壁面・底面**　底面から緩く立ち上がる。北側がやや高くなり、断面形は全体的に丸い。

**覆土**　暗褐色土中から貝が若干確認できる状況であった。

**出土遺物**　土器などの遺物は出土しておらず、ヤマトシジミが1.4㎏出土した。出土したヤマトシジミの貝殻は右が833個、左が842個であった。これらの中には、左右合わせ口になるものが16点確認できた。出土した貝殻を殻長と殻高で計測すると以下の表の結果が得られた。

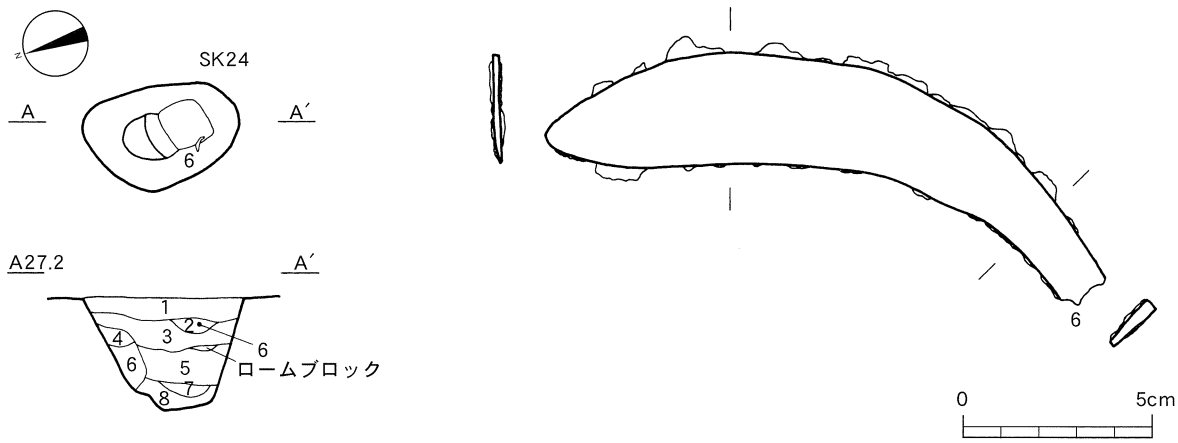
殻長では右・左とも1.8～2.4㎝のものが多く、殻高では1.6～2.0㎝のものが多い傾向にある。これらの計測数値は以下のとおりである。

**ＳＫ35出土合わせ口貝の殻長・殻高（cm）**

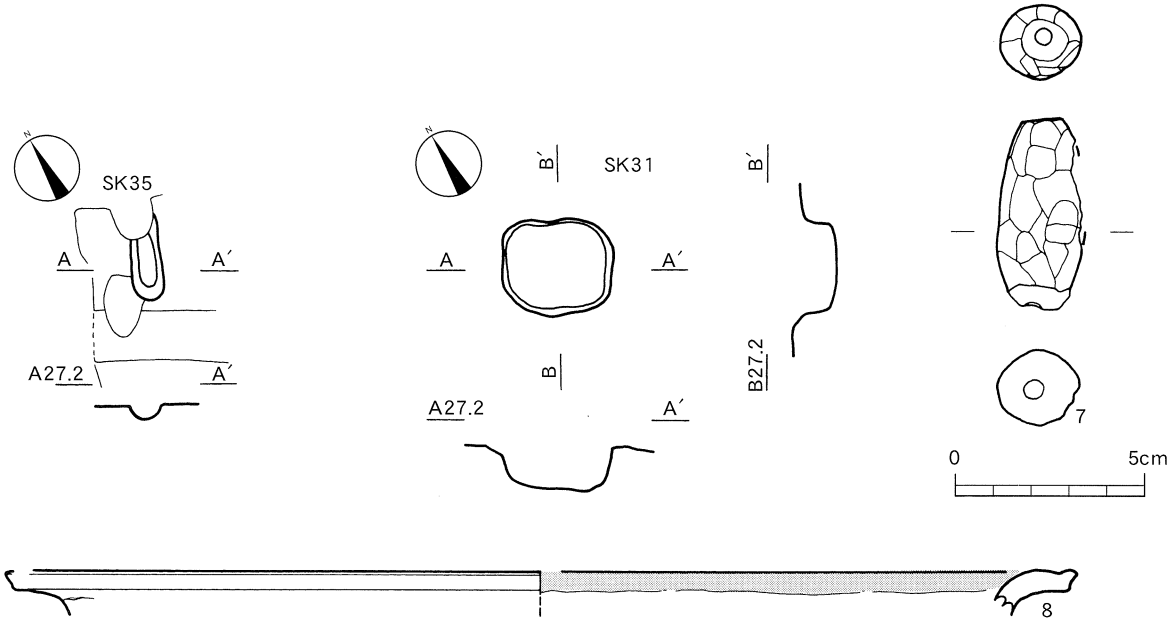
| No. | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 殻長 | 2.7 | 2.5 | 2.0 | 1.8 | 1.3 | 2.3 | 2.0 | 2.1 | 2.5 | 2.4 | 2.3 | 2.2 | 2.3 | 2.6 | 2.4 | 2.1 |
| 殻高 | 2.3 | 2.1 | 1.9 | 1.6 | 1.1 | 2.0 | 1.8 | 1.8 | 2.1 | 2.1 | 2.1 | 2.0 | 1.9 | 2.2 | 2.0 | 1.8 |

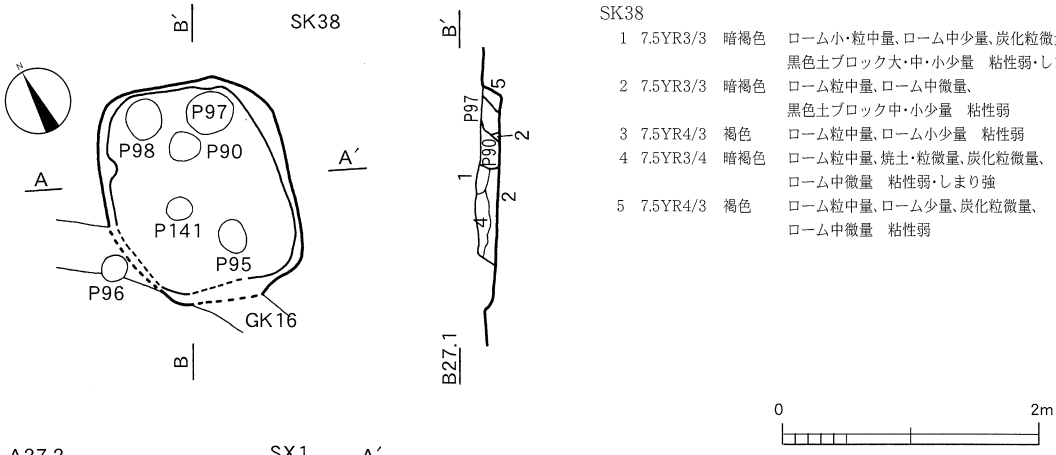
**ＳＫ35出土ヤマトシジミの殻長（cm）**

| cm | 0.8 | 0.9 | 1.0 | 1.1 | 1.2 | 1.3 | 1.4 | 1.5 | 1.6 | 1.7 | 1.8 | 1.9 | 2.0 | 2.1 | 2.2 | 2.3 | 2.4 | 2.5 | 2.6 | 2.7 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 右 | 1 | 2 | 9 | 11 | 21 | 41 | 37 | 32 | 34 | 31 | 66 | 59 | 90 | 85 | 95 | 96 | 68 | 37 | 17 | 1 | 833個 |
| 左 | 3 | 4 | 8 | 19 | 27 | 33 | 32 | 32 | 38 | 54 | 66 | 63 | 76 | 85 | 96 | 99 | 61 | 31 | 14 | 1 | 842個 |




SK24　1　7.5YR3/4　暗褐色　ローム小・粒中量、焼土小・粒微量、炭化物・粒微量　粘性弱
2　7.5YR3/4　暗褐色　炭化物少量、炭化粒微量、ローム中・小・粒微量　粘性・しまり弱
3　7.5YR3/4　暗褐色　ローム粒中量、ローム小少量、炭化粒微量、ローム大・中微量　粘性・しまり弱
4　7.5YR4/4　褐色　ローム大・粒中量、ローム中。小少量　粘性・しまり弱
5　7.5YR3/4　暗褐色　ローム粒中量、ローム小少量、ローム大・中微量　粘性弱




SK38
1　7.5YR3/3　暗褐色　ローム小・粒中量、ローム中少量、炭化粒微量、黒色土ブロック大・中・小少量　粘性弱・しまり強
2　7.5YR3/3　暗褐色　ローム粒中量、ローム中微量、黒色土ブロック中・小少量　粘性弱
3　7.5YR4/3　褐色　ローム粒中量、ローム小少量　粘性弱
4　7.5YR3/4　暗褐色　ローム粒中量、焼土・粒微量、炭化粒微量、ローム中微量　粘性弱・しまり強
5　7.5YR4/3　褐色　ローム粒中量、ローム少量、炭化粒微量、ローム中微量　粘性弱

第26図　土坑・出土遺物（2）

ＳＫ35出土ヤマトシジミの殻高（cm）

| cm | 0.6 | 0.7 | 0.8 | 0.9 | 1.0 | 1.1 | 1.2 | 1.3 | 1.4 | 1.5 | 1.6 | 1.7 | 1.8 | 1.9 | 2.0 | 2.1 | 2.2 | 2.3 | 2.4 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 右 | 1 | 1 | 8 | 14 | 31 | 41 | 34 | 30 | 28 | 43 | 65 | 82 | 112 | 119 | 115 | 56 | 41 | 10 | 2 | 833個 |
| 左 | 0 | 3 | 6 | 19 | 32 | 47 | 35 | 33 | 43 | 43 | 70 | 86 | 81 | 110 | 101 | 75 | 38 | 19 | 1 | 842個 |

**所見**　帰属時期については、覆土の状況から11世紀から13世紀前半代のものか。

## 第38号土坑（ＳＫ38）〔旧Ｓ Ｉ-５〕（第26図　ＰＬ11）

**位置**　F-4・5区で確認された。ＳＩ-６、ＳＸ１、ＧＫ16、Ｐ90・95・97・98・141と重複している。本遺構はＳＩ-６より新しく、ＳＸ１、ＧＫ16、Ｐ90・97より古い。なお、Ｐ95・98・141との新旧関係については、他のピットの状況から本遺構が古いものと考えた。

**規模と平面形**　隅丸方形で、長軸1.65ｍ×短軸1.5ｍを測る。最深部までの深さは、17㎝を測る。

**壁面・底面**　南西壁や東壁の一部が壊されている。壁は緩やかに外傾する。床面は平坦である。

**覆土**　覆土は５層に分層できた。覆土の色調や特徴は、第１号方形竪穴遺構に類似している。

**出土遺物**　本遺構に伴う遺物は出土していない。

**所見**　当初本遺構は小型のカマドを持つ竪穴住居跡（ＳＸ１の砂質粘土は、カマド構築材に類似）と考えていたが、結果的に土坑と判断した。本遺構の時期は、覆土の状況や在り方から、11世紀から13世紀前半代の時期を想定した。

ＳＫ

| 番　号 | 器　種 | 法量(㎝) | 特　　徴 | 胎土・色調・焼成 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|
| 第25図<br>1 | 土師器<br>小　皿 | Ａ：〔9.0〕<br>Ｂ：（1.1） | 口縁部の破片である。器形は底部から大きく開くものと思われ、口縁部がやや肥厚する。ロクロ成形。内外面ともにナデ。 | 胎土：長石△、石英△、雲母△、赤色粒△<br>色調：明赤褐色<br>焼成：良好 | ＳＫ１出土。 |
| 2 | 土師器<br>小　皿 | Ｂ：（1.1）<br>Ｃ：　3.9 | 底部の破片である。底部の器厚は1.05㎝と厚い。底部内面の中央はロクロ成形により、高まりが見られる。底面には回転糸切り痕が残る。 | 胎土：長石○、石英○、雲母△<br>色調：橙色<br>焼成：普通 | ＳＫ１出土。 |
| 3 | 陶　器<br>甕 | Ｂ：（5.9）<br>器厚：0.8 | 常滑産陶器甕の胴部破片である。表面には釉がかかっている。断面には輪積痕が観察される。 | 胎土：長石△、石英◎<br>色調：灰オリーブ色(表)、赤褐色(裏)<br>焼成：良好 | ＳＫ14出土。<br>常滑産。 |
| 4 | 縄文土器<br>深　鉢 | Ｂ：（5.7）<br>器厚：1.0 | 深鉢の胴部破片である。器面には条痕文が施文されている。内面は剥離が著しく施文などは不明。胎土には繊維を含む。 | 胎土：長石△、石英○、雲母○、繊維△<br>色調：にぶい褐色<br>焼成：不良 | ＳＫ23出土。<br>No.５と同一個体。 |
| 5 | 縄文土器<br>深　鉢 | Ｂ：（4.0）<br>器厚：0.8 | 深鉢の胴部破片である。器面には条痕文が施文されている。内面は剥離が著しく施文などは不明。胎土には繊維を含む。 | 胎土：長石△、石英○、雲母○、繊維△<br>色調：にぶい褐色<br>焼成：不良 | ＳＫ23出土。<br>No.４と同一個体。 |
| 第26図<br>8 | 陶　器<br>甕 | Ａ：〔42.4〕<br>Ｂ：（1.7）<br>頚部径：<br>〔37.0〕 | 常滑産陶器の大型甕の口縁部破片である。口縁部が頚部で大きく折れ曲がり、口唇端部がつまみ上げられている。口縁部外面には成形痕が残る。口縁部内面の平坦面には自然釉が付着している。 | 胎土：灰白色<br>色調：赤褐色(器面)、オリーブ灰色(自然釉)<br>焼成：良好 | ＳＫ31出土。<br>SI-7No.１と同一個体。<br>常滑甕４型式。 |

SK 24

| 番　号 | 器　種 | 最大長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重量(g) | 素　材 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第26図6 | 鎌 | 14.8 | 3.0 | 0.4 | 51.1 | 鉄 | 柄の部分湾曲。 |

SK 31

| 番　号 | 器　種 | 最大長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重量(g) | 特　　徴 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第26図7 | 管状土錘 | 5.1 | 2.2 | 2.0 | (17.1) | 管状の土錘で、孔が貫通する。 | |

## 土坑計測表

| 名称（P） | グリット | 形　状 | 長径(cm) | 短径(cm) | 深さ(cm) | 底面絶対高(m) | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SK 1 | N 8 | 楕円 | 125 | 95 | 24 | 26.86 | エリア境界。 |
| SK 2 | N 8 | 円 | 63 | 58 | 17 | 26.94 | 覆土暗褐色土。 |
| SK 3 | N 7 | 円 | 50 | 48 | 12 | 26.98 | 覆土暗褐色土。 |
| SK 4 | 欠番 | | | | | | |
| SK 5 | 欠番 | | | | | | |
| SK 6 | N 7 | 円 | 50 | 50 | 17 | 26.92 | 覆土2層（暗褐色土・褐色土）。 |
| SK 7 | 欠番 | | | | | | |
| SK 8 | N 7 | 円 | 33 | 32 | 7 | 26.97 | SI-1と重複。覆土暗褐色。 |
| SK 9 | N 7 | 不整 | 56 | 47 | 12 | 26.95 | SI-1と重複。覆土2層（褐色土・黒色土）。 |
| SK10 | M 6 | 円 | 40 | 37 | 28 | 26.75 | 覆土2層。 |
| SK11 | M 6 | 円 | 45 | 44 | 26 | 26.80 | 覆土褐色。旧石器時代調査区内。 |
| SK12 | M 6 | 不整 | 51 | 35 | 7 | 27.04 | 旧石器時代調査区内。 |
| SK13 | M 6 | 楕円 | 48 | 42 | 9 | 27.02 | 旧石器時代調査区内。 |
| SK14 | L 7 | 不整 | 449 | 152 | 32 | 26.76 | SB1.P5、SK22・23、GK28と重複。 |
| SK15 | 欠番 | | | | | | |
| SK16 | 欠番 | | | | | | |
| SK17 | H 4 | 円 | 75 | 65 | 17 | 26.89 | P169と重複。 |
| SK18 | H 4 | 楕円 | 71 | 62 | 18 | 26.85 | P238、SB2.P3と重複。 |
| SK19 | G 5 | 不整 | 115 | 97 | 74 | 26.36 | P37と重複。 |
| SK20 | 欠番 | | | | | | |
| SK21 | 欠番 | | | | | | |
| SK22 | L 7 | 円 | 37 | 33 | 78 | 26.24 | SK14と重複。 |
| SK23 | L 6 | 楕円 | 123 | 55 | 21 | 26.81 | SK14と重複。縄文時代早期の炉穴。 |
| SK24 | E 4 | 楕円 | 121 | 80 | 64 | 26.12 | 第1号方形竪穴遺構と重複。鎌出土。 |
| SK25 | F 4 | 不整 | 74 | 72 | 42 | 26.58 | GK19と重複。 |
| SK26 | F 3 | 楕円 | 73 | 34 | 12 | 26.87 | GK19・20と重複。 |
| SK27 | F 3 | 楕円 | 45 | 35 | 36 | 26.64 | P 103と重複。 |
| SK28 | 欠番 | | | | | | |
| SK29 | 欠番 | | | | | | |
| SK30 | G 4 | 不整 | 69 | 65 | 28 | 26.75 | SI-6、P126と重複。 |
| SK31 | G 4 | 隅丸方 | 86 | 73 | 34 | 26.64 | |
| SK32 | F 5 | 楕円 | 54 | 50 | 21 | 26.84 | SI-6、P126、GK19と重複。 |
| SK33 | G 5 | 円 | 58 | 55 | 31 | 26.78 | P 235と重複。 |
| SK34 | E 4 | 円 | 64 | 59 | 17 | 26.39 | GK19と重複。 |
| SK35 | E 4 | 長楕円 | 40 | 24 | 41 | 26.71 | 旧貝ピット。 |
| SK36 | E 3 | 不整 | (133) | (92) | 7 | 26.87 | 旧GK29。SD 1と重複し、古い。 |
| SK37 | F 5 | 楕円 | 100 | 83 | 80 | 26.12 | 旧GK33。形態的にSK19と類似。 |
| SK38 | F4・5 | 隅丸方 | 165 | 150 | 17 | 26.89 | 旧SI-5。P95・97・98・141と重複。 |

## 5．溝

### 第１号溝　（ＳＤ１）（第27図　ＰＬ13）

**位置**　調査区西側のＤ・Ｅ-２～４区で確認された。遺構の北端は調査区外に延び、南端はＧＫ１・16と重複している。この他、ＳＫ36やＳＤ２と重複している。これらの遺構との新旧関係は、ＳＫ36より新しくＳＤ２やＧＫ１・16よりは古い。

**規模と平面形**　長さは現状で（8.7）ｍで幅は95㎝を測る。

**主軸方向**　Ｎ－27°－Ｅ。

**壁面・底面**　底面は平坦で、外傾して立ち上がる。深さは23㎝を測る。

**覆土**　覆土は４層に分層できる。

**出土遺物**　土師器小皿破片や陶器小破片が出土している。

**所見**　出土遺物は少ないが、覆土の状況や、出土遺物から11世紀から13世紀前半代のものと考えられる。

### 第２号溝　（ＳＤ２）

（第27図）

**位置**　調査区西側のＣ・Ｄ-３区に確認された。本遺構はＳＤ１やＧＫ16と重複している。新旧関係は、本遺構がＧＫ16より古くＳＤ１より新しい。

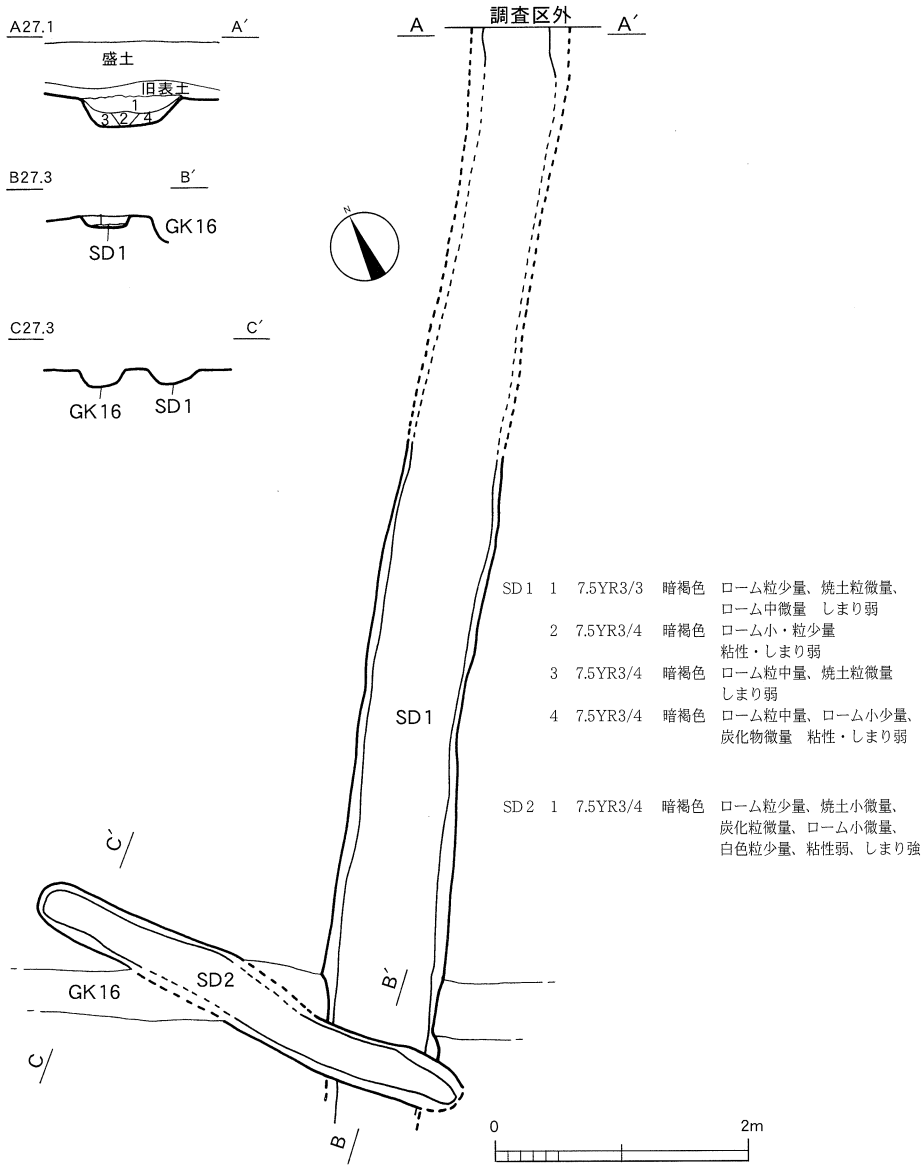
**規模と平面形**　長楕円形で、長さ370×幅50㎝である。

**主軸方向**　Ｎ－47°－Ｗ。

**壁面・底面**　底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。深さ15㎝。

**覆土**　ＳＤ１の土層とは区別できた。

**出土遺物**　本遺構の時期を示すものは出土していない。




第27図　第１・２号溝

## 6．ピット群

調査区内でピット群としたものは、中央部分と東部付近にまとまりの見られる複数ピット(柱穴)の総称として呼称している。発掘調査時点ではそれぞれに固有のピット番号を付している。

### 調査区東部ピット群 (第28･30図　ＰＬ２･23･24)

**位置**　調査区東部のＫ～N-５～８グリッドに集中して確認された。ＳＩ-１・２等と重複している。

**ピット数**　東部ピット群の確認されたピットの総数は45基である。

**形状及び規模**　円形又は楕円形で、長径20㎝以上30㎝未満のものが30基、長径10㎝以上20㎝未満のものが10基、長径30㎝以上40㎝未満のものが４基で、不明が１基である。

ピット底面の絶対高を計測し10㎝単位で区別すると、底面の絶対高は26.9ｍ代が11基と一番多く、次に26.6ｍ代が８基、26.7ｍ代と26.8ｍ代がそれぞれ６基となる。

ちなみに、ＳＩ-１東側や同西側の遺構確認面の標高は、前者が27.04ｍで後者が27.04ｍを測る。

**覆土**　多くのものは暗褐色土の覆土を持ち、焼土粒や炭化物粒が含まれる。Ｐ23の覆土には小砂利や青灰色粘土ブロックが混入し、他と明らかに異なる。Ｐ14のみから近世以降の陶磁器小片が出土している。

**遺物**　№1は、Ｐ１から出土した常滑産陶器甕２型式の口縁部である。№2は、Ｐ10覆土中から出土した土師器の内黒高台付坏の高台部である。Ｐ14の覆土中から近世以降の陶磁器破片が出土した。

**所見**　これらのピット群の中ではＳＢ１のみを掘立柱建物跡として認識した。この他に、掘立柱建物又は柵列として並ぶ可能性のあるものとして、Ｐ10－Ｐ９－Ｐ13があげられる。これらのピットの帰属する時期については、その多くが11世紀から13世紀前半代のものと考えられる。

### 調査区中央部ピット群 (第29･31図　ＰＬ２･23･24)

**位置**　調査区中央部のＥ～Ｉ-３～７グリッドに集中して確認された。ＳＩ-３・６、ＧＫ19などと重複している。特にＳＩ-６周辺を中心として密集している。

**ピット数**　中央部ピット群の確認されたピットの総数は181基である。

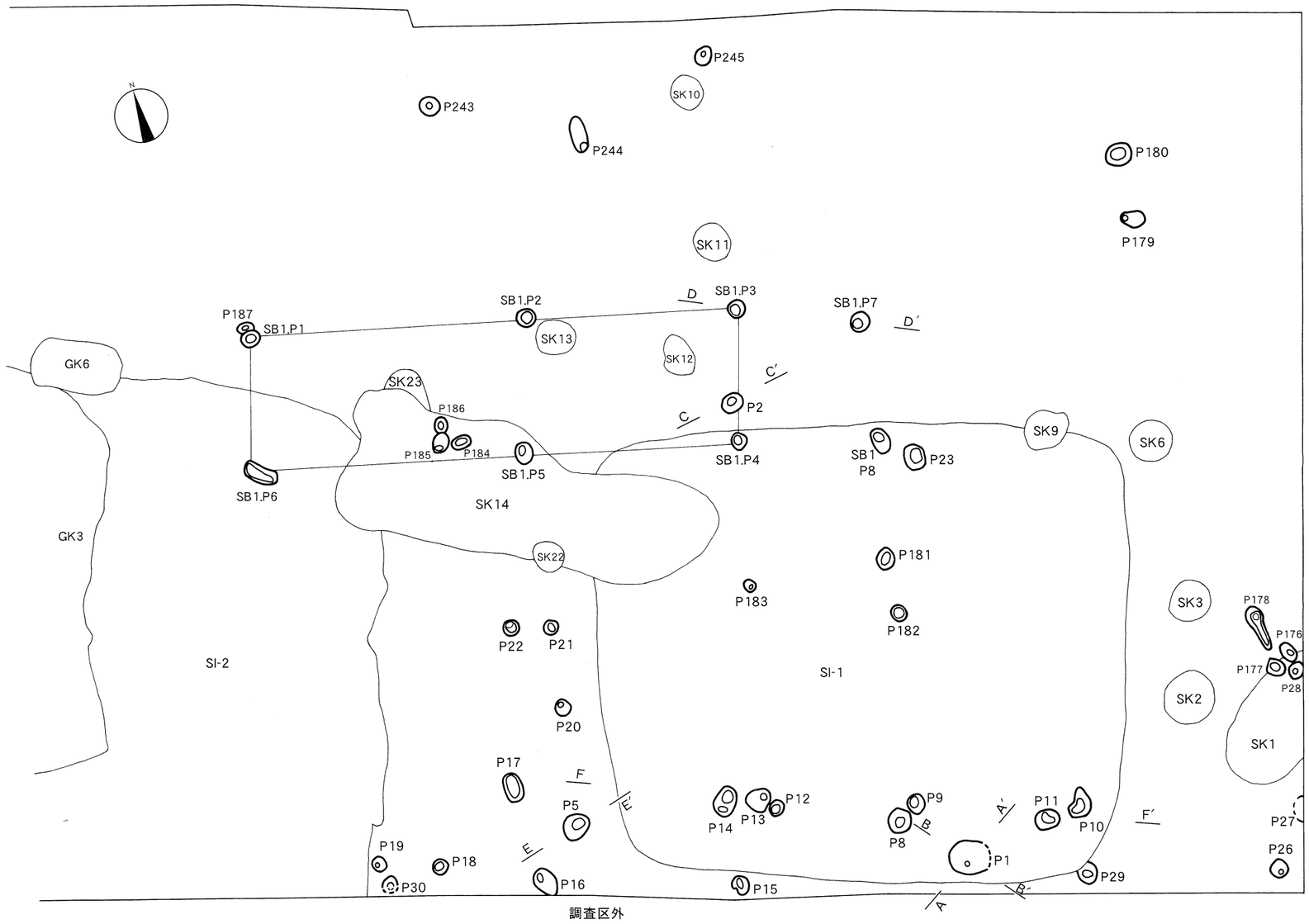
**形状及び規模**　円形または楕円形のものが大多数を占め、長径20㎝以上30㎝未満のものが99基、長径10㎝以上20㎝未満のものが42基、長径30㎝以上40㎝未満のものが31基、40㎝以上50㎝未満が６基、50㎝以上60未満が２基、60㎝以上70㎝未満が０基、70㎝以上80㎝未満が１基である。

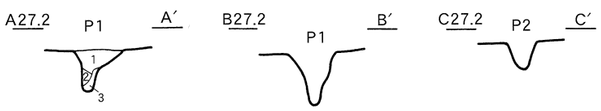
ピット底面の絶対高を計測し10㎝単位で区別すると、26.7ｍ代が45基と一番多く、次に26.8ｍ代が38基、26.6ｍ代が30基となり、その前後に減少していく。ちなみに、ＳＩ-６の東側やＧＫ19の北側の遺構確認面の標高は、前者が27.07ｍで後者が27.03ｍを測る。

**覆土**　暗褐色土や褐色土の覆土が見られ、覆土中には焼土粒や炭化物粒が含まれているものが多い。ピットが重複しているものの中には、古い方が褐色土でロームを多く含む傾向が見られ、新しいものが暗褐色土を呈するものが見られた。

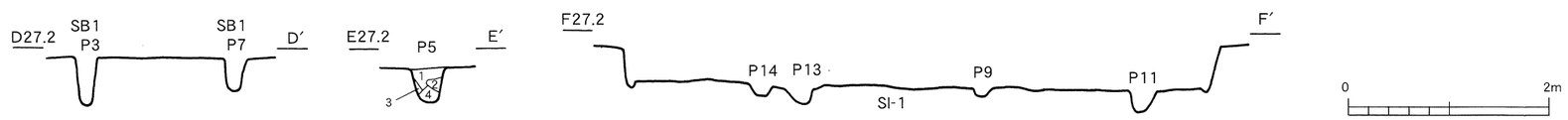
**遺物**　Ｐ26･41･74･113･146･157･175の覆土中から土師器小皿の破片が出土した。Ｐ107の覆土中から片岩塊（ＰＬ19）が出土。№7・8はSI-６覆土中出土のものであるが、ピット群扱いとした。

**所見**　これらのピット群の中ではＳＢ２のみを掘立柱建物跡として認識した。これらのピットの帰属する時期の多くは、11世紀から13世紀前半代のものと想定される。

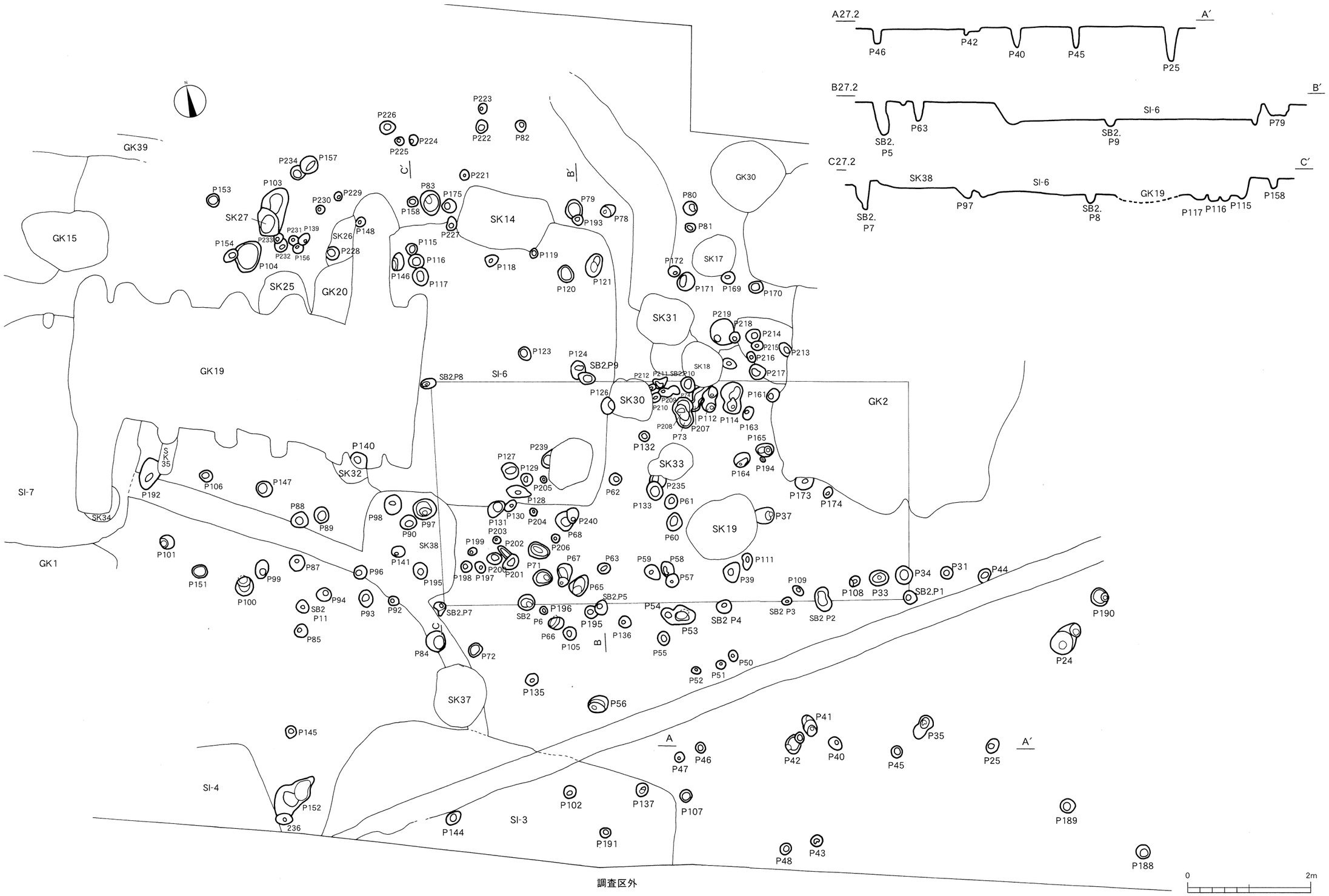


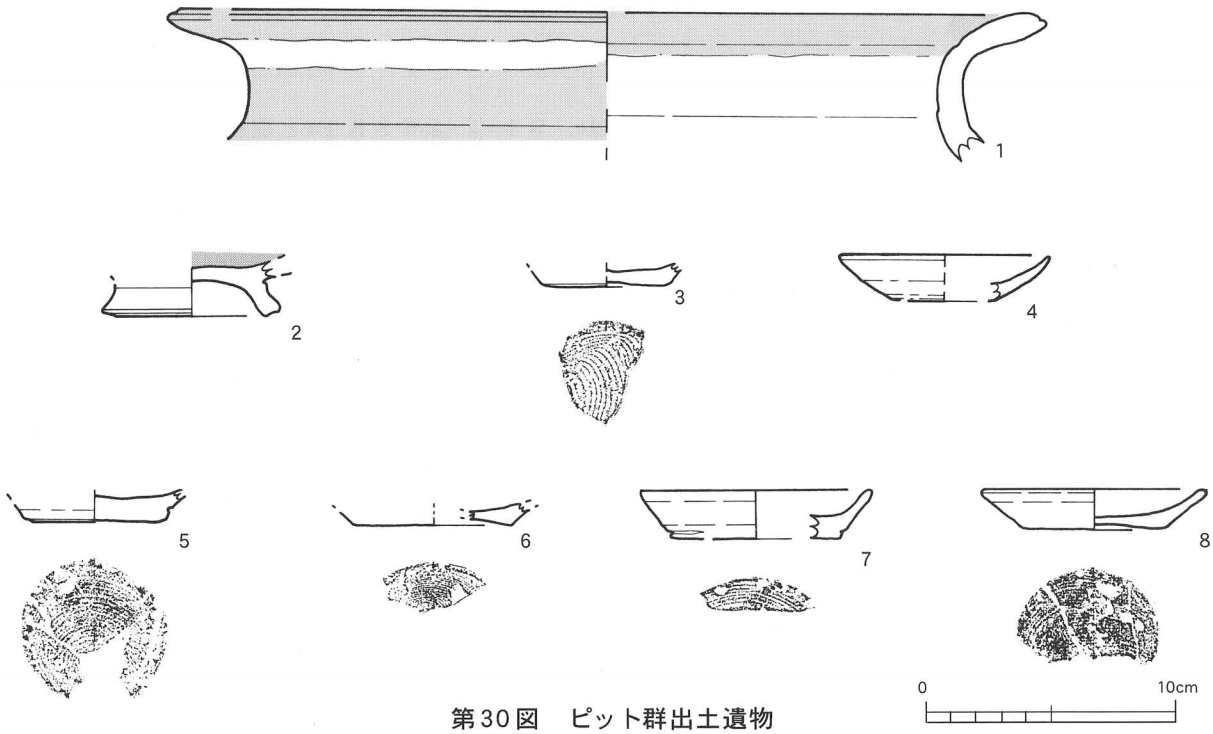

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| P1 | 1 | 7.5YR3/3 | 暗褐色 | 焼土小少量、炭化物微量、ローム小・粒少量　しまり弱 |
| | 2 | 7.5YR3/3 | 暗褐色 | 焼土粒微量　しまり弱 |
| | 3 | 7.5YR3/4 | 暗褐色 | 焼土粒微量、ローム粒少量　しまり強 |
| P5 | 1 | 7.5YR4/4 | 褐色 | 焼土粒微量、炭化物微量、ローム大・中微量、ローム小少量、ローム粒中量 |
| | 2 | 7.5YR4/6 | 褐色 | ローム中微量、ローム小少量、ローム粒中量　しまり弱 |
| | 3 | 7.5YR4/6 | 褐色 | ローム小少量、ローム粒多量、ローム粒多量　しまり弱 |
| | 4 | 7.5YR4/6 | 褐色 | ローム中微量、ローム小少量、ローム粒中量　しまり弱 |




第28図　調査区内東部ピット群




第29図　調査区内中央部ピット群




第30図　ピット群出土遺物

## ピット群

| 番　号 | 器　種 | 法量(cm) | 特　　徴 | 胎土・色調・焼成 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|
| 第30図<br>1 | 陶　器<br>甕 | A：〔34.0〕<br>B：（5.9）<br>頚部径：<br>〔28.3〕 | 常滑産陶器甕の口縁部破片である。頚部は大きく内湾し開く。口唇部はやや肥厚し、端部には沈線が巡る。口縁部は2段成形され、内面に成形痕が残る。口縁部内外面と頚部外面の一部に自然釉が残る。 | 胎土：黒色粒子△<br>色調：にぶい赤褐色(器面)、オリーブ黄色(自然釉)<br>焼成：良好 | Ｐ１(旧ＳＫ５)出土。<br>常滑産。<br>常滑甕2型式 |
| 2 | 土師器<br>高台付坏 | B：(2.1)<br>高台径：7.1 | 内面黒色処理された、高台付坏の高台部分。しっかりした高台が「ハ」の字状に開く。坏部内面はヘラミガキがなされる。高台底面が凹む。 | 胎土：長石△、石英○<br>色調：黒色(坏部内面)、にぶい橙色(高台部)<br>焼成：普通 | Ｐ10出土。 |
| 3 | 土師器<br>小　皿 | B：(0.9)<br>C：〔5.2〕<br>底部厚：0.5 | 小皿底部の破片で、底面には回転糸切り痕が残る。ロクロ成形。内面の中央部が高まる。底部からの立ち上がりが外折する。 | 胎土：長石△、石英◎、雲母△、赤色粒△<br>色調：にぶい橙色<br>焼成：普通 | Ｐ113出土。 |
| 4 | 土師器<br>小　皿 | A：〔8.3〕<br>B：1.8<br>C：〔4.0〕<br>底部厚：0.7 | 小皿底部の大部分が欠損。底部からの立ち上がり直線的で、口唇やや内湾。口唇部は舌状。ロクロ成形。底面には回転糸切り痕が残る。 | 胎土：長石◎、石英△、雲母△、赤色粒△<br>色調：黒褐色<br>焼成：普通 | Ｐ146出土。 |
| 5 | 土師器<br>小　皿 | B：(1.0)<br>C：5.7<br>底部厚：1.0 | 小皿の底部である。底部の器厚は厚い。底部からの立ち上がりが外折する。底部内面にはロクロ成形痕あり。底面には回転糸切り痕が残る。 | 胎土：長石△、石英△、雲母△<br>色調：橙色<br>焼成：普通 | Ｐ157出土。 |
| 6 | 土師器<br>小　皿 | B：(0.8)<br>C：〔6.4〕<br>底部厚：0.3 | 小皿底部で、器厚は中央部で薄い。底部からの立ち上がりが外折する。底面には回転糸切り痕が残り、上げ底風になる。ロクロ成形。 | 胎土：長石△、石英○、雲母△、赤色粒○<br>色調：黒褐色<br>焼成：普通 | Ｐ175出土。 |
| 7 | 土師器<br>小　皿 | A：〔9.2〕<br>B：1.9<br>C：〔6.8〕<br>底部厚：0.9 | 小皿破片。底部の器厚は厚い。底部からの立ち上がり直線的で立ち気味。底面には回転糸切り痕が残る。口径に対し底径が大きい。全体的に軟質。ロクロ成形。 | 胎土：長石△、石英△、<br>色調：黄灰色<br>焼成：普通 | ＳＩ-６内覆土出土。 |
| 8 | 土師器<br>小　皿 | A：〔9.0〕<br>B：1.6<br>C：〔5.7〕<br>底部厚：0.3 | 小皿の破片。底部からの立ち上がり直線的。口唇部はやや肥厚する。底部の器厚は中央部分が薄い。底面には回転糸切り痕が残る。全体的に軟質である。ロクロ成形。 | 胎土：長石△、石英○、雲母△<br>色調：橙色<br>焼成：普通 | ＳＩ-６内覆土出土。 |

## 7．掘立柱建物跡

### 第1号掘立柱建物跡（ＳＢ１）　（第31図　ＰＬ2）

**位置**　調査区内の東方部分Ｌ・M-６・７区から確認され、ＳＩ-１・２やＳＫ14と重複している。重複関係はＳＩ-１・２よりは新しく、ＳＫ14との関係は明瞭ではない。

**規模と平面形**　本掘立柱建物跡の柱穴の名称は、ＳＢ１のＰ１～Ｐ６と呼称した。また本遺構に関連する可能性のある東側２ヶ所のピットをＰ７・Ｐ８とした。

全体の構成は、桁行２間・梁行１間の東西棟の建物跡が想定できる。桁行Ｐ１－Ｐ３間の寸法は、5.7(Ｐ１－Ｐ２が3.3、Ｐ２－Ｐ３が2.4)mである。梁行Ｐ１－Ｐ６間の寸法は1.6mである。

柱穴の平面形は円形又は楕円形で、各々の長径・深さ（㎝）はＰ１（24･34)、Ｐ２（22･42)、Ｐ３（23･32)、Ｐ４（18･8)、Ｐ５（28･38)、Ｐ６（40･20)、Ｐ７（27･26)、Ｐ８（32･13）である。柱穴底面の絶対高はＰ１が26.66m、Ｐ２が26.67ｍ、Ｐ３が26.62m、Ｐ４が26.60m、Ｐ５が26.61m、Ｐ６が26.48m、Ｐ７が26.78m、Ｐ８が26.54mである。

**主軸方向**　Ｎ－72°－Ｗ。

**柱穴底面**　Ｐ４・６・８の底面であたり痕が確認されている。

**覆土**　ＳＢ１.Ｐ１では、覆土が4層に分層され、暗褐色土と褐色土で構成されている。最上層と最下層には焼土粒が含まれていた。Ｐ４やＰ８は、ＳＩ-１の覆土下層で重複状況が確認された。

**出土遺物**　出土していない

**所見**　本遺構は当初Ｐ１・Ｐ２・Ｐ５・Ｐ６の東西１間×南北１間の建物跡と考えていたが、ＳＩ-１の調査の進展などに伴い他の柱穴が確認された。Ｐ７やＰ８については、本遺構の一部をなす柱穴かは明確にし得ないが、一連の可能性のあるのものとして扱った。時期的には他のピットの状況や、覆土の状況から11世紀から13世紀前半代のものと考えられる。

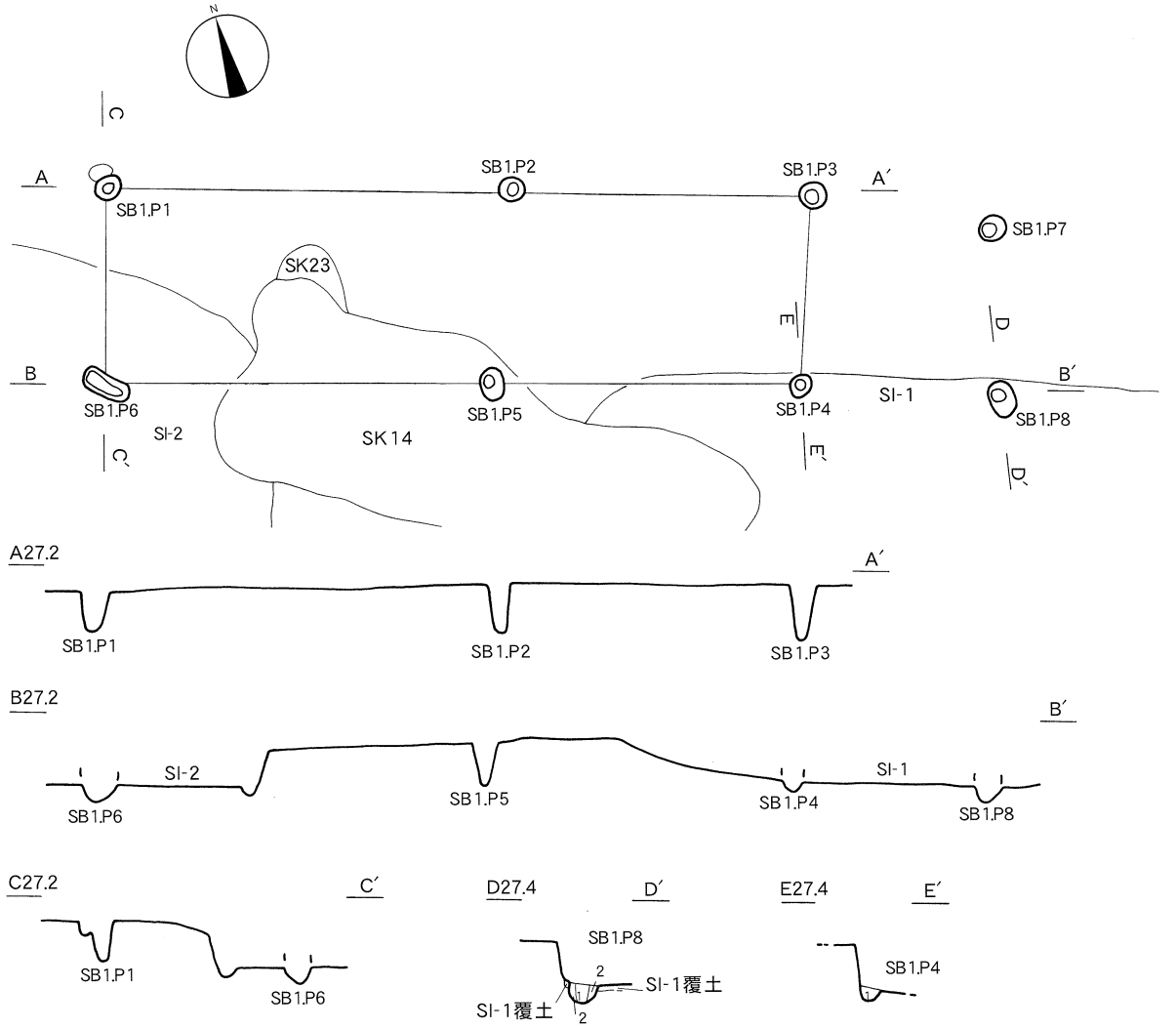
### 第2号掘立柱建物跡（ＳＢ２）　（第32図　ＰＬ2）

**位置**　調査区内の中央部分Ｆ～H-４区から確認され、ＳＩ-６やＧＫ２などと重複している。重複関係はＳＩ-６よりは新しく、ＧＫ２よりは古い。

**規模と平面形**　本掘立柱建物跡の柱穴の名称は、ＳＢ２のＰ１～Ｐ10と呼称した。この中で、Ｐ３とＰ６については柱穴の深さが浅く、補助的な柱穴又は偶然Ｐ１－Ｐ７ライン上に並んだものかも知れないが、本遺構で扱った。また、本来Ｐ１と対応する位置にはＧＫ２が掘り込まれており、柱穴は壊されてしまったものと考えた。Ｐ11は、Ｐ１～Ｐ７ラインの延長線上にあり、本建物跡の可能性があるため加えた。

全体の構成は、全体の構成は、桁行４間（Ｐ３・Ｐ４は考えないとして）・梁行１間の東西棟の建物跡が想定できる。桁行Ｐ１―Ｐ７間の寸法（m）は、7.6(Ｐ１－Ｐ２が1.4、Ｐ２－Ｐ４が1.6、Ｐ４－Ｐ５が2.0、Ｐ５－Ｐ７が2.6である。梁行Ｐ７－Ｐ８間の寸法は3.6ｍである。

柱穴の平面形は円形又は楕円形で、各々の長径・深さ（㎝）はＰ１（24・54)、Ｐ２（39･31)、Ｐ３(15･9)、Ｐ４（26･53)、Ｐ５（24･54)、Ｐ６（26･21)、Ｐ７（33･49)、Ｐ８（25･16)、Ｐ9(28･14)、Ｐ10(28･23)、Ｐ11（22・24）ある。柱穴底面の絶対高はＰ１が26.59m、Ｐ２が26.80m、Ｐ３が27.03m、Ｐ４が26.58m、Ｐ５が26.58m、Ｐ６が26.91m、Ｐ７が26.53m、Ｐ８が26.64m、Ｐ９が26.68m、Ｐ




SB1.P4 1 7.5YR3/3 暗褐色 ローム粒少量、焼土粒微量、炭化粒微量、ローム小微量 しまり弱

SB1.P8 1 7.5YR3/3 暗褐色 ローム小少量、粘性弱、しまりなし 柱痕？
2 7.5YR3/4 暗褐色 ローム粒少量 粘性・しまり弱

**第31図 第1号掘立柱建物跡**

10が26.80m、P 11が26.82mである。

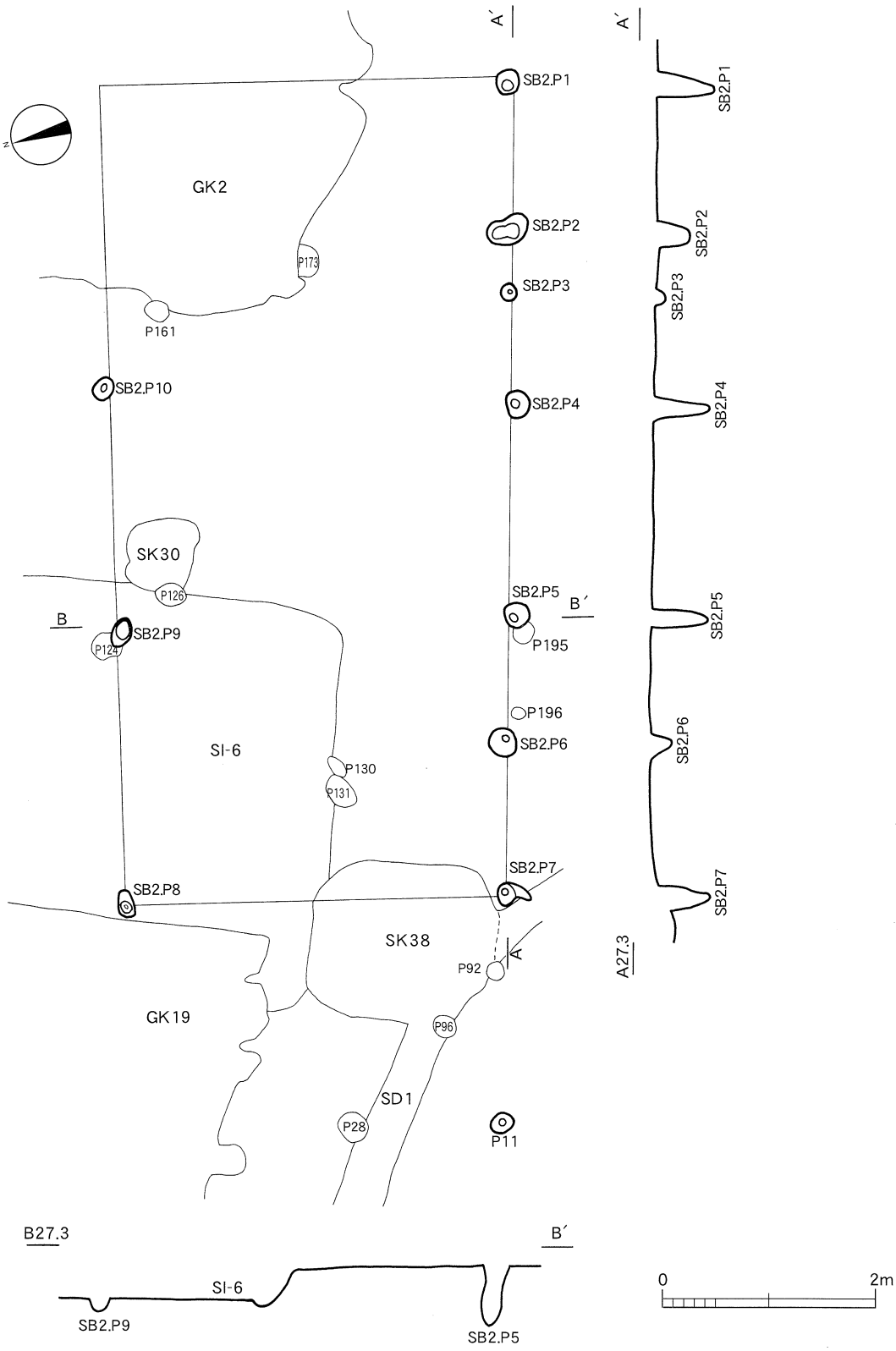
**主軸方向** N－75°－W。

**柱穴底面** 多くの柱穴にはあたり痕が確認できた。

**覆土** 暗褐色土からなり、焼土粒や炭化物粒が含まれる。

**出土遺物** 本遺構に伴ってP 1から土師器の小型の壺甕類小破片が出土している。

**所見** 本遺構は、現地調査時点で柱穴の深さや並びからP 1・2・4・5・7が一連のものと考えていた。しかしながら、建物柱穴の配置までを想定する余裕がなかったため、現地調査終了後に図面上で想定したものである。P 8やP 9についてはSI-6の床面で確認したものであり、本来P 6に対応する浅めのものが存在した可能性も考えられるが、今となっては検証のしようがない。時期的には他のピットの出土遺物の状況や覆土の状況から、11世紀から13世紀前半代のものと考えられる。




第32図　第2号掘立柱建物跡

## ピット計測表

| 名称（P） | グリット | 形　状 | 長径(cm) | 短径(cm) | 深さ(cm) | 底面絶対高(m) | 遺構名 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | M８ | 楕円 | 48 | 41 | 54 | 26.43 | | 旧SK１。常滑焼甕出土。覆土上面で確認。 |
| 2 | M７ | 円 | 26 | 24 | 27 | 26.79 | | |
| 3 | M７ | 円 | 24 | 22 | 32 | 26.78 | SB1.P7 | |
| 4 | M６ | 円 | 23 | 22 | 48 | 26.62 | SB1.P3 | 覆土が暗褐色で、焼土粒・炭化粒微量。 |
| 5 | L８ | 楕円 | 36 | 25 | 31 | 26.71 | | |
| 6 | M７ | 楕円 | 32 | 20 | 13 | 26.54 | SB1.P8 | SI-１と重複。あたり痕有。 |
| 7 | M７ | 円 | 18 | 14 | 8 | 26.60 | SB1.P4 | SI-１と重複。あたり痕あり。 |
| 8 | M８ | 円 | 29 | 27 | 33 | 26.37 | | SI-１と重複。覆土暗褐色。あたり痕有。 |
| 9 | M８ | 円 | 24 | 20 | 17 | 26.53 | | SI-１と重複。 |
| 10 | N８ | 不整 | 36 | 27 | 33 | 26.35 | | SI-１と重複。あたり痕有。 |
| 11 | M８ | 楕円 | 30 | 22 | 19 | 27.31 | | SI-１と重複。あたり痕有。 |
| 12 | M８ | 円 | 18 | 18 | 10 | 26.60 | | SI-１と重複。あたり痕有。 |
| 13 | M８ | 円 | 31 | 28 | 21 | 26.50 | | SI-１と重複。あたり痕有。 |
| 14 | M８ | 楕円 | 34 | 25 | 15 | 25.58 | | SI-１と重複。覆土に小砂利混じり、土師器内黒坏破片、近世以降の陶磁器小片出土。 |
| 15 | M８ | 円 | 24 | 20 | 21 | 26.75 | | 縄文土器（条痕文土器破片）出土。 |
| 16 | L８ | 楕円 | 31 | 24 | 43 | 26.61 | | エリア境界。 |
| 17 | L８ | 楕円 | 34 | 20 | 19 | 26.85 | | |
| 18 | L８ | 円 | 18 | 17 | 14 | 26.94 | | |
| 19 | 欠番 | | | | | | | |
| 20 | L７ | 円 | 18 | 16 | 15 | 26.91 | | |
| 21 | L７ | 円 | 18 | 16 | 16 | 26.87 | | |
| 22 | L７ | 円 | 19 | 18 | 39 | 26.62 | | |
| 23 | M７ | 楕円 | 31 | 24 | 37 | 26.29 | | SI-１と重複。覆土に小砂利混じり。現代か。 |
| 24 | I６ | 楕円 | 57 | 37 | 63 | 26.50 | | ピットの重複。東側が新しく、暗褐色土。西側は褐色土でロームブロック混じり。 |
| 25 | H６ | 円 | 22 | 22 | 53 | 26.56 | | 底面丸く、あたり痕有。 |
| 26 | N９ | 円 | 20 | 19 | 27 | 26.80 | | 土師小片出土。底面平坦で、あたり痕有。 |
| 27 | N８ | 円 | (26) | (13) | — | — | | エリア東端。 |
| 28 | N８ | 楕円 | 21 | 17 | 24 | 26.96 | | |
| 29 | M８ | 円 | 25 | 23 | 21 | 26.85 | | SI-１と重複。エリア境界。 |
| 30 | 欠番 | | | | | | | |
| 31 | H５ | 円 | 21 | 21 | 11 | 27.02 | | 底面丸い。 |
| 32 | H５ | 円 | 24 | 21 | 54 | 26.59 | SB2.P1 | |
| 33 | H５ | 楕円 | 32 | 24 | 46 | 26.65 | | 底面は平坦。 |
| 34 | H５ | 円 | 30 | 30 | 14 | 27.00 | | |
| 35 | H６ | ひさご | 40 | 24 | 41 | 26.71 | | ピットの重複。覆土は(新)が暗褐色、(旧)が褐色。底面は平坦で、あたり痕有。 |
| 36 | 欠番 | | | | | | | |
| 37 | H５ | 楕円 | 32 | 26 | 56 | 26.53 | | SK19と重複。底面平坦で、小穴有。 |
| 38 | H５ | 楕円 | 39 | 25 | 31 | 26.80 | SB2.P2 | 底面平坦で、あたり痕有。 |
| 39 | H５ | 円 | 30 | 29 | 39 | 26.72 | | 底面平坦で、あたり痕有。 |
| 40 | H６ | 楕円 | 23 | 16 | 44 | 26.65 | | 旧SK16。底面丸く、あたり痕有。 |
| 41 | H６ | 不整 | 35 | 21 | 19 | 26.90 | | 土師器小皿底部破片出土。あたり痕有。 |
| 42 | H６ | 円 | 33 | 26 | 12 | 26.96 | | P237と重複。底面平坦で、あたり痕有。 |
| 43 | H６ | 円 | 20 | 20 | 19 | 26.83 | | 底面丸い。 |
| 44 | H５ | 円 | 23 | 19 | 47 | 26.67 | | 底面丸く、あたり痕有。 |
| 45 | H６ | 円 | 19 | 18 | 36 | 26.75 | | 底面平坦で、あたり痕有。 |
| 46 | G６ | 円 | 16 | 16 | 26 | 26.81 | | |
| 47 | G６ | 円 | 16 | 16 | 20 | 26.87 | | 底面丸く、あたり痕有。 |
| 48 | G６ | 円 | 19 | 17 | 22 | 26.79 | | 底面平坦、あたり痕有。 |
| 49 | G５ | 円 | 26 | 22 | 53 | 26.58 | SB2.P4 | 底面丸い。 |
| 50 | G５ | 円 | 18 | 16 | 6 | 27.06 | | 底面丸い。 |
| 51 | G５ | 円 | 16 | 15 | 16 | 26.96 | | 底面平坦、あたり痕有。 |
| 52 | G５ | 円 | 15 | 13 | 11 | 27.00 | | 底面丸い。 |
| 53 | G５ | 不整 | 36 | 30 | 48 | 26.64 | | P54と重複。底面平坦、あたり痕有。 |
| 54 | G５ | 楕円 | 31 | 20 | 36 | 26.75 | | P53と重複。あたり痕有。 |
| 55 | G５ | 円 | 22 | 20 | 29 | 26.83 | | 土師器小片出土。底面平坦、あたり痕有。 |
| 56 | G５ | 楕円 | 35 | 29 | 32 | 26.74 | | 底面丸い。 |
| 57 | G５ | 円 | 23 | 21 | 49 | 26.63 | | P58と重複。底面丸い。 |
| 58 | G５ | 円 | 25 | 21 | 43 | 26.64 | | P57と重複。 |
| 59 | G５ | 楕円 | 29 | 22 | 30 | 26.83 | | あたり痕有。底面丸い。 |
| 60 | G５ | 楕円 | 29 | 23 | 43 | 26.68 | | 底面平坦、あたり痕有。 |
| 61 | G５ | 円 | 23 | 22 | 8 | 27.02 | | 底面丸く、浅い。 |
| 62 | G５ | 円 | 20 | 20 | 21 | 26.88 | | 底面丸く、あたり痕有。 |
| 63 | G５ | 円 | 23 | 19 | 35 | 26.76 | | 底面丸く、あたり痕有。 |
| 64 | G５ | 円 | 24 | 23 | 54 | 26.58 | SB2.P5 | P195と重複。底面平坦、あたり痕有。 |
| 65 | G５ | 不整 | 35 | 26 | 16 | 26.97 | | 底面丸く、重複。 |

| 名称（P） | グリット | 形　状 | 長径(cm) | 短径(cm) | 深さ(cm) | 底面絶対高(m) | 遺構名 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 66 | G５ | 円 | 26 | 21 | 43 | 26.69 | | 底面平坦。 |
| 67 | G５ | ひさご | 37 | 25 | 39 | 26.73 | | 重複。底面丸く、あたり痕有。 |
| 68 | G５ | 円 | 20 | 32 | 53 | 26.57 | | P240と重複。底面丸い。 |
| 69 | 欠番 | | | | | | | |
| 70 | G５ | 円 | 26 | 25 | 21 | 26.91 | SB2.P6 | 底面平坦、あたり痕有。 |
| 71 | G５ | 楕円 | 31 | 26 | 20 | 26.92 | | あたり痕有。 |
| 72 | F５ | 円 | 23 | 20 | 9 | 26.98 | | 浅い。 |
| 73 | H４ | 円 | 25 | 25 | 32 | 26.74 | | P74と重複。 |
| 74 | H４ | 円 | 33 | 30 | 38 | 26.68 | | 土師器小片出土、P73と重複。 |
| 75 | 欠番 | | | | | | | |
| 76 | 欠番 | | | | | | | |
| 77 | 欠番 | | | | | | | |
| 78 | G４ | 楕円 | 25 | 20 | 22 | 26.84 | | 底面丸く、あたり痕有。 |
| 79 | G４ | 円 | 27 | 25 | 19 | 26.85 | | P193と重複。底面平坦、あたり痕有。 |
| 80 | H４ | 円 | 22 | 22 | 31 | 26.76 | | 底面尖る。 |
| 81 | H４ | 円 | 19 | 16 | 22 | 26.84 | | 底面平坦、あたり痕有。 |
| 82 | G３ | 円 | 18 | 17 | 29 | 26.74 | | |
| 83 | G３ | 楕円 | 40 | 32 | 38 | 26.70 | | |
| 84 | F５ | 円 | 33 | 32 | 45 | 26.51 | | GK16と重複。小砂利混じり覆土。現代か。 |
| 85 | F５ | 円 | 21 | 21 | 27 | 26.77 | | あたり痕あり。 |
| 86 | F５ | 円 | 22 | 20 | 24 | 26.82 | SB2.P11 | 底面丸く、あたり痕有。 |
| 87 | F５ | 円 | 25 | 23 | 19 | 26.87 | | あたり痕有。 |
| 88 | F４ | 円 | 26 | 25 | 40 | 26.66 | | GK16と重複。底面平坦、あたり痕有。 |
| 89 | F４ | 円 | 25 | 23 | 23 | 26.84 | | 底面平坦、あたり痕有。 |
| 90 | F５ | 隅丸方 | 23 | 23 | 14 | 26.76 | | SK38と重複。覆土暗褐色。焼土・炭化物含む。 |
| 91 | F５ | 不整 | 33 | 21 | 49 | 26.53 | SB2.P7 | GK16と重複。底面先細り。 |
| 92 | F５ | 円 | 17 | 16 | 15 | 26.86 | | GK16と重複。底面平坦。 |
| 93 | F５ | 楕円 | 28 | 22 | 22 | 26.82 | | 底面平坦、あたり痕有。 |
| 94 | F５ | 円 | 24 | 22 | 20 | 26.86 | | 底面丸い。 |
| 95 | F５ | 楕円 | 26 | 22 | 18 | 26.73 | | SK38と重複。底面丸く、あたり痕有。 |
| 96 | F５ | 円 | 19 | 18 | 43 | 26.60 | | GK16と重複。小砂利混じり覆土。現代か。 |
| 97 | F５ | 円 | 38 | 35 | 32 | 26.56 | | SK38と重複。あたり痕有。 |
| 98 | F５ | 円 | 34 | 28 | 36 | 26.55 | | SK38と重複。甕破片出土。あたり痕有。 |
| 99 | F５ | 楕円 | 30 | 20 | 32 | 26.72 | | 底面丸い。 |
| 100 | F５ | 円 | 30 | 28 | 42 | 26.59 | | 底面平坦、あたり痕有。 |
| 101 | E４ | 円 | 24 | 22 | 30 | 26.73 | | 底面平坦、あたり痕有。 |
| 102 | G６ | 円 | 22 | 21 | 20 | 26.68 | | SI-３と重複。底面丸く、あたり痕有。 |
| 103 | F３ | 楕円 | 38 | 30 | 18 | 26.82 | | SK27と重複し、P103が古い。 |
| 104 | F３ | 楕円 | 51 | 42 | 19 | 26.81 | | P154と重複。 |
| 105 | G５ | 円 | 22 | 21 | 36 | 26.75 | | 底面丸く、あたり痕有。 |
| 106 | F４ | 円 | 18 | 16 | 20 | 26.81 | | 底面平坦、あたり痕有。 |
| 107 | G６ | 円 | 19 | 18 | 46 | 26.59 | | 片岩塊出土。底面平坦、あたり痕有。PL9。 |
| 108 | H５ | 円 | 18 | 18 | 16 | 26.95 | | 底面丸く浅い。 |
| 109 | H５ | 楕円 | 22 | 14 | 26 | 26.86 | | あたり痕有。 |
| 110 | H５ | 円 | 15 | 13 | 9 | 27.03 | SB2.P３ | 底面丸い。 |
| 111 | H５ | 不整 | 29 | 16 | 19 | 26.92 | | あたり痕有 |
| 112 | H４ | 円 | 21 | 21 | 48 | 26.57 | | P162と重複。 |
| 113 | H４ | 円 | 37 | 32 | 28 | 26.75 | | P114と重複。土師器片出土。 |
| 114 | H４ | 円 | 29 | 25 | 42 | 26.62 | | P113と重複。 |
| 115 | G４ | 円 | 17 | 17 | 10 | 26.68 | | SI-６と重複。底面平坦、あたり痕有。 |
| 116 | G４ | 円 | 23 | 22 | 11 | 26.68 | | SI-６と重複。あたり痕有。 |
| 117 | G４ | 楕円 | 29 | 24 | 10 | 26.70 | | SI-６と重複。底面平坦、あたり痕有。 |
| 118 | G４ | 楕円 | 22 | 14 | 6 | 26.76 | | SI-６と重複。底面丸い。 |
| 119 | G４ | 方 | 14 | 13 | 10 | 26.72 | | SI-６と重複。GK14と重複。先端先細り。 |
| 120 | G４ | 楕円 | 27 | 23 | 14 | 26.68 | | SI-６と重複。底面平坦、あたり痕有。 |
| 121 | G４ | 楕円 | 38 | 25 | 39 | 26.41 | | SI-６と重複。底面丸く、あたり痕有。 |
| 122 | F４ | 楕円 | 25 | 13 | 16 | 26.64 | SB2.P8 | SI-６と重複。あたり痕有。土師器の壺甕類小破片出土。 |
| 123 | G４ | 楕円 | 22 | 17 | 12 | 26.70 | | SI-６内。底面平坦、あたり痕有。 |
| 124 | G４ | 円 | 29 | 25 | 16 | 26.70 | | P125と重複。底面平坦、あたり痕有。 |
| 125 | G４ | 楕円 | 28 | 19 | 14 | 26.68 | SB2.P9 | P124と重複。あたり痕有。 |
| 126 | G４ | 円 | 25 | 21 | 34 | 26.71 | | SI-６と重複。SK30と重複。あたり痕有。 |
| 127 | G４ | 円 | 25 | 24 | 37 | 26.45 | | SI-６と重複。底面平坦、あたり痕有。 |
| 128 | G５ | 楕円 | 40 | 19 | 9 | 26.70 | | SI-６と重複。あたり痕有。 |
| 129 | G５ | 円 | 21 | 19 | 12 | 26.67 | | SI-６と重複。あたり痕有。 |
| 130 | G５ | 楕円 | 21 | 12 | 35 | 26.74 | | SI-６と重複。底面丸く、あたり痕有。 |
| 131 | G５ | 楕円 | 30 | 25 | 35 | 26.74 | | SI-６と重複。底面丸く、あたり痕有。 |
| 132 | G４ | 円 | 17 | 16 | 16 | 26.90 | | 底面平坦で、あたり痕有。 |

| 名称（P） | グリット | 形　状 | 長径(cm) | 短径(cm) | 深さ(cm) | 底面絶対高(m) | 遺構名 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 133 | G５ | 円 | 31 | 26 | 34 | 26.77 | | P235と重複。底面丸い。 |
| 134 | 欠番 | | | | | | | |
| 135 | G５ | 円 | 21 | 20 | 31 | 26.76 | | あたり痕有。 |
| 136 | G５ | 円 | 20 | 19 | 27 | 26.84 | | 底面丸く、あたり痕有。 |
| 137 | G６ | 円 | 22 | 20 | 13 | 26.78 | | SI-３内。底面丸く、あたり痕有。 |
| 138 | 欠番 | | | | | | | |
| 139 | F３ | 楕円 | 22 | 15 | 38 | 26.62 | | P156、P231と重複。あたり痕有。 |
| 140 | F４ | 不整 | 27 | 24 | 22 | 26.65 | | SK32と重複。底面丸く、あたり痕有。 |
| 141 | F５ | 円 | 20 | 18 | 30 | 26.60 | | SK38と重複。底面平坦で、あたり痕あり。 |
| 142 | 欠番 | | | | | | | |
| 143 | 欠番 | | | | | | | |
| 144 | F５ | 楕円 | 27 | 18 | 21 | 26.65 | | SI-３と重複。底面平坦、あたり痕有。 |
| 145 | F５ | 円 | 20 | 17 | 41 | 26.53 | | 底面平坦。現代か。 |
| 146 | G５ | 楕円 | 31 | 21 | 32 | 26.46 | | SI-６と重複。覆土は黒褐色。土師器小片出土。<br>底面丸く、あたり痕有。 |
| 147 | F４ | 円 | 26 | 25 | 27 | 26.77 | | |
| 148 | F３ | 円 | 18 | 15 | 16 | 26.62 | | GK19と重複。先端先細り。 |
| 149 | 欠番 | | | | | | | |
| 150 | 欠番 | | | | | | | |
| 151 | E５ | 楕円 | 24 | 20 | 5 | 26.98 | | |
| 152 | F６ | 不整 | 75 | 43 | 27 | 26.77 | | P236と重複。先端先細り。 |
| 153 | F３ | 円 | 22 | 20 | 33 | 26.64 | | |
| 154 | F３ | 楕円 | 28 | 18 | 40 | 26.59 | | P104と重複。 |
| 155 | 欠番 | | | | | | | |
| 156 | F３ | 円 | 19 | 18 | 17 | 26.82 | | P139、P231と重複。 |
| 157 | F３ | 円 | 28 | 26 | 40 | 26.60 | | P234と重複。土師器小皿破片出土。 |
| 158 | G３ | 円 | 15 | 14 | 17 | 26.89 | | 底面平坦、あたり痕有。 |
| 159 | 欠番 | | | | | | | |
| 160 | G５ | 楕円 | 34 | 24 | 24 | 26.87 | | 底面丸く、あたり痕有。 |
| 161 | H４ | 隅丸方 | 21 | 18 | 26 | 26.75 | | GK２、SK19と重複。あたり痕有。 |
| 162 | H４ | 隅丸方 | 23 | 22 | 41 | 26.62 | | P112と重複。 |
| 163 | H４ | 楕円 | 22 | 16 | 25 | 26.80 | | |
| 164 | H５ | 円 | 28 | 24 | 25 | 26.82 | | あたり痕有。 |
| 165 | H５ | 楕円 | 30 | 23 | 29 | 26.74 | | |
| 166 | 欠番 | | | | | | | |
| 167 | 欠番 | | | | | | | |
| 168 | 欠番 | | | | | | | |
| 169 | H４ | 円 | 21 | 21 | 50 | 26.51 | | SK17と重複。 |
| 170 | H４ | 円 | 23 | 21 | 28 | 26.68 | | |
| 171 | H４ | 楕円 | 29 | 25 | 35 | 26.70 | | |
| 172 | H４ | 円 | 20 | 18 | 16 | 26.89 | | |
| 173 | H５ | 楕円 | 30 | 20 | 10 | 26.99 | | GK２と重複。 |
| 174 | H５ | 円 | 18 | 14 | 15 | 26.95 | | |
| 175 | G３ | 楕円 | 23 | 19 | 21 | 26.89 | | 土師器小皿破片出土。 |
| 176 | N８ | 楕円 | 23 | 16 | 51 | 26.55 | | |
| 177 | N８ | 楕円 | 21 | 18 | 23 | 26.84 | | |
| 178 | N８ | 不整 | 105 | 20 | 34 | 26.74 | | |
| 179 | N７ | ひさご | 25 | 21 | 18 | 26.90 | | |
| 180 | N６ | 楕円 | 30 | 26 | 37 | 26.69 | | |
| 181 | M７ | 円 | 25 | 21 | 7 | 26.62 | | |
| 182 | M７ | 円 | 19 | 17 | 3 | 26.61 | | |
| 183 | M７ | 円 | 16 | 14 | 6 | 26.58 | | |
| 184 | L６ | 楕円 | 23 | 15 | 6 | 26.92 | | SK14と重複。 |
| 185 | L６ | 円 | 23 | 16 | 26 | 26.72 | | SK14と重複。P186と重複。 |
| 186 | L６ | 円 | 20 | 17 | 10 | 26.92 | | SK14と重複。P185と重複。 |
| 187 | L６ | 楕円 | 20 | 11 | 13 | 26.86 | | SB１.P１と重複。 |
| 188 | I７ | 円 | 23 | 22 | 36 | 26.69 | | |
| 189 | I６ | 円 | 24 | 22 | 34 | 26.71 | | |
| 190 | I６ | 円 | 30 | 30 | 10 | 27.02 | | |
| 191 | G６ | 円 | 20 | 17 | 9 | 26.77 | | SI-３と重複。 |
| 192 | E４ | 楕円 | 48 | 29 | 15 | 26.86 | | SK35(旧貝ピット)と重複。 |
| 193 | G４ | 円 | 17 | 17 | 19 | 26.85 | | P79と重複。 |
| 194 | K５ | 円 | 21 | 20 | 13 | 26.96 | | |
| 195 | G５ | 円 | 21 | 17 | 21 | 26.90 | | P64と重複。 |
| 196 | G５ | 円 | 14 | 12 | 7 | 27.05 | | |
| 197 | G５ | 円 | 20 | 19 | 9 | 26.99 | | SX1と重複。 |
| 198 | F５ | 円 | 19 | 18 | 8 | 26.99 | | SX1と重複。 |
| 199 | G５ | 楕円 | 15 | 11 | 13 | 26.94 | | SX1と重複。 |
| 200 | G５ | 楕円 | 25 | 19 | 30 | 26.77 | | SX1と重複。 |

| 名称（P） | グリット | 形　状 | 長径(cm) | 短径(cm) | 深さ(cm) | 底面絶対高(m) | 遺構名 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 201 | G５ | 楕円 | 28 | 20 | 10 | 27.02 | | SX1と重複。P202と重複。 |
| 202 | G５ | 楕円 | 23 | 11 | 8 | 27.03 | | SX1と重複。P201と重複。 |
| 203 | G５ | 円 | 13 | 12 | 19 | 26.92 | | |
| 204 | G５ | 円 | 14 | 12 | 11 | 26.97 | | |
| 205 | G５ | 円 | 12 | 11 | 4 | 26.73 | | |
| 206 | G５ | 円 | 16 | 13 | 4 | 27.06 | | |
| 207 | H４ | 不整 | 43 | 17 | 11 | 26.94 | | SK18・P73・P162と重複。 |
| 208 | G４ | 不整 | 29 | 17 | 38 | 26.68 | | P73と重複。 |
| 209 | G４ | 不整 | 36 | 15 | 13 | 26.91 | | P210・P211と重複。 |
| 210 | G４ | 円 | 15 | 13 | 9 | 26.95 | | SK30、P209と重複。 |
| 211 | G４ | 不整 | 23 | 19 | 12 | 26.96 | | P209、P212と重複。 |
| 212 | G４ | 楕円 | 10 | 8 | 15 | 26.94 | | SK30、P211と重複。 |
| 213 | H４ | 楕円 | 22 | 18 | 6 | 26.88 | | GK２と重複。 |
| 214 | H４ | 円 | 23 | 20 | 9 | 26.85 | | P215と重複。 |
| 215 | H４ | 円 | 18 | 17 | 6 | 26.89 | | P214と重複。 |
| 216 | H４ | 楕円 | 20 | 13 | 9 | 26.95 | | |
| 217 | H４ | 円 | 25 | 23 | 22 | 26.77 | | |
| 218 | H４ | 円 | 18 | 17 | 21 | 26.80 | | P219と重複。 |
| 219 | H４ | 円 | 45 | 40 | 19 | 26.83 | | |
| 220 | K５ | 円 | 23 | 20 | 18 | 26.87 | | |
| 221 | G３ | 円 | 16 | 15 | 9 | 26.98 | | |
| 222 | G３ | 円 | 20 | 19 | 13 | 26.90 | | |
| 223 | G３ | 円 | 17 | 15 | 30 | 26.72 | | |
| 224 | G３ | 円 | 19 | 15 | 27 | 26.81 | | |
| 225 | G３ | 円 | 16 | 14 | 5 | 27.03 | | |
| 226 | G３ | 円 | 25 | 21 | 9 | 26.99 | | |
| 227 | F３ | 楕円 | 22 | 17 | 40 | 26.67 | | |
| 228 | F３ | 円 | 22 | 20 | 23 | 26.77 | | |
| 229 | F３ | 円 | 13 | 13 | 11 | 26.91 | | |
| 230 | F３ | 円 | 15 | 14 | 16 | 26.86 | | |
| 231 | F３ | 円 | 17 | 16 | — | — | | P139、P156と重複。 |
| 232 | F３ | 円 | 21 | 18 | 23 | 26.77 | | P233と重複。 |
| 233 | F３ | 円 | 15 | 15 | 24 | 26.75 | | SK27、P232と重複。 |
| 234 | F３ | 円 | 22 | 20 | 42 | 26.57 | | P157と重複。 |
| 235 | G５ | 円 | 27 | 15 | 4 | 27.06 | | SK33、P133と重複。 |
| 236 | F６ | 楕円 | 27 | 16 | 13 | 26.79 | | P152と重複。 |
| 237 | H６ | 円 | 19 | 18 | 28 | 26.80 | | P42と重複。 |
| 238 | H４ | 楕円 | 22 | 18 | 10 | 26.95 | | SK18と重複。 |
| 239 | G４ | 円 | 22 | 25 | 19 | 26.64 | | SI-６と重複。 |
| 240 | G５ | 円 | 22 | 20 | 71 | 26.39 | | |
| 241 | K５ | 楕円 | 27 | 17 | 12 | 26.94 | | |
| 242 | K６ | 円 | 27 | 22 | 10 | 26.92 | | |
| 243 | L６ | 円 | 21 | 22 | 6 | 27.01 | | |
| 244 | M６ | 楕円 | 35 | 16 | 11 | 26.95 | | |
| 245 | M６ | 円 | 22 | 21 | 14 | 26.95 | | |
| SB１.P1 | L６ | 円 | 24 | 18 | 34 | 26.66 | | P187と重複。 |
| SB１.P2 | L６ | 円 | 20 | 20 | 42 | 26.67 | | |
| SB１.P3 | L７ | 楕円 | 28 | 20 | 38 | 26.61 | SB1.P5 | SK14と重複。 |
| SB１.P4 | L６ | 楕円 | 40 | 18 | 20 | 26.48 | SB1.P6 | SI-２と重複。 |
| SB２.P10 | H４ | 楕円 | 28 | 20 | 23 | 26.80 | | |

## ８．不明遺構

### 第１号不明遺構　（ＳＸ１）（第33図　ＰＬ25）

**位置**　調査区ほぼ中央のＦ・Ｇ-５区で、砂質粘土の範囲として確認された。本遺構はＳＫ38やＰ197・198・199と重複している。これらの遺構との新旧関係は、ＳＫ38やＰ197・198・199より新しい。

**規模と平面形**　平面形が不整形の砂質粘土の範囲が、東西に２ヶ所確認されている。それぞれの規模は、東側で32×32㎝、西側で50×43㎝である。

**主軸方向**　東西方向に２ヶ所並ぶ。

**壁面・底面**　砂質粘土を排除すると、その底面はやや窪み凹凸が見られ平坦ではない。壁は緩く外傾して立ち上がる。深さは東側で７㎝、西側で７㎝を測る。

**覆土**　覆土は砂質粘土により構成され、焼土・炭化物・ローム粒が含まれる。この砂質粘土は東西の２ヶ所以外にも若干散って確認されている。

**出土遺物**　西側の砂質粘土の範囲中に、No.１の土師器小型壺甕類が正位で埋め込まれていた。口縁部付近が欠損している。この土器は表土排除直後に確認されていたが、この時点で口縁部付近は削平されてしまったものと思われる。本来は口縁部も残る器形のまま存在したものと考えられる。

また、西側砂質粘土範囲の北方に、No.２の土師器小皿または坏底部が確認された。この土器はローム土層中に突き刺さっていた訳ではなく、薄い砂質粘土の混じる褐色土層の窪み中に存在したものである。この他に、本土器の口縁部小破片と考えられるものが本遺構周辺から出土している。

**所見**　本遺構は当初、砂質粘土がＳＫ38の東壁に取り付くように面的に確認されたため、カマドを伴う小規模な竪穴遺構と想定して調査をした。しかしながら、調査が進むとＳＫ38の覆土上に別遺構として存在することが分かった。東側の砂質粘土の下からは数基のピットが確認され、その覆土中には砂質粘土は混入しておらず、これらのピットとも重複関係にあることが判明した。

本遺構は、その検出状況から11世紀から13世紀前半代のものと考えられる。特に、No.１の土師器小型壺甕類が砂質粘土中に埋め込まれたような状況で検出されたことから、埋納的な行為も窺われる。

### 第２号不明遺構　（ＳＸ２）（第33図　ＰＬ12・25）

**位置**　調査区ほぼ中央の西側のＧ-４区に確認された。本遺構はＳＩ-６の覆土上面で確認され、新旧関係は本遺構が新しい。

**規模と平面形**　隅丸方形で、長軸51×短軸45㎝を測る。

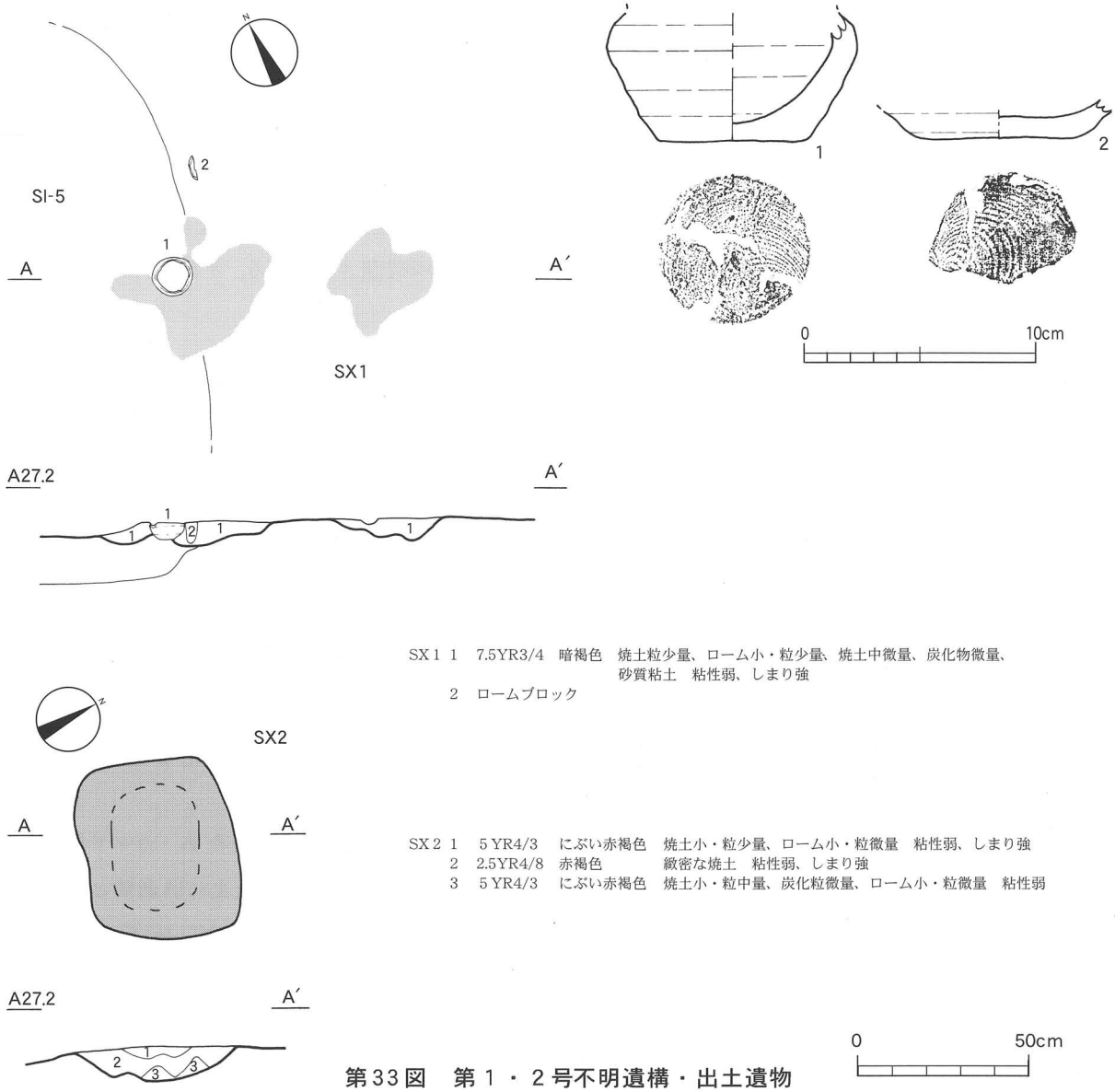
**主軸方向**　Ｎ－50°－Ｗ。

**壁面・底面**　底面は焼け固まったような状況は見られない。やや起伏がある。壁は緩やかに外傾し立ち上がる。底面最深部の深さは10㎝である。

**覆土**　３層に分層でき、大半は焼土や焼土粒で成り立ち、面的に広がって確認された。第１層はにぶい赤褐色土層で焼土はそれほど含まれない。第２層は赤褐色土層で、緻密な焼土により構成されるもので、純粋な焼土の土層である。第３層はにぶい赤褐色土層で、焼土の含まれる割合は上層より減る。

当初ＳＩ-６の覆土で確認されたため、住居内に堆積した焼土とも考えられたが、焼土の質感は古墳時代の住居跡内で見つかるものとは異なり、粘性はなくパサパサした感触がある。

**出土遺物**　本遺構の時期を示すものは出土していない。




SX１１　7.5YR3/4　暗褐色　焼土粒少量、ローム小・粒少量、焼土中微量、炭化物微量、砂質粘土　粘性弱、しまり強
　　２　ロームブロック

SX２１　５YR4/3　にぶい赤褐色　焼土小・粒少量、ローム小・粒微量　粘性弱、しまり強
　　２　2.5YR4/8　赤褐色　緻密な焼土　粘性弱、しまり強
　　３　５YR4/3　にぶい赤褐色　焼土小・粒中量、炭化粒微量、ローム小・粒微量　粘性弱

**第33図　第１・２号不明遺構・出土遺物**

**所見**　帰属時期は明確ではない。しかしながら、時期的には古墳時代前期の遺構と重複し本遺構が新しく、密集するピット群中で確認されたものの重複状況がないことから、ピット群により構成される建物と関連を持つものと想定される。本遺構は、窪みに投棄された焼土というよりは、この窪みで火を焚いた痕跡と考えられる。

ＳＸ１

| 番　号 | 器　種 | 法量(cm) | 特　　徴 | 胎土・色調・焼成 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|
| 第33図<br>1 | 土師器<br>小　型<br>壺甕類 | B：(5.5)<br>C：6.6<br>底部厚：0.8 | 頚部から口縁部を欠損する。器形は底部から外傾して立ち上がり、胴部上位で内傾し、頚部でやや直立するものと考えられる。内底面は半球形のように丸い。底面には回転糸切り痕が残る。器面にはロクロ成形痕が残る。底面と胴部外面の一部にタール状の付着物が見られる。 | 胎土：長石△、石英△、雲母△、白色粒◎、赤色粒○<br>色調：灰褐色<br>焼成：普通 | 砂質粘土の中に正位で埋められていた。口縁部は表土排除時に削平したものか。 |
| 2 | 土師器<br>小　皿 | B：(1.2)<br>C：〔6.7〕<br>底部厚：0.9 | 大振りの小皿の底部破片であろうか。底部の器厚は0.9cmで、立ち上がった部分は器厚0.7cmを測り、底部以外の器厚が厚い。底部内面の中央はロクロ成形により、やや高まりが見られる。底面には回転糸切り痕が残る。 | 胎土：長石△、石英△、雲母△、<br>色調：黄褐色<br>焼成：普通 | 砂質粘土周辺から出土した。 |

## 9．近現代遺構

調査区の中で近現代の遺構は多数確認されている。これらの中には、真鍋小学校が木造校舎であった頃の側溝基礎地業の痕跡や、避雷針の根本に当たる部分、そして防空壕跡等が見つかっている。また、つい最近掘られた「真鍋の桜」をライトアップするための電線埋設溝なども見られた。ここでは調査区中央部で確認されたＧＫ19とした防空壕について取り上げる。

### 第19号近現代遺構（ＧＫ19）（第34･35図　ＰＬ13･14･15）

**位置**　調査区ほぼ中央のＥ～Ｇ-３・４区で確認された。本遺構はＳＩ-６・７やＳＫ25･27･34、ＧＫ16などと重複している。これらの遺構との新旧関係は、ＳＩ-６・７やＳＫ25･27･34より新しく、ＧＫ16より古い。

**規模と平面形**　防空壕跡の平面形は長方形で、長辺が5.46ｍで短辺が1.75ｍである。それに、出入り口部が２ヶ所と、梁を設置する掘り込みが左右対称に見られた。本体底面までの深さは1.7ｍを測る。

**主軸方向**　Ｎ－73°－Ｗ。調査区内で確認されている旧校舎の側溝のようなコンクリート基礎と並行している。このことから、防空壕設置にあたりこの校舎の方向が意識されているものと思われる。

**壁面・底面**　壁面は底面からほぼ直角に立ち上がる。その底面は平坦で、壁際には梁と対応する柱穴が16ヵ所確認された。柱穴の底面形は20×20㎝のほぼ方形を呈している。これらの柱穴は深さ40～50㎝を測り、柱穴底面が平坦なものが目立つ。これらの柱穴に沿って、平面形が大きく浅い掘り込みも見られ、そのうちの数ヶ所には細い杭が遺存していた。また、東西壁の壁際中央にもそれぞれ１ヶ所ずつ柱穴が掘り込まれており、梁とは異なる方向の部材が渡されていたものか。

底面の中央には長辺方向に長い硬化面が確認され、北側出入り口付近は黒色土の硬化面が盛り上がっており、北側の出入り口を頻繁に利用していた様子が伺える。この硬化面は、西壁方向へ向かう程散漫になる。

**出入り口部**　出入り口部は北壁の東側に１ヶ所と、南壁の西側に１ヶ所が確認された。それぞれ階段により、出入りするようになっている。出入り口部の幅は60㎝程度で、階段の１段は20～25×50㎝で、高さ20㎝程度のものである。それぞれの階段はおよそ５段ずつ作られている。それぞれの階段の傾斜はおよそ45°であるが、部分的に崩れている。

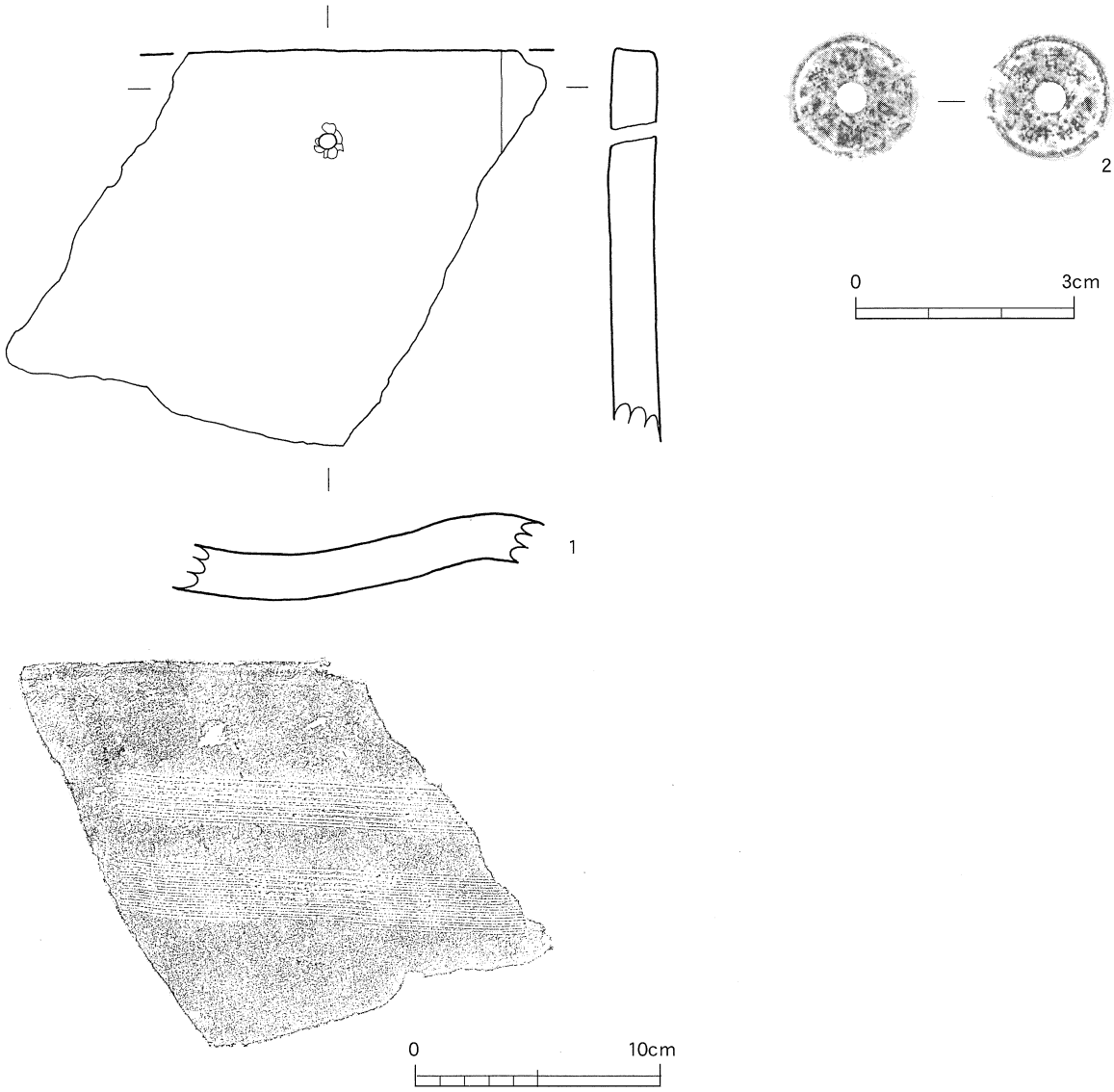
**覆土**　覆土上層は非常にしまっており、中層以下は非常にしまりがなくぼそぼそであった。覆土にはロームブロックが多く含まれており、防空壕を掘った時の土層を埋め戻したものか。

**出土遺物**　No.１は覆土中から出土した桟瓦で、焼成後の釘穴が開けられていた。No.２は覆土中から出土した1944（昭和19）年に発行された硬貨で、穴アキ５銭錫貨である。

**所見**　今回確認された防空壕跡は長方形の地下式のもので、本来は梁を南北方向に渡し、蓋がしてあったものと考えられる。出入り口施設は南北に２ヶ所確認され、北側の出入り口施設が頻繁に利用されたものと考えられる。梁を支える柱材は角柱と考えられ、梁についても角材と考えられる。

この防空壕に関して、戦時中に教員として真鍋国民学校に勤務なされた塙　弘世氏にお話を伺うことができたのでその概要を記す。

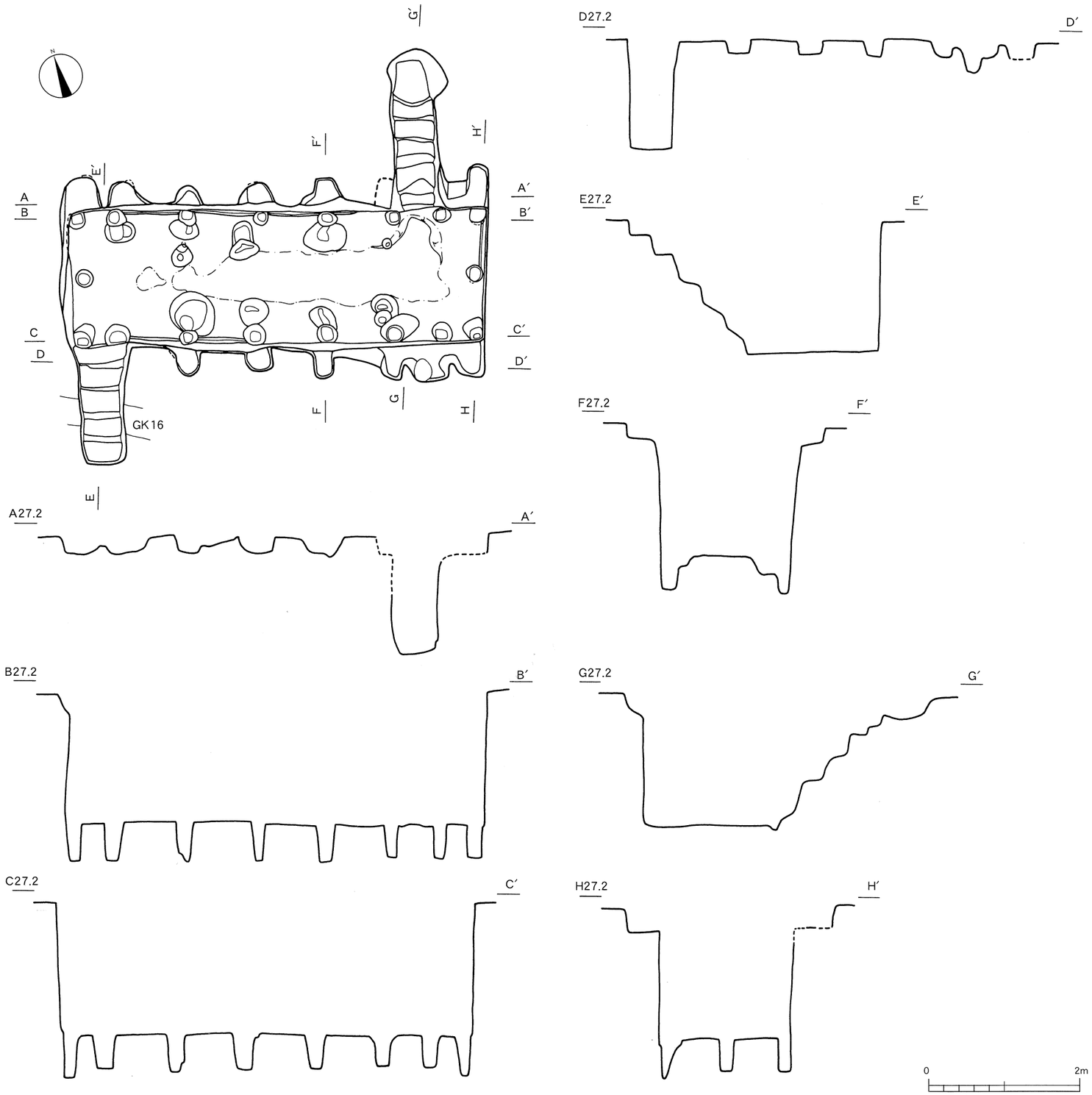
この防空壕跡は、旧木造校舎の職員室の南側の校庭に作られたとのこと。1945(昭和20)年の４月から８月の間に作られた。当時の先生方がこの防空壕を掘ったらしく、この壕を使ったのは真鍋小学校に勤務する




**第34図　第19号近現代遺構（防空壕跡）出土遺物**

先生方であった。先生方は空襲警報が発せられると、この中に入ったらしい。この壕の中には十数人程度入ることができ、南北壁に沿って並行する長椅子があり、向かい合うように座した。壕内は板張りとなっていたらしい。今回お話を伺った塙　弘世氏も、実際にこの中に入ったとのことである。

ちなみに、学校に通った子供たちは、空襲警報の前段階の警戒警報で下校することになっていたため、この中に入ることはなかったとのことである。




第35図　第19号近現代遺構（防空壕跡）

## 10. 遺構外出土遺物（第36図　ＰＬ26）

この項目では、今回の発掘調査中において遺構外扱いされた資料や、校舎改築工事事業に伴う工事立会い時出土資料、それに加えこれまでの「真鍋の桜」樹勢回復事業などに伴って出土したものを掲載した。

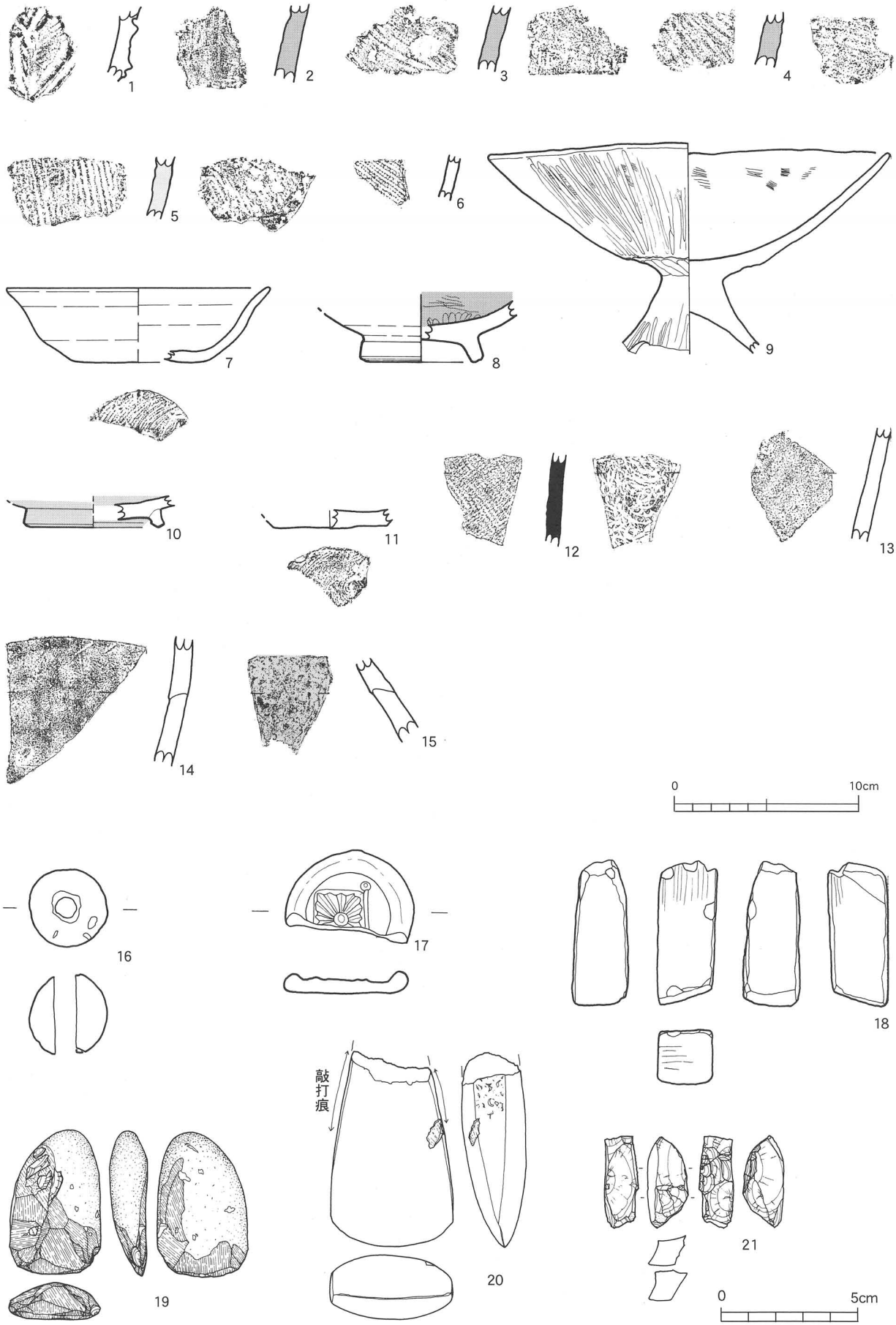
No.１～５は縄文土器である。この内、No.２～５は縄文時代早期後半の条痕文系土器群の破片である。No.１は縄文時代後期前半の堀之内１式土器破片である。No.６は弥生土器破片である。No.９とNo.12は古墳時代の土器である。No.９は土師器高坏で、平成８年の「真鍋の桜」樹勢回復事業に伴って出土したものであり、大宮前遺跡の発見に関わる出土資料である。No.12は須恵器破片でＰ90から出土した。No.７・８・10・11・13・15は、古代から中世の出土土器・陶器である。No.７は土師器坏、No.８は高台付椀で内面黒色処理される。No.10は緑釉陶器の高台の付いた椀皿類の破片であり、黒笹90号窯期の特徴を持ち、９世紀前半の製作年代が想定される。製作産地は陶器の胎土が須恵質なところから尾北産の可能性が考えられる。No.11は土師器小皿の底部である。No.13～15は常滑産陶器の壷甕類の破片である。

No.16は真鍋小学校本館北側の仮校舎プレハブ設置場所から出土した土玉である。No.17は真鍋小学校本館南側の仮校舎プレハブ設置場所から出土した硝子製のおはじきである。No.18はＳＩ-６の覆土中から出土した凝灰岩製の砥石であり、古代～中世のものか。

No.19・20はＳＩ-１の覆土中から出土したもので、いずれも縄文時代のものと考えられる。No.19は扁平な楕円形礫の一部を磨って刃部を作り出している。この資料の出土位置の周辺には条痕文系土器破片が出土し、ＳＫ23の炉穴が確認されていることから、縄文時代早期後半期の可能性がある。No.20は蛇紋岩製の磨製石斧であり、基部が欠損している。側面には、制作時の痕跡が残る。

No.21はＳＩ-４の覆土中から出土したもので、緑色凝灰岩製の玉作り関連資料と考えられる。形状からして形割り状態のもと思われる。ＳＩ-４の出土土器に照らし合わせて伴出した遺物とは考えられず、遺構外扱いとした。今回の調査に伴ってＳＩ-２から緑色凝灰岩製の玉作り関連資料が出土しているが、これらの石材とは質感が異なる。

この他に遺構外出土遺物として黒曜石の剥片が出土しており、この内の５点について蛍光Ｘ線分析を行っている。その結果、分析資料５点のうち４点（第７図８～11）が高原山甘湯沢産と推定され、１点（実測図未掲載）が神津島恩馳島産と推定されている。この分析の方法については、土浦市教育委員会「山川古墳群（第２次調査）－土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第８集－」2004に掲載予定である。




第36図　遺構外出土遺物

# 第4章　調査のまとめ

今回の大宮前遺跡の調査では、約700㎡という狭い調査区の中で旧石器時代から近現代にわたる様々な遺構・遺物が検出された。以下は、各時代の調査成果について触れてみたいと思う。

**①旧石器時代**

旧石器時代の調査は、現地調査の最終段階で実施し、ローム層中から武蔵野台地編年のⅤ～Ⅵ層下部段階に相当する珪質頁岩の剥片や円礫が出土した。これらの剥片は調整剥片であり、接合する剥片も確認されたが、明確な完成品となる石器（道具）は出土していない。今回の調査で検出された珪質頁岩については色調がオリーブ灰色を帯び、市内において類例のない石材と言える。そして、これらの剥片と同様な段階の検出例として、市内の向原遺跡出土例が挙げられる（註1）。

**②縄文時代～弥生時代**

調査区内から確認された縄文時代の遺構は、第23号土坑1基のみであった。この遺構は縄文時代早期後半の炉穴で、その中から条痕文系土器群の破片が出土している。この他に、調査区内からはやはり同時期の土器が若干出土しており、本来は複数の遺構が存在した可能性が考えられる。このことからこの土地における遺構・遺物の数量は僅少で、キャンプサイト的な利用の痕跡と考えられる。

弥生時代の遺物は、調査区内から土器片が1点出土したのみであり、弥生時代後期のものと考えられる。

**③古墳時代**

今回の調査区内で検出された遺構・遺物は、この時代のものが多数を占める。古墳時代の中でも、前期と後期の竪穴住居跡が検出され、後者は1軒のみである。大宮前遺跡の発見の経緯でも触れたが、今回の調査区の南方にあたる「真鍋の桜」の根本でも前期の竪穴住居跡らしきものが確認されている。これらのことから総合すれば、校庭全体に古墳時代前期の集落跡が展開している可能性が考えられる。古墳時代後期の集落展開については不明である。

古墳時代前期の遺構は竪穴住居跡が6軒確認され、第8号住居跡以外はいずれも調査区南側に寄って検出されている。第1・2・3・6・9号住居跡については東側に入り口を設けた構造が考えられる。このうち第1・2・3・6号住居跡は、4本の主柱穴により規格的な構造が見られた。そして、住居跡の面積にも大小があり、それぞれの使われ方においても差異が存在するものと考えられる。これらの中で第1号住居跡と第2号住居跡は近接して検出されており、前期の中でも時期差が想定される。

特徴的な出土遺物として、まず第1号住居跡の北東隅からまとまって出土した土器群が興味深い。土師器の甕や壺が折り重なるように出土している。これらの中には、口縁部外面に輪積み痕を意図的に残す個体が複数見られ、また頸部に粘土帯を巡らせ指頭押捺するものも複数見られた。これらは、古墳時代前期の一時期を示す良好な一括資料と考えられる。またこの住居跡出土遺物に、縄文が施文され赤彩された南関東系の土師器壺形土器なども出土している。このような土器群の様相については、古墳時代前期でも古手の様相を示すものと考えられる（註2）。

この他、第2号住居跡からは、外来系の土器である「大郭式土器」または「大郭系土器」と呼ばれる大型の壺形土器などが出土している。この土器は、東海地方の東駿河地域を中心として用いられた土器（註3）

であり、他地域の影響の様子を示す資料といえる。市内でのこの大郭式土器の大型壺形土器の類例は、向原遺跡や北西原遺跡などで口縁部破片が出土している（註４）。

この他に第２号住居跡からは、いわゆる「Ｘ字形器台」に類似した器形のものも出土しており、古墳時代前期の中でも第１号住居跡の土器群よりは新しい様相を示すものと考えられる（註５）。このことから、今回の調査区で確認された住居跡群には複数段階の変遷が考えられる。

また、第２号住居跡や遺構外出土遺物として緑色凝灰岩を用いた玉作り関連資料が出土している。これらの資料は、緑色凝灰岩の管玉などの製作を目的として、遺跡内に持ち込まれたものと考えられる。そして、玉作りの工程の中でも荒割り・形割り工程のものが出土した。現状では、第２号住居跡で確実に玉作りを行ったかは否定的であるが、大宮前遺跡全体で考えた場合には、未調査部分に実際に玉作りを行った工房が存在するのではと期待される。

市内の古墳時代前期の玉作り遺跡は、烏山遺跡や八幡脇遺跡、そして大宮前遺跡と同一台地上の浅間塚西遺跡で確認されている。これらの多くは、古墳時代前期の後半頃のものであり、大宮前遺跡の出土例も同様な時期のものと考えられ興味深い。このような状況は、霞ヶ浦の土浦入り沿岸地域のこの時期を特徴付けるものといえよう（註６）。

**④平安時代から鎌倉時代**

平安時代から鎌倉時代にかけての遺構としては、掘立柱建物跡２棟と方形竪穴遺構１軒が検出された。そして建物跡として認識できなかったが、ピット群のまとまりが２ヶ所確認された。この他、土坑や溝そして不明遺構が検出された。

まず、掘立柱建物跡については、調査区内中央部及び東部ピット群中で検出されている。掘立柱建物跡として認識できた柱穴と、ピット群としたピットの間には形状的な差異は見当たらない。このことからすれば、ピット群の各々についても柱穴として考えることができる。これらの柱穴は、典型的な古代の掘立柱建物跡に比べ貧相な感じを受け、その柱穴の並びについてもあまり規則性をつかめない。しかしながら、第１・２号掘立柱建物跡の想定される建物棟の方向は同様な状況が見られ、関連を持つ建物と思われる。また、中央部ピット群中で確認された第２号不明遺構についても関連性が考えられる（註７）。

これらの柱穴からの出土遺物は少なく遺存状況が良くないが、内面黒色処理された高台付椀類や、土師器小皿、それに常滑産陶器甕などが出土しているのみで、古代的な土師器甕などの煮沸具は出土していない。これらのうち、比較的多いのは土師器小皿であるが、いずれも小破片であり形を復元できるものは少ない。これらの土師器小皿は複数の形態的特徴を持ち、一定の時間幅を持っているものと考えられる。ここでは、これらの使用時期を11世紀から12世紀代の範疇と考えた（註8）。そして、Ｐ１から出土した常滑産陶器甕の製作年代については、常滑甕２型式（註９）に比定されることから、1150～1175年の年代が与えられる。この陶器の伝世を考慮したとしても、掘立柱建物跡やピット群の帰属年代の下限については、13世紀前半代の時期を下ることはないと思われる。また、第１号溝については覆土の状況やピット群との配置関係などから、区画を意識して設けられた可能性を想定することができる。

方形竪穴遺構については、１軒のみが検出され、出土遺物として常滑産陶器甕や白磁皿などが出土している。常滑産陶器甕は４型式（註10）に比定され、およその製作年代は1190～1220年が与えられている。白磁皿は皿Ⅷ類（註11）に比定され、12世紀代の年代が与えられている。このような遺物の年代からすれ

ば、本遺構は12世紀後半から13世紀前半頃のものと考えられ、およそ鎌倉時代のものといえる。

上記のことからすれば、掘立柱建物跡・ピット群が構築開始された後に方形竪穴遺構がつくられたと想定できる。そして、土師器小型壺甕類の埋納（註12）が想定できる第1号不明遺構についても、これらの建物変遷の狭間でなされたものと考えられる。

これらの11世紀から13世紀前後の遺構・遺物を出土した集落遺跡は県内では少なく、その様相がまだ明確になっていない。この時期は、台地上から古代的な集落跡形成の痕跡が消滅していく時期といわれ、出土遺物の変化と相まって、古代から中世への転換期とされる。この時期の遺跡として、土浦市内では入ノ上遺跡が調査されている。同遺跡内では、11世紀代以降になるとそれまでの竪穴住居跡や掘立柱建物跡による集落景観は継続せず、貧弱な掘立柱建物跡や方形竪穴遺構などによる新たな景観が見られるようになる。出土遺物として貿易陶磁器である白磁や青磁、そして渥美産陶器や常滑産陶器製品の出土が目を引く。今後はこれらの遺構・遺物との対比・検討が課題となろう。

加えて、大宮前遺跡の遺構外出土遺物の中には黒笹90段階（註13）と考えられる緑釉陶器も出土しており、この遺跡の立地がその前段階から物流・交通面などにおいて重要な位置を占めていた様子が伺える。

**⑤近現代**

この時期の遺構としては第19号近現代遺構とした防空壕跡や、その他に旧校舎の側溝に関わる基礎地業などが見つかっている。このうち、第19号近現代遺構とした防空壕について取り上げる。

防空壕とはどのようなものかを調べてみると、「敵機から投下される爆弾の弾片やその破片、爆風から身を守るための退避施設で、集団防空壕と家庭防空壕（個人防空壕を含む）に分けられる」とある。今回大宮前遺跡で確認された防空壕は、前者の集団防空壕に相当するといえる。そして、その構造については、当時内務省より通達された「防空壕構築指導要領」（昭和15年12月）に基づいて作られたようである。それによれば、防空壕の上部構造は掩蓋（壕の上を木材・石材などで覆い敵弾を防ぐ）型が基本であり、下部構造は地下式が原則となっている。内部施設は片側席と両側席があり、大型防空壕にはなるべく両側に席を設けることになっていたようである。腰掛は奥行き30㎝（約一尺）、高さ36㎝（約一尺二寸）が標準とされていた。出入り口部分の幅は、60㎝（約二尺）が標準となっていたようである（註14）。

第19号近現代遺構とした防空壕跡は、上記同様に上部構造が掩蓋型と考えられ、角材を梁として渡し強度を図り、その上には板材を乗せ、掘り込んだ土を被せたものと考えられる。また、下部構造も地下式であり、内部施設は壕内床面の状況から両側に席を設けたものと考えられる。出入り口の幅についてもおよそ60㎝ほどであり、「防空壕構築指導要領」に基づいて作られた可能性が想定できる。

そして、今回確認された防空壕に関しては、実際にその中に退避体験を持つ塙氏（昭和20年時に真鍋国民学校教員）に当時の様子を伺うことができた。それによれば、この防空壕は職員室前の校庭に作られ、先生方が主に使用したらしい。

今回確認された防空壕跡は、戦時下の真鍋小学校の状況を考える上で貴重な調査事例といえる。

**註釈**

註１）　今回の旧石器時代出土遺物の特徴については、窪田恵一氏にご教示頂いた。

註２）（古墳時代土器研究会1997）の中で、塩谷　修氏は茨城県内の古墳時代前期の土器様相について述べ、口縁部外面に輪積痕を持つ甕を出土した境松遺跡第23号住居跡出土遺物を、比田井克人氏の古墳時代前期土器の変遷過程の考えをもとに、Ⅰ段階（新）に位置付けている。また、(白石1998）の中で、やはり比田井氏の土器の変遷過程をもとに、南関東系の装飾壺や輪積み口縁平底刷毛調整甕などの土器群をⅠ段階新の特徴とし、具体的には森戸遺跡の居館跡堀下層出土土器を挙げている（(財)茨城県教育財団1990a)。

註３）　特に関東地方では、大型の壺形土器が注目されている（高梨1997)。関東地方における大郭式の壺形土器の位置付けは、比田井氏の土器の変遷過程におけるⅡ段階に伴うものが多いとされる（古墳時代研究会1997）・(白石1998)。そして大宮前遺跡出土のものに関しては、口縁部に太い沈線が見られ、この特徴に関しては大郭式の壺形土器の中でも新しい様相とされる（高梨1997)。

註４）　向原遺跡第64号住居跡出土遺物の№２・３がそれにあたる。報告書では埴輪と記されているが、壺形土器の口縁部であり接合する。北西原遺跡の第２次調査でも出土している。これらの土器の胎土には特徴があり、石英粒が多量に含まれている。県内では結城市の善長寺遺跡等で複数個体が出土している（(財)茨城県教育財団1990b)。

註５）（古墳時代土器研究会1997）・（高花2001）による。

註６）　土浦入り南岸の烏山遺跡では、メノウ製の勾玉、緑色凝灰岩製の管玉、滑石製の管玉などが製作されている。土浦入り北岸の八幡脇遺跡では、メノウ製の勾玉、緑色凝灰岩製の管玉、滑石製の勾玉などが製作され、琥珀材も出土している。浅間塚西遺跡では、滑石製の管玉の製作を行っているようである。この他、うぐいす平遺跡では砂岩製の筋砥石（第69号住居跡№4）が出土し、近接した寄居遺跡では片岩製（PL36・48住石製品）の内磨き砥石が出土しているが、明確な玉作りの痕跡は確認できない。

註７）　鹿嶋市の厨台遺跡群内では、掘立柱建物に炉と考えられる焼土址が伴っている（(財)鹿嶋市文化スポーツ振興事業団2002)。

註８）（比毛2003）の中で入ノ上遺跡ＳＸ-12･13出土の土師器小皿や内面黒色処理高台付椀を挙げ11世紀から12世紀に位置付けている。また入ノ上遺跡ＳＢ-５出土の土師器小皿を12世紀中葉から後半代のものとしている。市内の土師器小皿の出土状況を見ると、根鹿北遺跡では竪穴住居跡から出土しており本遺跡の状況とは異なる。このことが、遺跡の性格の違いなのか、時間的な変化と捉えるかは今後の課題といえる。

註９）（赤羽・中野1994）をもとに比毛君男氏にご教示頂いた。

註10）　註９）と同様。

註11）（横田・森田1979）をもとに比毛君男氏にご教示頂いた。

註12）　時期的には後世のものとなるが、鎌倉市の今小路西遺跡では中世第Ⅰ面（14世紀後葉）で瀬戸小壺埋納壙が３ヶ所確認されており興味深い。(鎌倉市教育委員会他編1995)。

註13）　小松崎博一氏や吉澤　悟氏に御教示頂いた。

註14）（柏書房2002）による。

**参考文献**


横田賢次郎・森田　勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について―形態分類と編年を中心として―」『九州歴史資料館研究論集』４　1979

土浦市教育委員会「向原遺跡」1987

土浦市教育委員会「烏山遺跡」1988

(財）茨城県教育財団「茨城県教育財団文化財調査報告第55集　北郷Ｃ遺跡　森戸遺跡」1990a

(財）茨城県教育財団「茨城県教育財団文化財調査報告第51集　本田遺跡　善長寺遺跡　小田林遺跡」1990b

土浦市立博物館「第６回特別展図録　古代の装身具・玉―烏山玉作り遺跡とその周辺―」1991

中世土器研究会編「概説　中世の土器・陶磁器」真陽社1995

赤羽一郎・中野晴久「生産地における編年について」『全国シンポジュウム　中世常滑焼をおって　資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所1994

鎌倉市教育委員会・鎌倉考古学研究所編「集成　鎌倉発掘第１巻　武家屋敷編（１)」新人物往来社1995

土浦市教育委員会「入ノ上遺跡」1997

高梨俊夫「大郭式土器の足跡―もう一つの東海系―」『研究連絡誌』第49号1997

古墳時代土器研究会「土器が語る－関東古墳時代の黎明－」1997

土浦市教育委員会「根鹿北遺跡」1997

岩松和光「茨城県鹿島厨台遺跡群出土の陶磁器」『貿易陶磁研究』№18　1998

白石真理「常陸における土器群の隔期と交流」『庄内土器研究』ＸⅦ1998

高花宏行「印旛地域における古墳時代開始期の土器様相」『研究紀要』２印旛郡市文化財センター2001

(財)鹿嶋市文化スポーツ振興事業団「鹿島神宮駅北部埋蔵文化財調査報告書ＸⅧ」鹿島市の文化財第112集2002

柏書房『しらべる　戦争遺跡の辞典』2002

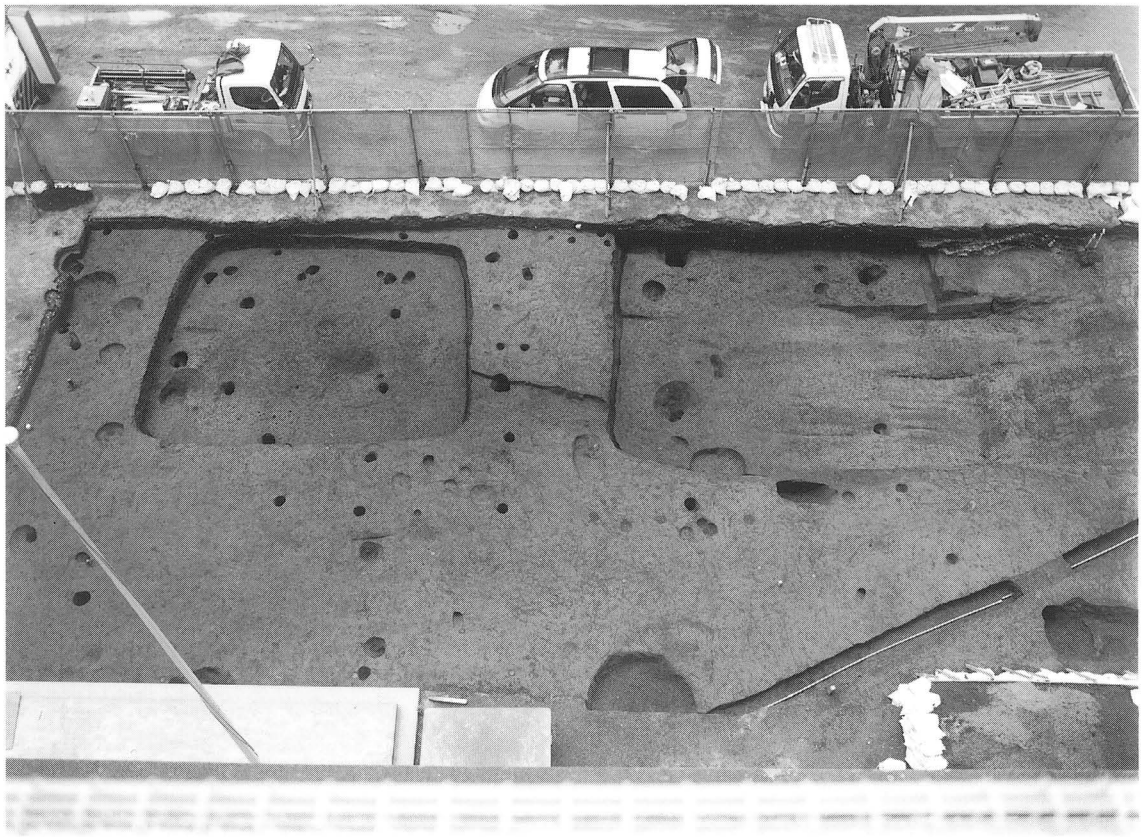
日本貨幣商協同組合『日本貨幣カタログ』2003

比毛君男「神明遺跡における中世遺物と遺構の検討」『西谷津遺跡・神明遺跡（第４次調査）・北西原遺跡（第６次調査）・山川古墳群確認調査』土浦市教育委員会2003

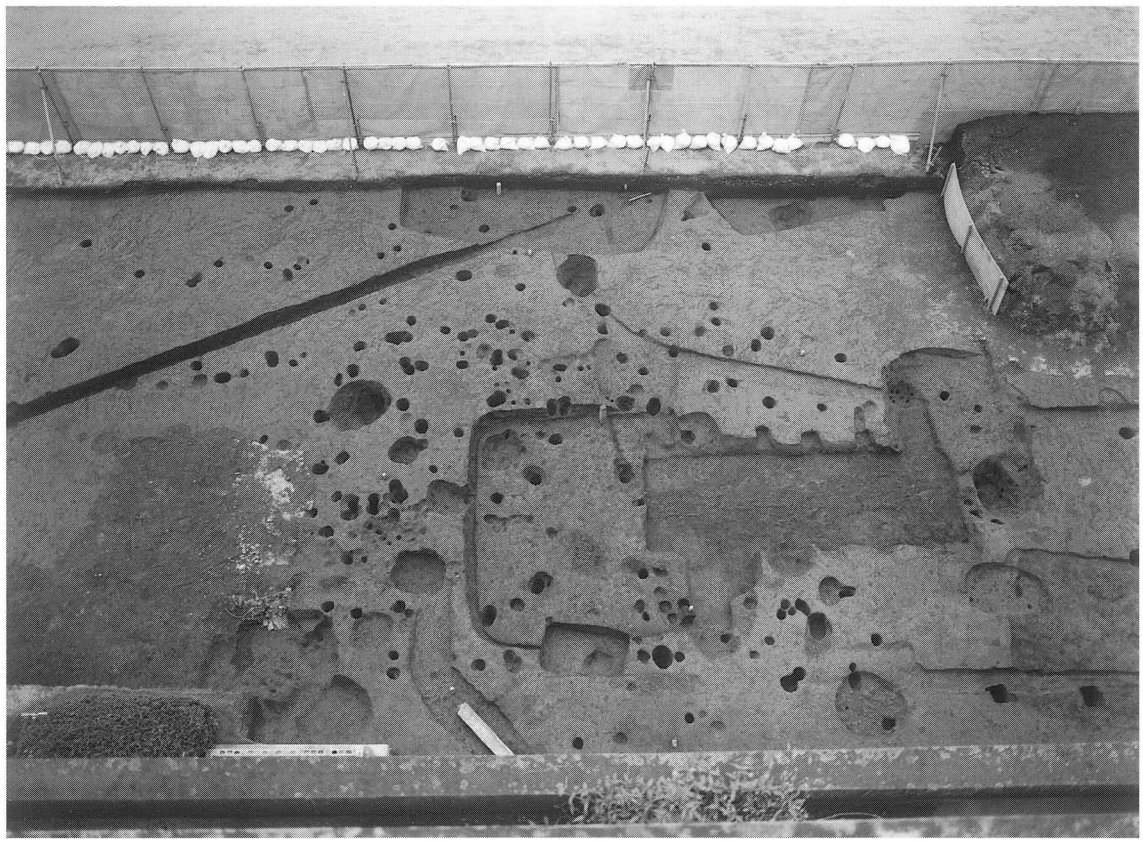
▼

◀

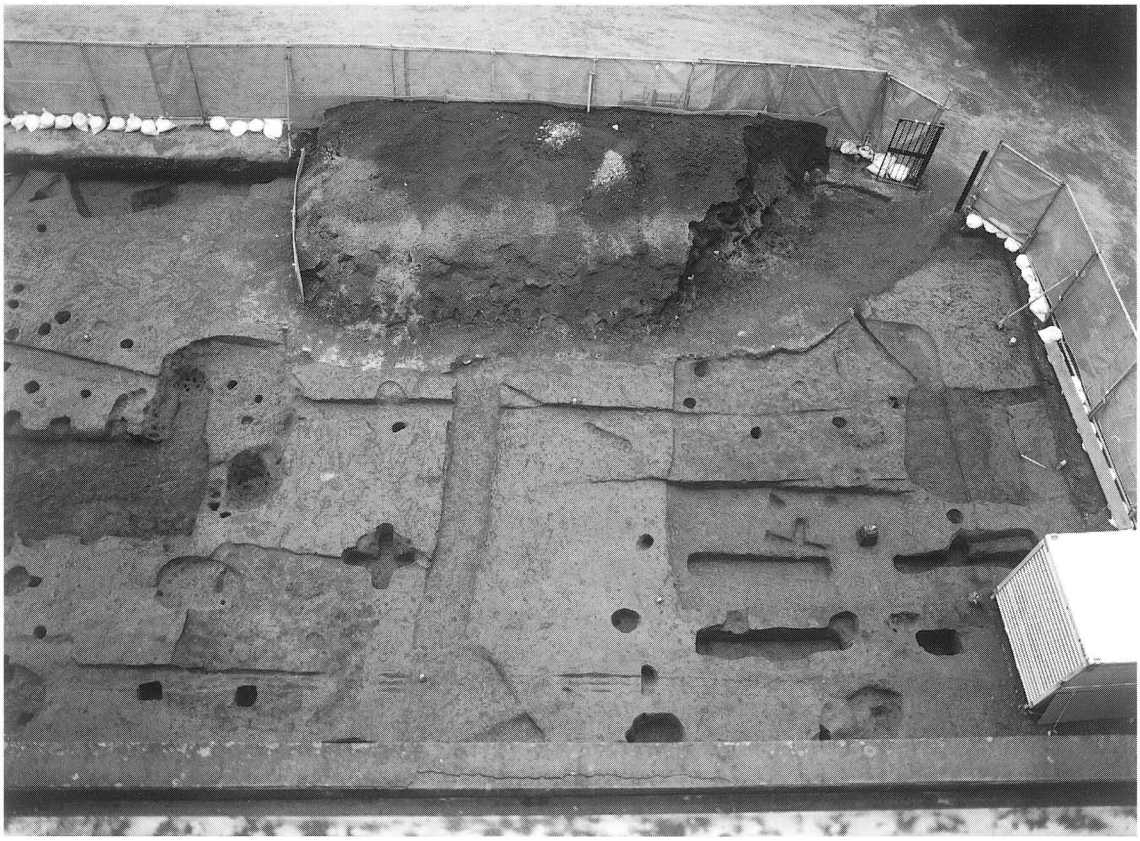
米軍航空写真（1947（昭和22）年撮影）　※▲の交点が調査地（国土地理院発行）



調査区（東）



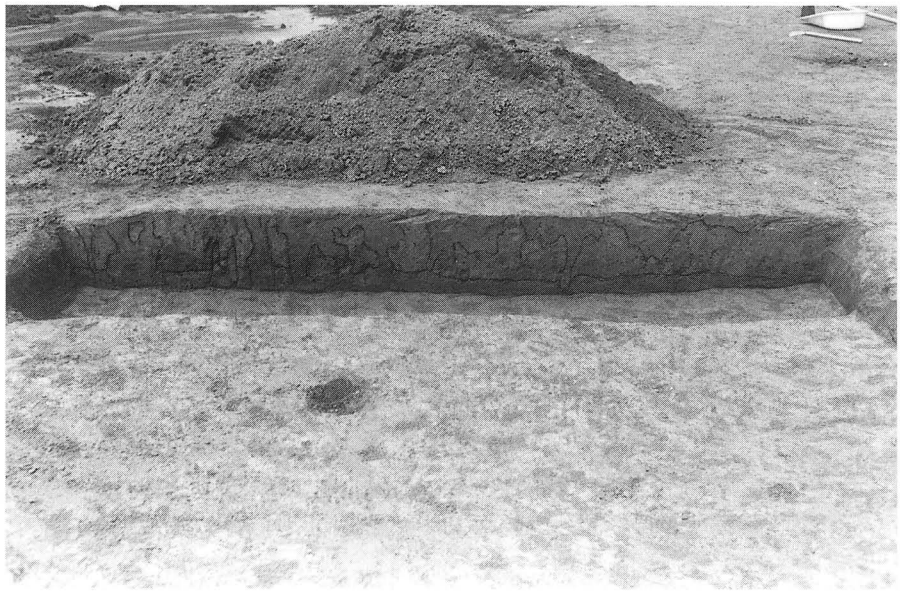
調査区（中央）



調査区（西）

調査区全景（西側から）

基本層序
（GK19 内東壁）



旧石器時代
調査区土層

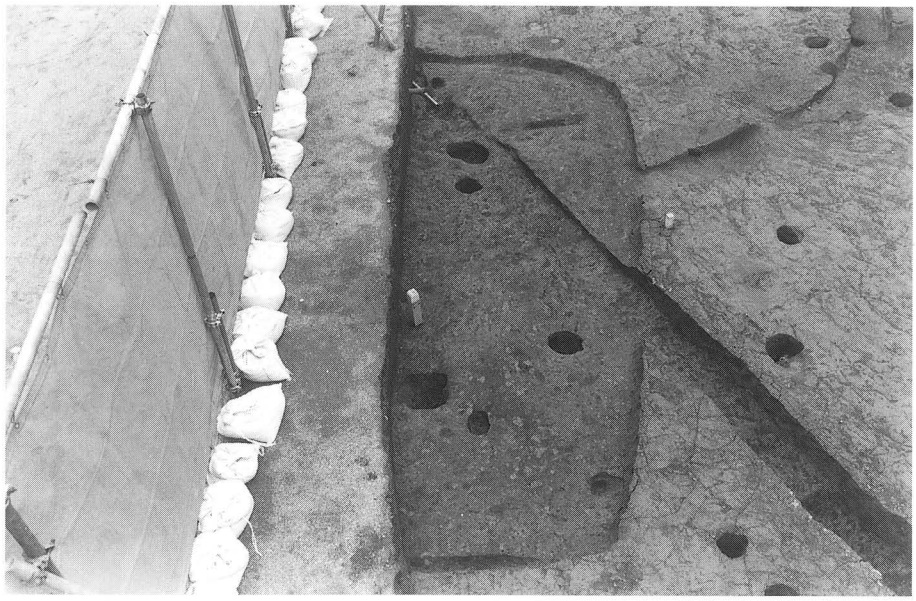
旧石器時代
遺物出土状況

第１号住居跡

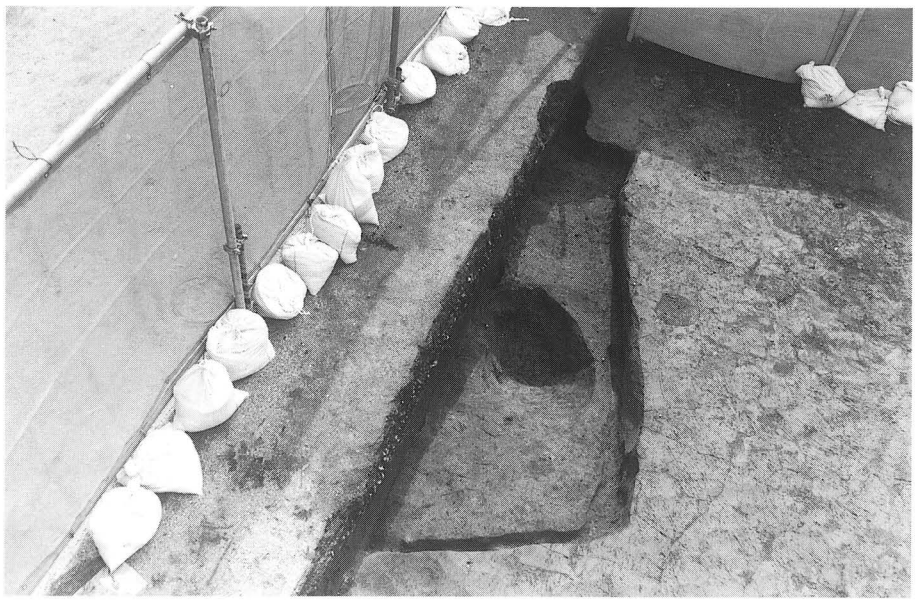
第１号住居跡
遺物出土状況

第１号住居跡
遺物出土状況

第２号住居跡



第３号住居跡



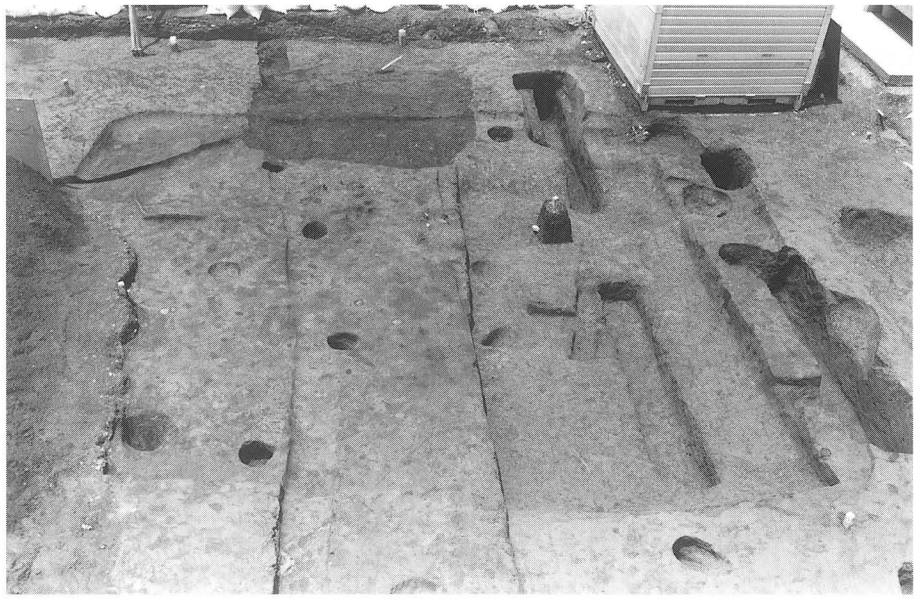
第４号住居跡

第６号住居跡

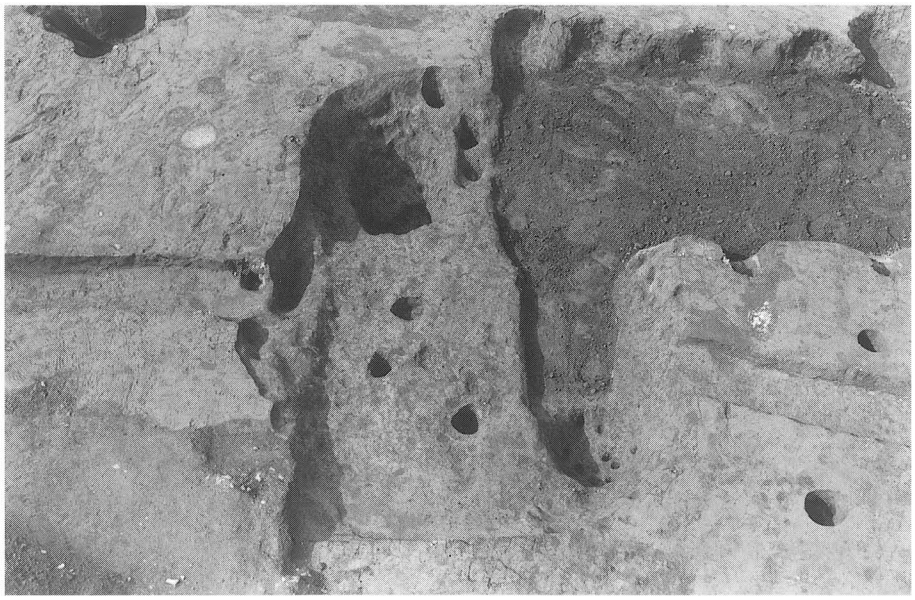
第６号住居跡炉

第６号住居跡
遺物出土状況

第８号住居跡



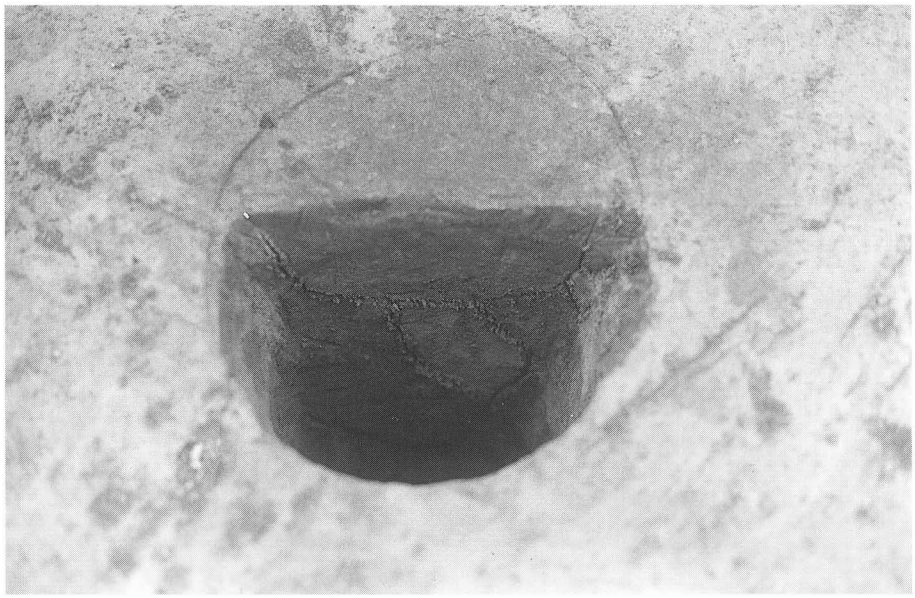
第９号住居跡



第１号方形竪穴遺構

Ｐ５土層

第１号掘立柱
建物跡Ｐ１土層



Ｐ 107
遺物出土状況

第 1 号土坑

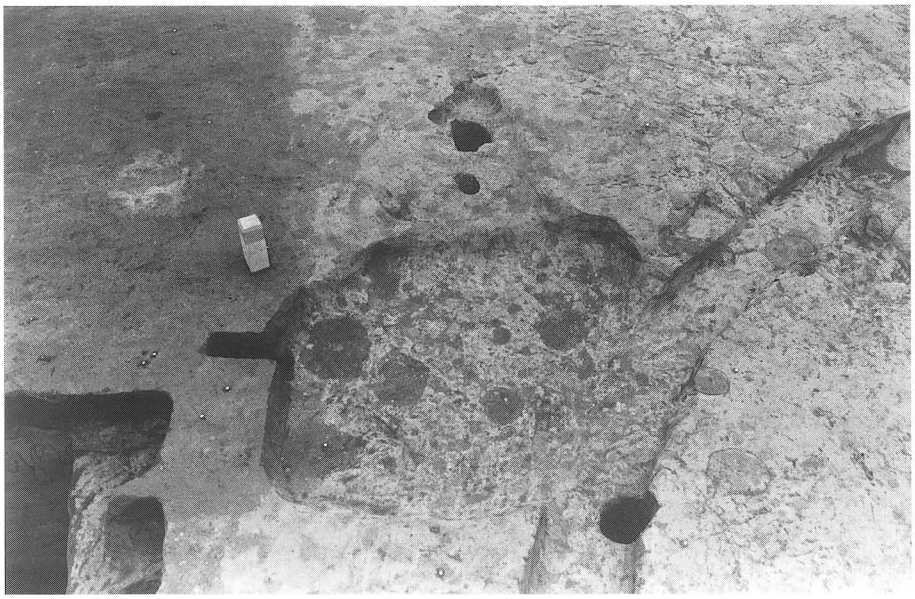
第 14 号土坑

第 24 号土坑
遺物出土状況

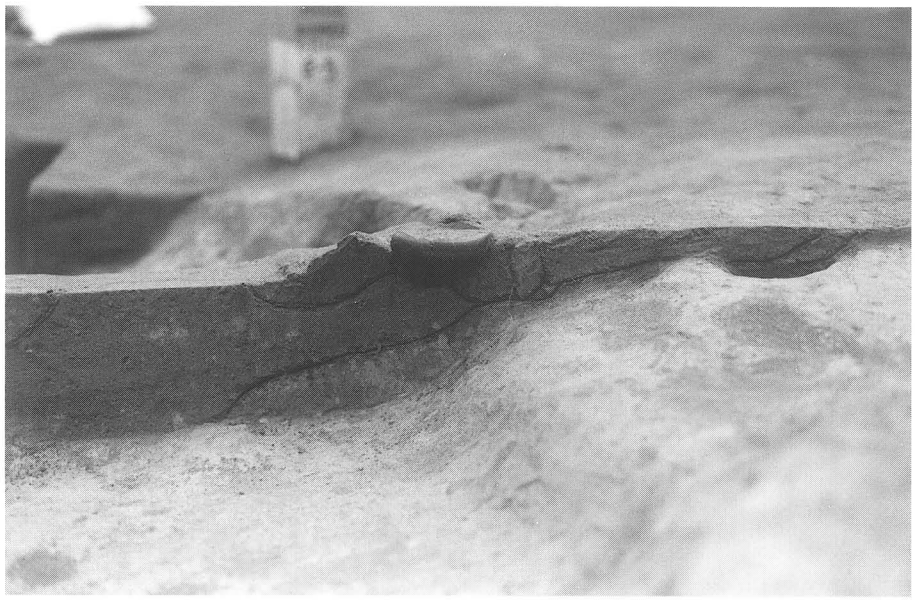
第31号土坑

第35号土坑
貝出土状況

第38号土坑



第１号不明遺構

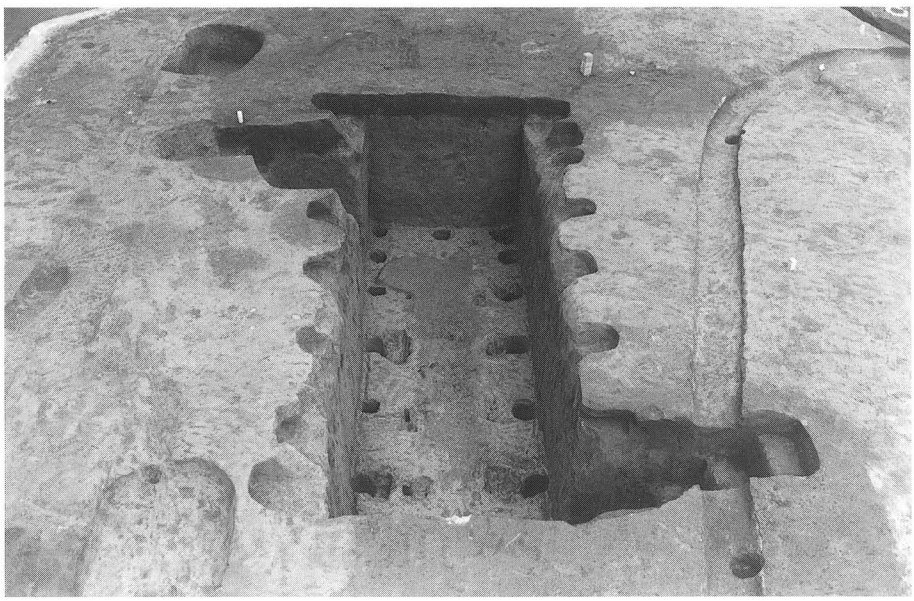


第１号不明遺構
土層

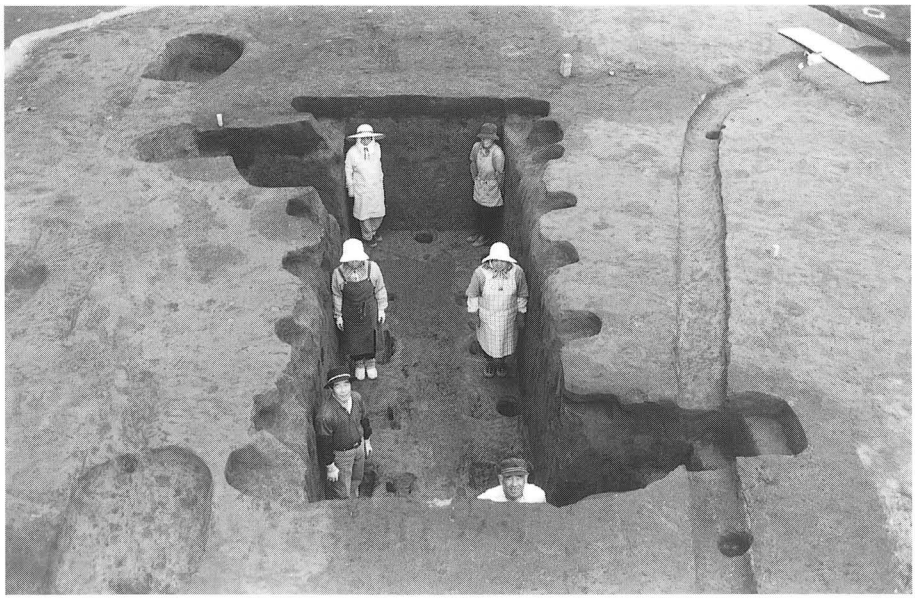
第２号不明遺構

第１号溝

第19号近現代遺構
（防空壕跡）

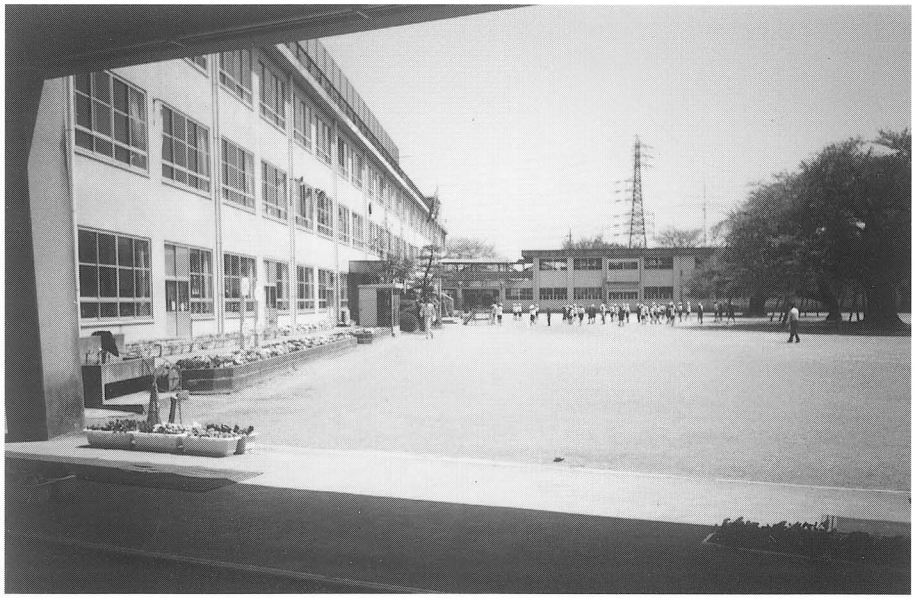


第19号近現代遺構
（防空壕跡）

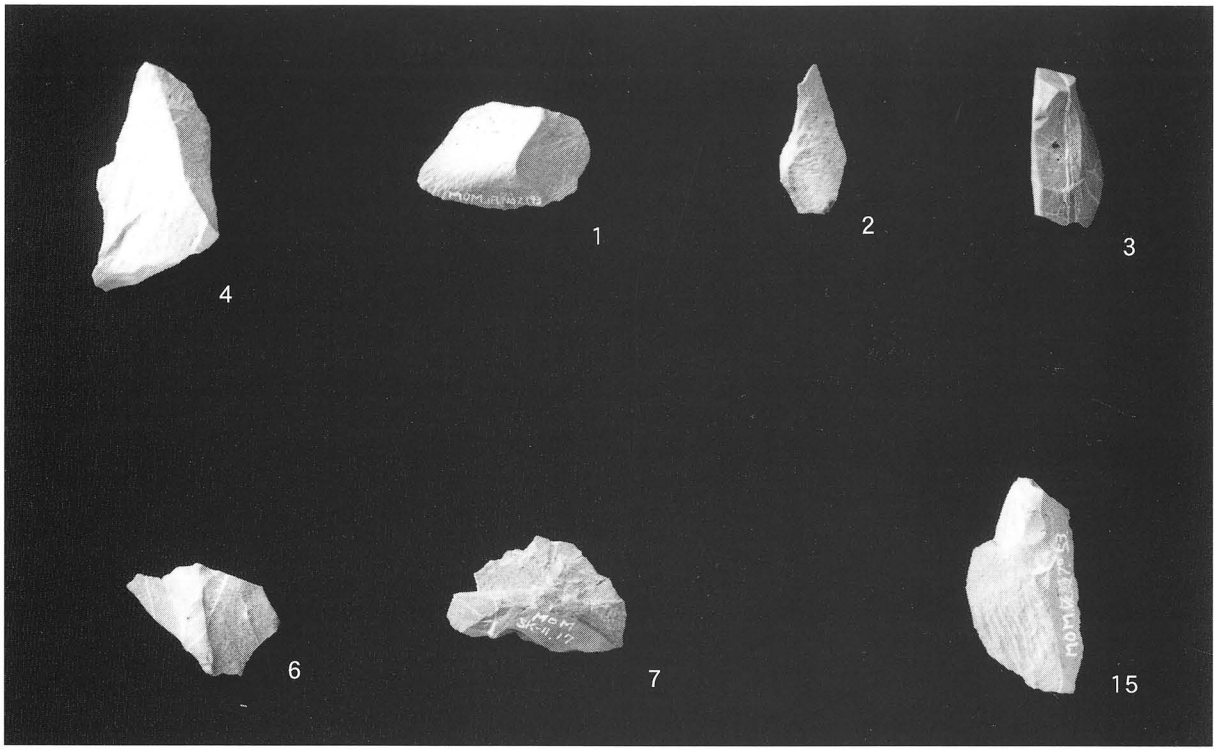


第19号近現代遺構
（防空壕の階段）

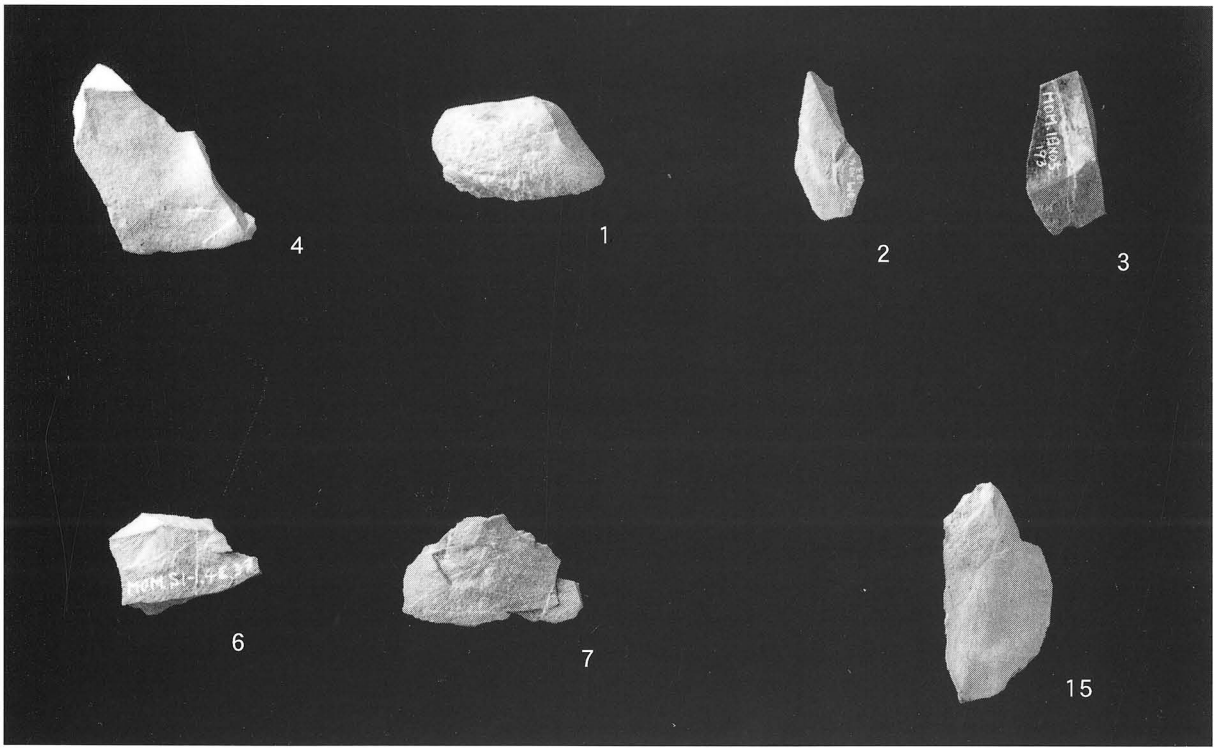
当時の防空壕に
ついて語る塙氏
（中央左）



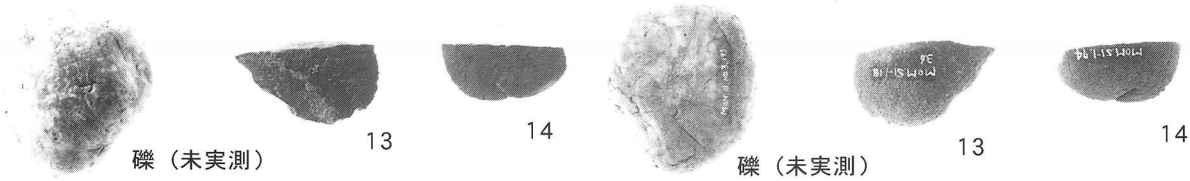
調査前風景




（表）




（裏）




（表）　　（裏）

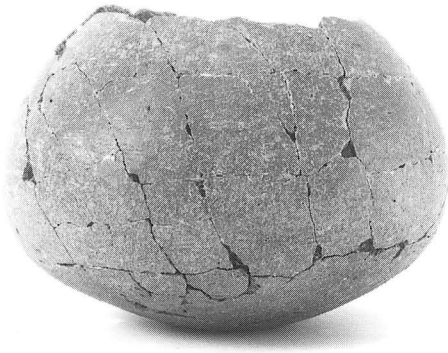
旧石器時代出土遺物

SI-1-1

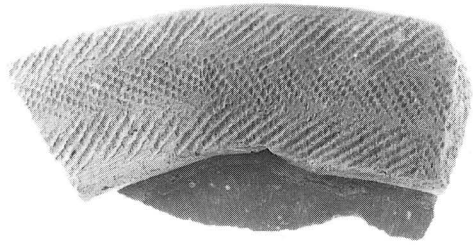
SI-1-2

SI-1-3

SI-1-4

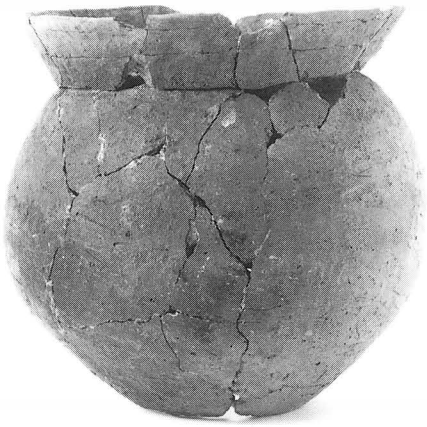


SI-1-5



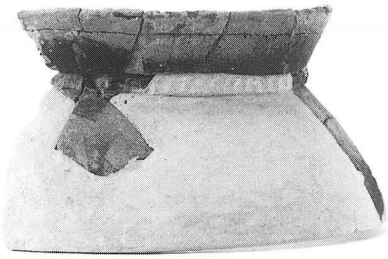
SI-1-6

住居跡出土遺物（1）



SI-1-7

SI-1-7（拡大）



SI-1-8

SI-1-9

SI-1-9（拡大）

SI-1-9（拡大）

住居跡出土遺物（2）

SI-1-10

SI-1-11

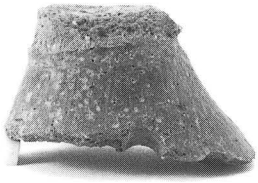
SI-1-13

SI-1-13（拡大）

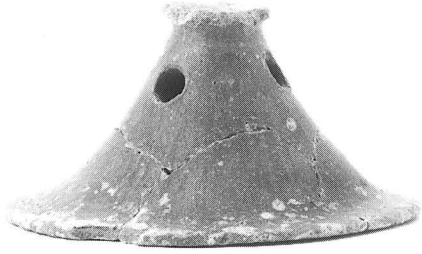
SI-1-13（底部）

SI-1-14

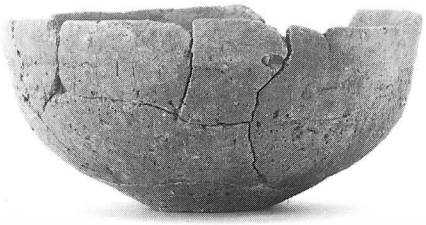
住居跡出土遺物（3）



SI-1-15



SI-1-16

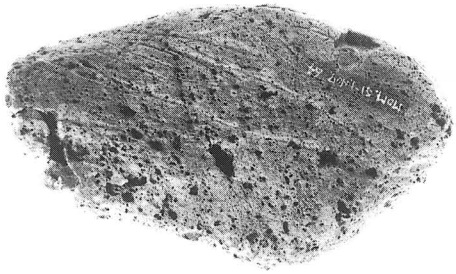


SI-1-17

SI-1-22

SI-1-18

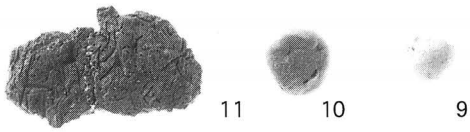
SI-2-5



SI-1-21

SI-2-6

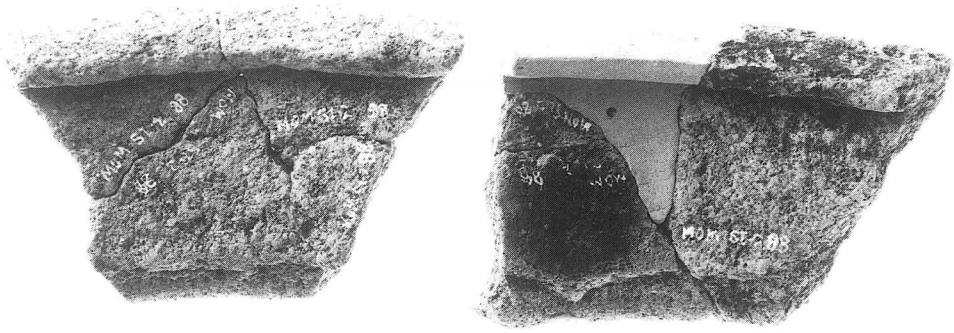
SI-2-7



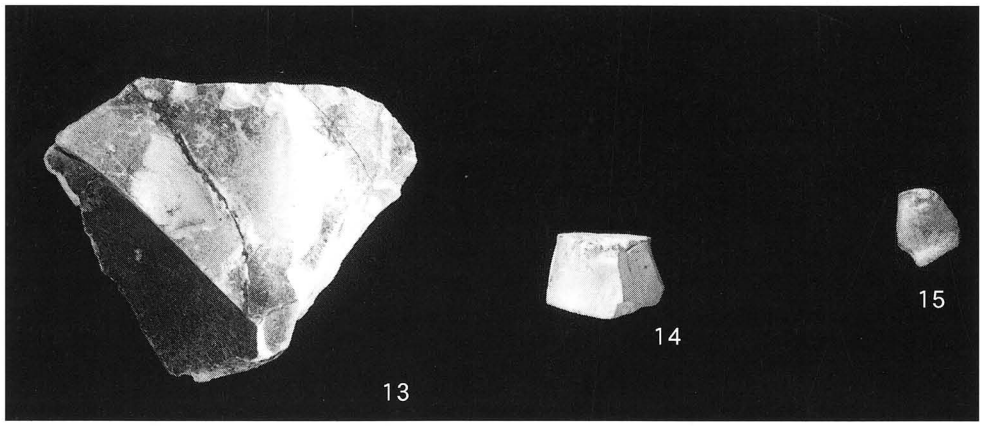

SI-2

住居跡出土遺物（4）

SI-2-3（表）

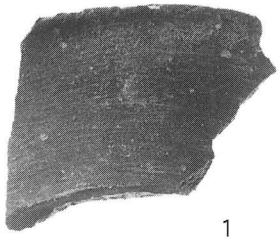


SI-2-3（裏）

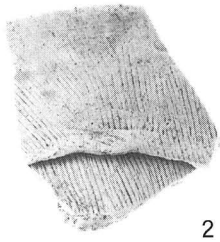



SI-2

SI-2-8

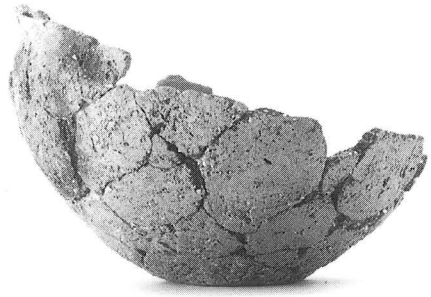


1



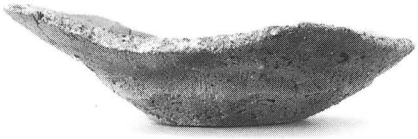
2

SI-2



SI-3-2

住居跡出土遺物（5）



SI-3-1

SI-3-1（底部）

SI-4-2

SI-4-3

SI-4-4

SI-3-3

SI-4-1

SI-4-5

SI-4-8

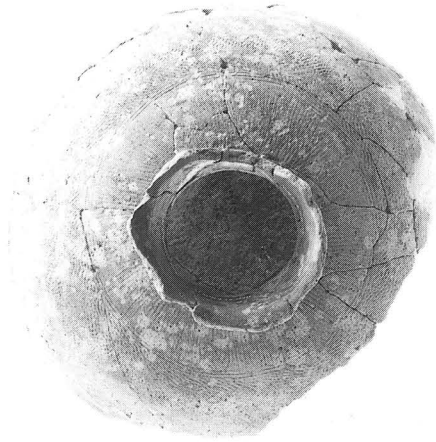
住居跡出土遺物（6）

SI-4

SI-6-2

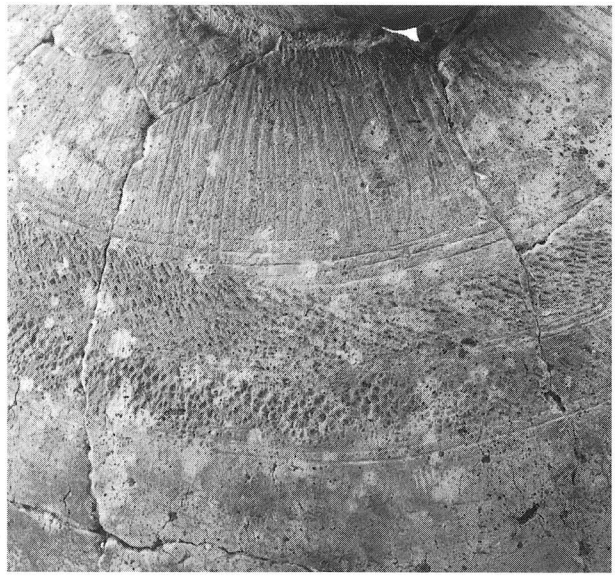
SI-6-1

SI-6-3

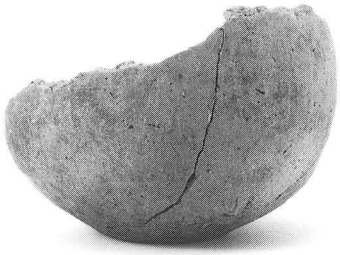


SI-6-1（上面）

SI-6-4



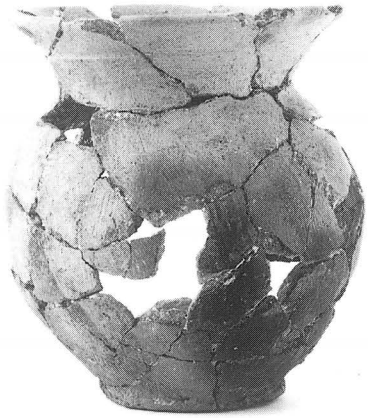
SI-6-1（拡大）



SI-6-6

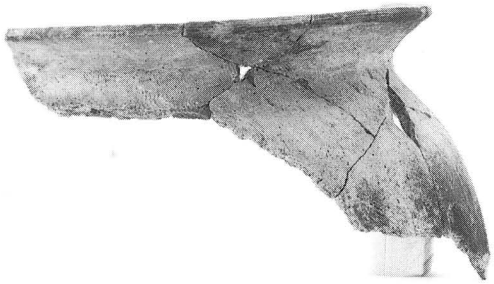
住居跡出土遺物（7）

SI-6-5

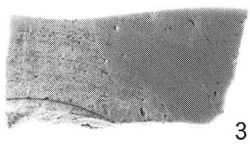


SI-9-3

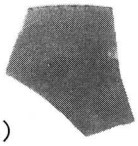
SI-6-7



SI-9-2



3（外）



2（外）

第１号方形竪穴遺構

SI-9-1

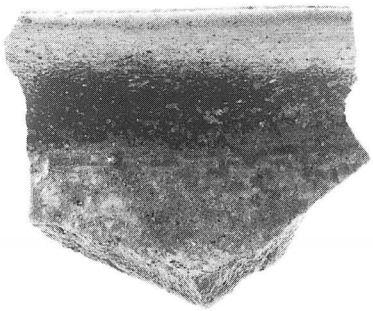
3（内）

2（内）

第１号方形竪穴遺構

1

第１号方形竪穴遺構



ピット群-1

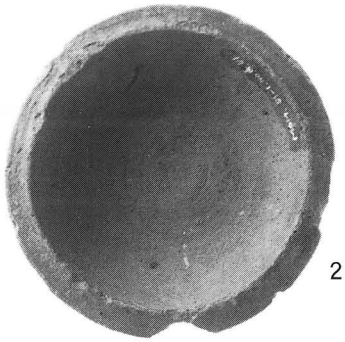
住居跡出土遺物（8）、方形竪穴遺構出土遺物、ピット群出土遺物（1）

ピット群-2

ピット群-5

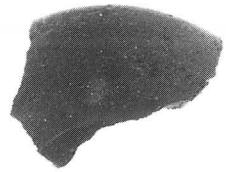
ピット群-7

ピット群-8

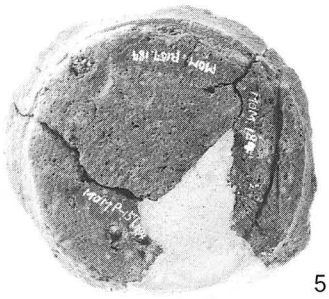


2

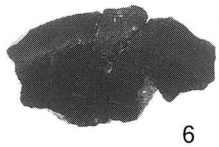
3



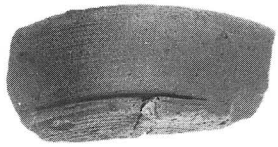
4



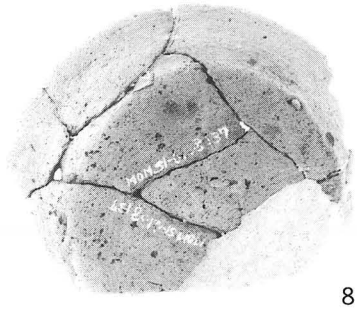
5



6

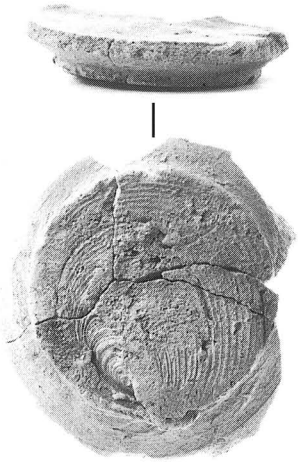


7

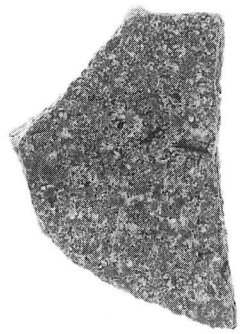


8

ピット群

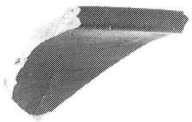


SK 1



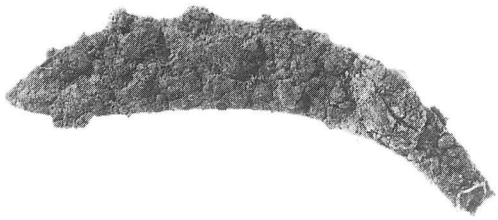
SK 14

ピット群出土遺物（2）、土坑出土遺物（1）

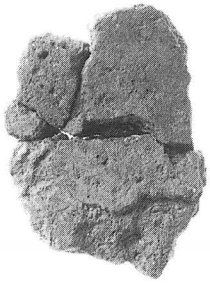


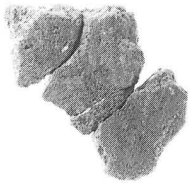
SK31

SK31



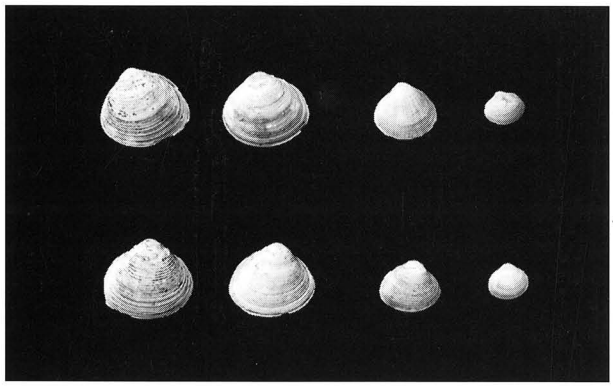
SK24





SK23

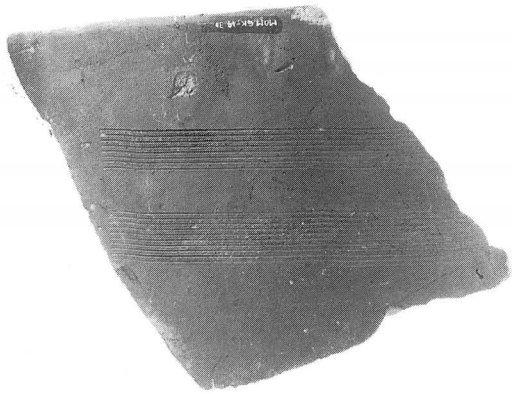
SX1-1



SK35

SX1-1（底面）

SX1-2



GK19-2

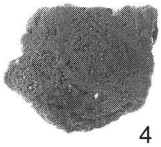
GK19-1

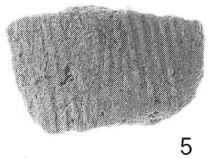
土坑出土遺物（2）、不明遺構出土遺物、近現代遺構出土遺物

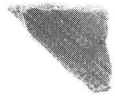
1

2

3

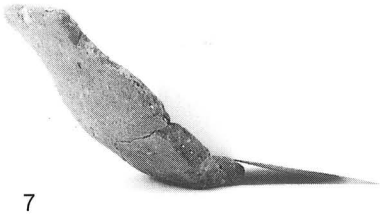

4

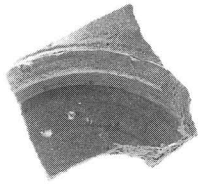

5


6

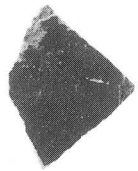
9

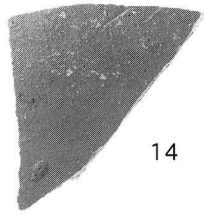
8


7


10

12

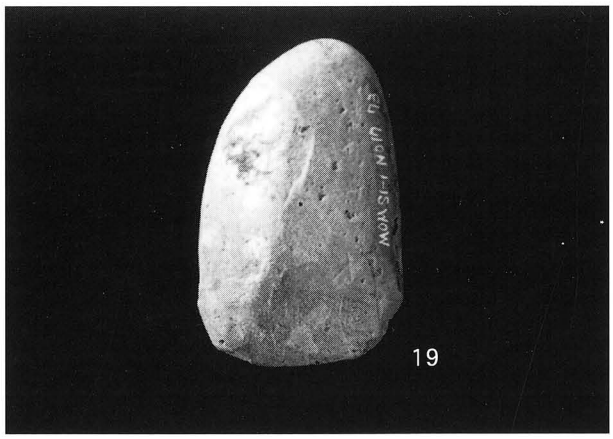

13

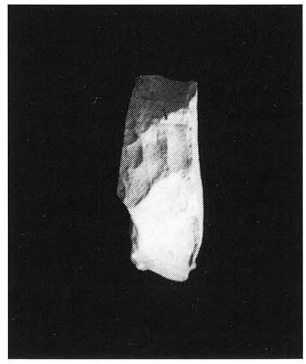

14

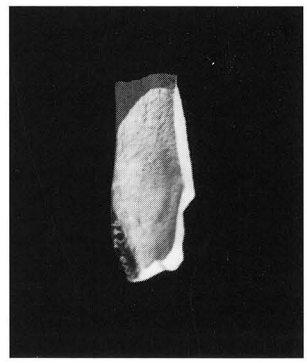
15

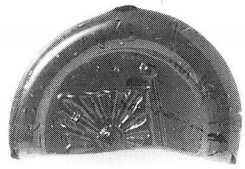
20

旧石器 12


19


21（表）


21（裏）


17

遺構外出土遺物

# 報告書抄録

| | | | |
|---|---|---|---|
| ふりがな | おおみやまえいせき | | |
| 書名 | 大宮前遺跡 | | |
| 副書名 | 真鍋小学校校舎改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 | | |
| 巻次 | | | |
| シリーズ名 | | | |
| シリーズ番号 | | | |
| 編集者名 | 関口　満 | 著者名 | 関口　満　　窪田　恵一 |
| 編集機関 | 大宮前遺跡調査会 | | |
| 所在地 | 〒300-0811　茨城県土浦市大字上高津1843番地<br>上高津貝塚ふるさと歴史の広場内　TEL 029(826)7111 | | |
| 発行年月日 | 西暦2004年3月16日 | | |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| おおみやまえいせき<br>大宮前遺跡 | つちうらし　まなべ<br>土浦市真鍋<br>四丁目3-1<br>番地 | 08203 | 261 | 36°<br>5′<br>40″ | 140°<br>2′<br>20″ | 2003.5.26<br>～<br>2003.7.10 | 700㎡ | 真鍋小学校校舎<br>改築事業に伴う<br>発掘調査 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 大宮前遺跡 | 集落跡 | 旧石器時代<br>古墳時代<br>平安時代～<br>鎌倉時代<br>近現代 | 石器集中区　1ヶ所<br>竪穴住居跡　7軒<br>方形竪穴遺構　1軒<br>掘立柱建物跡　2棟<br>土坑　29基<br>ピット　234基<br>溝　2条<br>防空壕跡　1基 | 剥片<br>土師器、土製品、玉作り関連資料など<br>土師器、陶磁器（常滑産陶器、白磁、緑釉、陶器）、鉄製品など | 古墳時代前期を中心とした集落跡と、平安時代から鎌倉時代の建物跡を確認。この他、防空壕跡が1基確認された。<br>古墳時代前期の竪穴住居跡から緑色凝灰岩製の玉作り関連遺物が出土。また、平安時代から鎌倉時代とした建物跡から、11世紀から13世紀前半頃の土器などが出土。 |

# 大宮前遺跡

真鍋小学校校舎改築事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日 ２００４(平成16)年3月16日発行
編 集 大宮前遺跡調査会
発 行 土浦市教育委員会
問合先 上高津貝塚ふるさと歴史の広場
〒300-0811 土浦市大字上高津1843番地
TEL 029-826-7111
印 刷 菊池印刷株式会社
〒300-0811 土浦市大字上高津911-1番地
TEL 029-821-2525